

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第413集

かどまつ

門松遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業・斗米地区第5号埋蔵文化財発掘調査

二戸地方振興局二戸農村整備事務所

(財) 岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

かどまつ
門松遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業・斗米地区第5号埋蔵文化財発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人達の創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。発掘調査により遺跡が消滅することは、まことに惜しいことであります。その反面それまで間に包まれていた先人達の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、県営ほ場整備事業に関連して、平成13年度に発掘調査を行った二戸市の門松遺跡の発掘調査をまとめたものであります。門松遺跡は、二戸市の中心部を流れる馬渕川の支流である十文字川左岸の段丘上に立地しており、調査の結果、縄文時代後期初頭・奈良時代・平安時代前半の堅穴住居跡が検出され、当時の集落跡であることが分かりました。また、二戸市を含む県北地方では出土例が少ない墨書き土器や県内では盛岡市より北で出土例がなかった北陸型土器が出土するなど、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご指導・ご協力を賜りました二戸地方振興局二戸農村整備事務所、二戸市教育委員会をはじめとする関係者各位に衷心より謝意を表します。

平成14年11月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

例　言

- 1 本報告書は、岩手県二戸市下斗米字門松55ほかに所在する門松遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、県営ほ場整備事業に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、二戸地方振興局二戸農村整備事務所と岩手県教育委員会生涯学習文化課との協議を経て、二戸農村整備事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号は次のとおりである。
- 遺跡番号　IE 98-1271　　遺跡調査略号　KM-01
- 4 野外調査の調査期間・調査面積・調査担当者は次のとおりである。
- 調査期間　平成13年7月16日～10月31日
- 調査面積　4,900m²
- 調査担当者　佐々木信一、木村ひかり
- 5 室内整理の期間と担当者は次のとおりである。
- 整理期間　平成13年11月1日～平成14年3月31日
- 整理担当者　佐々木信一、木村ひかり
- 6 各種鑑定にあたっては、次の機関に依頼した。
- 火山灰山地同定　パリノ・サーヴェイ株式会社
- 石質鑑定　花崗岩研究会
- 炭化材樹種同定　早坂松次郎（岩手県木炭協会）
- 鉄製品の保存処理　岩手県立博物館
- 7 基準点測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。
- 基準点測量　東日本測量設計株式会社
- 空中写真撮影　株式会社ハイマーテック
- 8 野外調査及び本報告書の作成にあたっては、次の機関にご協力・ご指導をいただいた（順不同・敬称略）。
- 柴田知二・鈴木聰（二戸市教育委員会）　柿田祐司（石川県埋蔵文化財センター）、池野正男（富山県埋蔵文化財センター）
- 9 野外調査は次の機関が從事した。
- 上平九介、金田一堅、田中館信一、三浦一郎、坂本末藏、坂本貞一、石川義美、坂本健一、荒木田善司、工藤福藏、仁井田正男、荒川専次郎、下田忠雄、獅子内郁子、泉山ツセ、古館礼子、中鶴とめ、坂本花子、田口キヨ、山屋ソワ、上平恵子、上平タヨ、田中ミヤ、田中すみ、宮澤ヨシノ、田中鶴ひで、田口マリ、中山梅子、川上妙子、北口せつ、戸館はよ、泉山ツルエ
- 10 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 11 本遺跡の調査成果は、先に「現地公開資料」（平成13年10月20日）、「埋蔵文化財公開講座遺跡報告会」（平成14年1月26日）、「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成13年度分）」に発表しているが、本書の内容が優先するものである。

目 次

序

例言

本 文

| | |
|--------------------------|-----|
| I 調査に至る経過 | 1 |
| II 遺跡の立地と環境 | 1 |
| 1 遺跡の位置 | 1 |
| 2 遺跡の立地と周辺の地形 | 1 |
| 3 基本層序 | 4 |
| 4 周辺の遺跡 | 4 |
| III 野外調査と室内整理の方法 | 7 |
| 1 野外調査 | 7 |
| 2 室内整理 | 8 |
| IV 検出された遺構と出土遺物 | 13 |
| 1 縄文時代の遺構と出土遺物 | 13 |
| (1) 壓穴住居跡 | 13 |
| (2) 陥し穴状遺構 | 19 |
| 2 古代以降の遺構と出土遺物 | 24 |
| (1) 壓穴住居跡（奈良・平安時代） | 24 |
| (2) 住居状遺構（奈良時代） | 67 |
| (3) 掘立柱建物跡 | 70 |
| (4) 土坑 | 74 |
| (5) 柱穴状小土坑 | 85 |
| (6) 溝跡 | 92 |
| (7) 溝状遺構 | 94 |
| 3 遺構外の出土遺物 | 97 |
| V まとめ | 104 |
| 1 遺構 | 104 |
| (1) 縄文時代の遺構 | 104 |
| (2) 古代以降の遺構 | 105 |
| 2 遺物 | 109 |
| (1) 縄文時代の遺物 | 109 |
| (2) 古代以降の遺物 | 109 |
| VI 鑑定・分析結果 | 114 |
| 門松遺跡出土火山灰の分析鑑定報告 | 114 |

表

| | | | | | |
|-----|------------|-----|------|-------------|-----|
| 第1表 | 周辺の遺跡一覧表 | 5 | 第7表 | その他 | 103 |
| 第2表 | 縄文土器観察表 | 99 | 第8表 | 縄文時代の住居跡一覧表 | 104 |
| 第3表 | 土師器・須恵器観察表 | 99 | 第9表 | 陥し穴状遺構一覧表 | 105 |
| 第4表 | 土製品観察表 | 102 | 第10表 | 奈良時代の住居跡一覧表 | 106 |
| 第5表 | 鉄製品観察表 | 102 | 第11表 | 平安時代の住居跡一覧表 | 106 |
| 第6表 | 石器観察表 | 103 | 第12表 | 土坑一覧表 | 108 |

図 版

| | | | | | |
|------|--|-------|------|---------------------|----|
| 第1図 | 岩手県における遺跡位置図 | 2 | 第24図 | B II h 6 住居跡出土遺物(4) | 34 |
| 第2図 | 遺跡周辺の地形図 | 3 | 第25図 | B III j 4 住居跡 | 36 |
| 第3図 | 基本土層図 | 4 | 第26図 | B III j 4 住居跡出土遺物 | 37 |
| 第4図 | 周辺の遺跡位置図 | 6 | 第27図 | B I c 5 住居跡 | 39 |
| 第5図 | スクリントーン・ 土器実測図凡例 | 9 | 第28図 | B I c 5 住居跡出土遺物 | 40 |
| 第6図 | 門松遺跡遺構配図 | 11-12 | 第29図 | B I h 8 住居跡 | 42 |
| 第7図 | B III i 0 住居跡 | 14 | 第30図 | B I h 8 住居跡出土遺物 | 43 |
| 第8図 | B III i 0 住居跡出土遺物 | 15 | 第31図 | B II e 8 住居跡(1) | 45 |
| 第9図 | C III a 3 住居跡 | 16 | 第32図 | B II e 8 住居跡(2) | 46 |
| 第10図 | C III b 1 住居跡 | 17 | 第33図 | B II e 8 住居跡出土遺物 | 47 |
| 第11図 | C III b 1 住居跡出土遺物 | 18 | 第34図 | B II f 0 住居跡(1) | 48 |
| 第12図 | A III j 0 · B I e 5 · B II a 4 陥し穴状遺構 | 20 | 第35図 | B II f 0 住居跡(2) | 49 |
| 第13図 | B III f 1 陥し穴状遺構 出土遺物 | 21 | 第36図 | B II f 0 住居跡出土遺物 | 50 |
| 第14図 | B II g 7 · B III f 1 陥し穴状遺構 | 22 | 第37図 | B III f 3 住居跡(1) | 52 |
| 第15図 | C II a 5 陥し穴状遺構 | 23 | 第38図 | B III f 3 住居跡(2) | 53 |
| 第16図 | A III h 1 住居跡 | 25 | 第39図 | B III f 3 住居跡出土遺物 | 54 |
| 第17図 | A III h 1 住居跡出土遺物 | 26 | 第40図 | C II b 6 住居跡(1) | 57 |
| 第18図 | B III h 6 住居跡(1) | 28 | 第41図 | C II b 6 住居跡(2) | 58 |
| 第19図 | B III h 6 住居跡(2) | 29 | 第42図 | C II b 6 住居跡(3) | 59 |
| 第20図 | B III h 6 住居跡(3) | 30 | 第43図 | C II b 6 住居跡出土遺物(1) | 60 |
| 第21図 | B III h 6 住居跡出土遺物(1) | 31 | 第44図 | C II b 6 住居跡出土遺物(2) | 61 |
| 第22図 | B III h 6 住居跡出土遺物(2) | 32 | 第45図 | C II b 6 住居跡出土遺物(3) | 62 |
| 第23図 | B III h 6 住居跡出土遺物(3) | 33 | 第46図 | C II b 6 住居跡出土遺物(4) | 63 |
| | | | 第47図 | C II c 8 住居跡 | 65 |
| | | | 第48図 | C II c 8 住居跡出土遺物 | 66 |
| | | | 第49図 | B II b 0 住居状遺構 | 68 |
| | | | 第50図 | B II c 4 住居状遺構 | 69 |

| | | |
|------|--|-----|
| 第51図 | B II c 4 住居状遺構出土遺物 | 69 |
| 第52図 | 1号掘立柱建物跡 | 71 |
| 第53図 | 2・3号掘立柱建物跡 | 73 |
| 第54図 | A I c 2・B I h 6①・②・ B I i 9土坑 | 75 |
| 第55図 | B II h 0・B III b 1①・②・B III b 2・ B III c 2①・②・③・ ④・⑤土坑 | 79 |
| 第56図 | B III c 2⑥・B III f 2①・②・③・ B III i 2①・B III c 0土坑 | 81 |
| 第57図 | B III i 2②土坑出土遺物 | 82 |
| 第58図 | B III i 2②・C II a 3・C II a 8・ C III a 1・C III a 2土坑 | 84 |
| 第59図 | 東部柱穴状小土坑群(1) | 87 |
| 第60図 | 東部柱穴状小土坑群(2) | 88 |
| 第61図 | 中央部柱穴状小土坑群(1) | 89 |
| 第62図 | 中央部柱穴状小土坑群(2) | 90 |
| 第63図 | 西部柱穴状小土坑群 | 91 |
| 第64図 | 溝跡(南側)出土遺物 | 92 |
| 第65図 | 溝跡 | 93 |
| 第66図 | 溝状遺構(1) | 95 |
| 第67図 | 溝状遺構(2) | 96 |
| 第68図 | 遺構外出土遺物 | 98 |
| 第69図 | 縄文時代の住居跡 | 104 |
| 第70図 | 奈良時代の住居跡 | 107 |
| 第71図 | 平安時代の住居跡 | 107 |
| 第72図 | 門松遺跡出土墨書き土器 | 111 |

写 真 図 版

| | | |
|--------|--|-----|
| 写真図版1 | 遺跡遠景、調査区近景 | 119 |
| 写真図版2 | 遺跡全景、基本土層I・II | 120 |
| 写真図版3 | B III i 0 住居跡 | 121 |
| 写真図版4 | C III a 3 住居跡、作業風景 住居跡検出状況 | 122 |
| 写真図版5 | C III b 1 住居跡 | 123 |
| 写真図版6 | A III j 0・B I e 5・ B II a 4 落し穴状遺構 | 124 |
| 写真図版7 | B II g 7・B III f 1・ C II a 5陥し穴状遺構 | 125 |
| 写真図版8 | A III h 1 住居跡 | 126 |
| 写真図版9 | B II h 6 住居跡(1) | 127 |
| 写真図版10 | B II h 6 住居跡(2)、 作業風景 | 128 |
| 写真図版11 | B III j 4 住居跡 | 129 |
| 写真図版12 | B I c 5 住居跡 | 130 |
| 写真図版13 | B I h 8 住居跡 | 131 |
| 写真図版14 | B II e 8 住居跡 | 132 |
| 写真図版15 | B II f 0 住居跡 | 133 |
| 写真図版16 | B III f 3 住居跡 | 134 |
| 写真図版17 | C II b 6 住居跡(1) | 135 |
| 写真図版18 | C II B 6 住居跡(2)、 C II c 8 住居跡(1) | 136 |
| 写真図版19 | C II c 8 住居跡(2) | 137 |
| 写真図版20 | B II b 0・ B II c 4 住居状遺構(1) | 138 |
| 写真図版21 | B II b 0・B II c 4 住居状遺構(2) 1号掘立柱建物跡 | 139 |
| 写真図版22 | 2号・3号掘立柱建物跡 | 140 |
| 写真図版23 | A I c 2・B I h 6①・②・ B I i 9土坑 | 141 |
| 写真図版24 | B II h 0・B III b 1①・②・ B III b 2土坑 | 142 |
| 写真図版25 | B III c 0・B III c 2①・②・③・ ④・⑤土坑 | 143 |
| 写真図版26 | B III c 2⑥・B III f 2①・②・ ③土坑 | 144 |
| 写真図版27 | B III i 2①・②・C II a 3・ C II a 8土坑 | 145 |
| 写真図版28 | C III a 1・C III a 2土坑 東部柱穴状小土坑群 | 146 |
| 写真図版29 | 中央部 | |

| | | | | |
|-------------------|-----|--------|----------------------------|-----|
| 西部柱穴状小土坑群 | 147 | 写真図版37 | 遺構内出土遺物(5) | 155 |
| 写真図版30 溝跡、作業風景 | 148 | 写真図版38 | 遺構内出土遺物(6) | 156 |
| 写真図版31 溝状遺構(1) | 149 | 写真図版39 | 遺構内出土遺物(7) | 157 |
| 写真図版32 溝状遺構(2) | 150 | 写真図版40 | 遺構内出土遺物(8) | 158 |
| 写真図版33 遺構内出土遺物(1) | 151 | 写真図版41 | 遺構内出土遺物(9) | 159 |
| 写真図版34 遺構内出土遺物(2) | 152 | 写真図版42 | 遺構内出土遺物(10)、 遺構外出土遺物(1) | 160 |
| 写真図版35 遺構内出土遺物(3) | 153 | 写真図版43 | 遺構外出土遺物(2) | 161 |
| 写真図版36 遺構内出土遺物(4) | 154 | | | |

I 調査に至る経過

円松遺跡は、中山間地域総合整備事業・斗米地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行にともない発掘調査を実施することとなったものである。

中山間地域総合整備事業・斗米地区は、二戸市斗米地区の4工区計34.2haの区画整理等を行うこととし、平成12年度に着手しており、高生産性農業の確立及び農村環境水準の向上を図るために、農業生産基盤の整備を進めている。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、当該事業の施行主体である二戸農村整備事務所の依頼を受け、平成12年度に二戸市教育委員会が試掘調査を実施しており、その結果を踏まえ岩手県教育委員会事務局との協議により平成13年度（財）岩手県文化振興事業団に調査を委託することになったものである。

岩手県教育委員会は、平成13年7月13日付け教生第584号により二戸地方振興局へ（財）岩手県文化振興事業団と平成13年度事業としての実施を通知した。

これを受け、二戸地方振興局と（財）岩手県文化振興事業団は、平成13年7月16日付け財岩文埋第114号にて委託契約を締結し、発掘調査に着手した。
（二戸地方振興局二戸農村整備事務所）

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

円松遺跡は岩手県二戸市にあり、JR東北本線斗米駅の西約5kmに位置する。二戸市は、盛岡市の北方約64km、岩手県北端部にあり、東に軽米町・九戸村、西に浄法寺町・青森県田子町、南に一戸町、北に青森県三戸町・名川町が隣接している。主要交通路は、JR東北本線、国道4号が南北に縱断している。

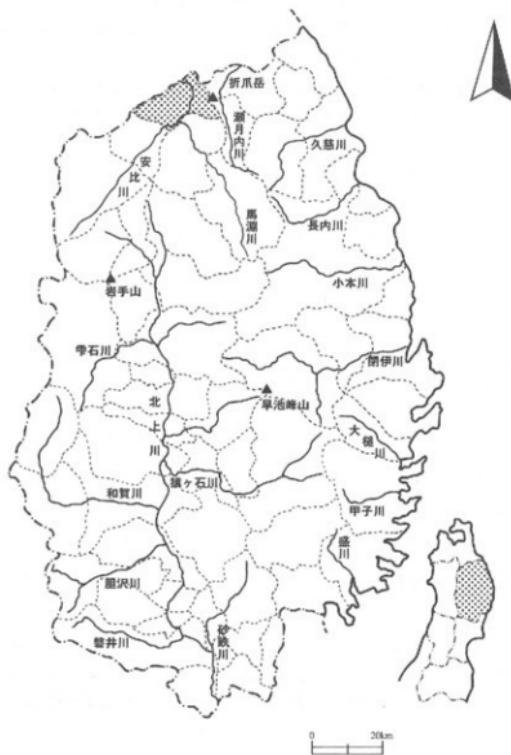
本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「浄法寺」NK-54-18-15（八戸15号）の図幅に含まれ、北緯40度16分51秒、東経141度14分11秒付近に位置する。

2. 遺跡の立地と周辺の地形

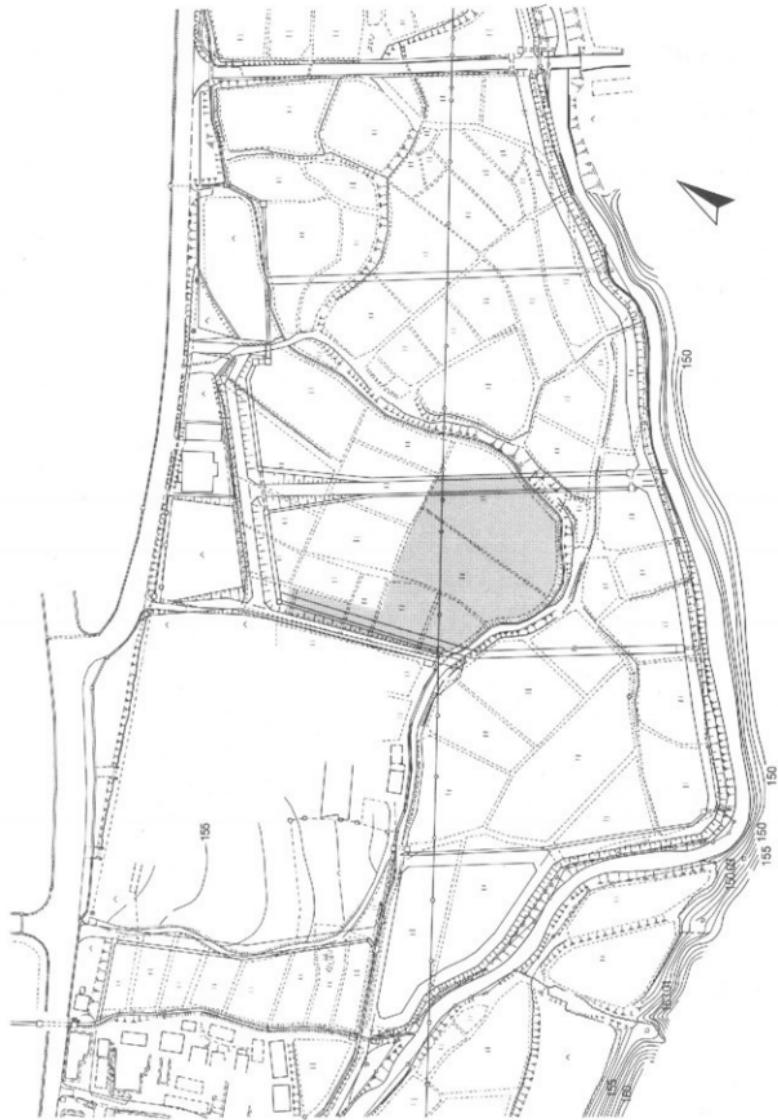
二戸市は、西に奥羽山脈、東に北上山地があり、その間を馬渕川が北流している。この地域の北上山地には古い隆起準平原が分布しており、その最高点は折爪岳（標高852m）である。また、南西の西岳（1,018m）や船庭岳（1,078m）より連なる奥羽山脈は、前面にせまる200～300mの丘陵の背後にあるため、市街地からは見えない。

市の中心部を流れる馬渕川は、葛巻町袖山を水源とし、葛巻町・一戸町・二戸市、そして青森県三戸町などを経て八戸市で太平洋にそいでいる。二戸市周辺では、南西の安代町方面から流れてくる安比川、東方からの白鳥川、金田一川、西方からの十文字川と合流している。

この地域は、馬渕川を中心とした河川によって形成された段丘が狭く発達しており、上位から仁左平、福岡、長嶺、中町、星野、中曾根の各段丘に区分されている。このうち福岡段丘は、金田一・川又・五日市・米沢・上里等の他、海上川や十文字川流域に比較的広く分布し、標高は110m～140mあり、低位面との比高は15～20mで、明瞭な崖線で限られている。また、八戸浮石流凝灰岩に相当する火山灰流凝灰岩の堆積層によって構成されるシラス台地としての性格をもっており、火山灰流凝灰岩の上位には八戸火山灰やそれより上位の浮石や火山灰が覆っている。門松遺跡はこの福岡段丘に載っており、馬渕川の支流である十文字川左岸に位置している。現況は水田である。



第1図 岩手県における遺跡位置図

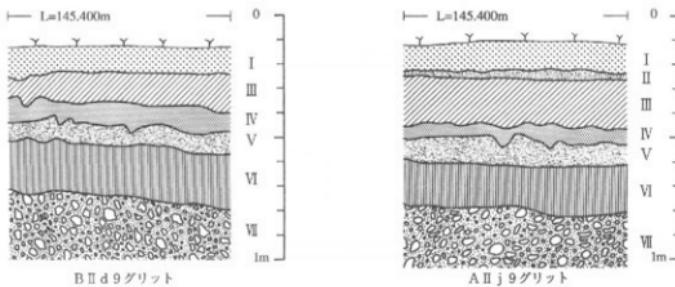


第2図 遺跡周辺の地形図

3. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。なお土層断面図は、グリッドA II j 9とB II d 9で作成したものである。

- I層 10YR2/1 黒色 シルト 表土で遺跡全面を覆う。かたく締まり粘性がある。小礫を含む。層厚は20～28cmである。
- II層 2.5Y6/4 にぶい黄色 十和田a降下火山灰 かたく締まるが粘性はない。層厚は5～12cmである。調査区域北側に分布し、南側にはみられない。
- III層 10YR1.7/1 黒色 シルト よく締まり、粘性がある。下位に中揮浮石を少量含む。層厚は12～40cmである。
- IV層 10YR2/2 黒褐色 シルト よく締まり、粘性がある。中揮浮石を多量に含む。本層が遺構検出面であり、遺物はほとんどこの層からの出土である。層厚は5～20cmである。
- V層 10YR7/4 にぶい黄橙色 中揮浮石 締まりがなく粘性もない。層厚は10～26cmである。
- VI層 10YR1.7/1 黒色 シルト よく締まり、粘性がある。南部浮石を含む。遺構は本層まで掘り込まれていることが多い。層厚は32～44cmである。
- VII層 10YR7/8 黄橙色 南部浮石 かたく締まる。



第3図 基本土層図

4. 周辺の遺跡

二戸市には、現在161ヶ所の遺跡¹が確認されている。時代別では縄文時代の遺跡が最も多く、次いで古代、中世、弥生となっている。これらの遺跡は馬渕川の本・支流の流域に立地しており、特に馬渕川の本流域に多くの遺跡が分布している。

ここで、これまで調査された遺跡の中から代表的なものを時代・時期別に挙げてみる。なお、() 内は

検出された住居跡数である。縄文時代では馬立Ⅰ遺跡（16棟）、家ノ上遺跡（2棟）、長瀬B遺跡（5棟）（以上早期）、火行塚遺跡（2棟）、上里遺跡（2棟）、中曾根Ⅱ遺跡（8棟）（以上前期）、沢内B遺跡（2棟）、荒谷A遺跡（19棟）、下村B遺跡（5棟）（以上中期）、馬立Ⅰ遺跡（27棟）、馬立Ⅱ遺跡（18棟）、青ノ久保遺跡（2棟）（以上後期）、雨灘遺跡、沢内遺跡（2棟）、中曾根遺跡（1棟）（以上晚期）などがある。弥生時代では大淵遺跡（1棟）、長瀬B遺跡（1棟）、馬立遺跡（4棟）などが、古墳から奈良時代にかけては、堀野古墳、長瀬B遺跡（25棟）、長瀬C遺跡（30棟）、中曾根Ⅱ遺跡（76棟）、上田面遺跡（26棟）などがある。平安時代では中曾根遺跡（6棟）、中曾根Ⅱ遺跡（2棟）、駒焼場遺跡（33棟）、上里遺跡（1棟）、火行塚遺跡（9棟）、青ノ久保遺跡（5棟）などが、中世では長瀬C遺跡（10棟）、下村B遺跡（2棟）、沖I遺跡（4棟）などがある。

門松遺跡は、馬渕川の支流である十文字川流域に位置しており、同流域には門松遺跡の他に、上流から本田遺跡、米田I・II遺跡、上斗米館、田中館、上台遺跡、寺久保遺跡、細越遺跡などがある。

第1表は門松遺跡周辺の遺跡についてまとめたものである。なお遺跡の位置については第4図に示してある。

第1表 周辺の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 |
|----|------|---------|----------|----|-------|-----|-------|
| 1 | 秋葉 | 散布地 | 縄文 | 23 | 細越 | 散布地 | 縄文、古代 |
| 2 | 四戸城 | 城館跡 | 中世末～近世 | 24 | 十文字I | 散布地 | 縄文、古代 |
| 3 | 馬場 | 集落跡 | 奈良 | 25 | 十文字II | 散布地 | 縄文、古代 |
| 4 | 上町 | 散布地 | 縄文 | 26 | 下斗米館 | 城館跡 | 中世 |
| 5 | 上田面 | 集落跡 | 弥生、古代 | 27 | 寺久保 | 散布地 | 縄文 |
| 6 | 堀野 | 集落跡、祭祀跡 | 縄文、古代 | 28 | 上台 | 散布地 | 縄文 |
| 7 | 長瀬D | 集落跡 | 古代 | 29 | 下斗米A | 散布地 | 古代 |
| 8 | 長瀬C | 集落跡 | 古代 | 30 | 下斗米B | 散布地 | 縄文 |
| 9 | 長瀬B | 集落跡 | 古代 | 31 | 細夷森 | 集落跡 | 古代 |
| 10 | 米沢 | 集落跡 | 古代 | 32 | 門松 | 集落跡 | 縄文、古代 |
| 11 | 長瀬A | 集落跡 | 古代 | 33 | 田中館 | 城館跡 | 中世 |
| 12 | 米沢 | 集落跡 | 古代 | 34 | 上斗米館 | 城館跡 | 中世 |
| 13 | 荒谷A | 集落跡 | 古代 | 35 | 元六 | 散布地 | 縄文、古代 |
| 14 | 中曾根Ⅱ | 集落跡 | 古代 | 36 | 前田 | 散布地 | 縄文、古代 |
| 15 | 大村 | 散布地 | 縄文 | 37 | 米田館 | 城館跡 | 中世 |
| 16 | 森合 | 散布地 | 縄文、古代 | 38 | 米田I | 散布地 | 縄文、古代 |
| 17 | 火行塚 | 集落跡 | 縄文、弥生、古代 | 39 | 米田II | 散布地 | 縄文、古代 |
| 18 | 横長根 | 散布地 | 縄文 | 40 | 本田館 | 城館跡 | 中世 |
| 19 | 土川II | 散布地 | 縄文、古代 | 41 | 本田 | 散布地 | 縄文 |
| 20 | 土川I | 散布地 | 縄文 | 42 | 尼沢館 | 城館跡 | 中世 |
| 21 | 月折 | 散布地 | 縄文、弥生 | 43 | 上野新田 | 散布地 | 縄文、古代 |
| 22 | 谷地尻 | 散布地 | 縄文 | 44 | 金田一川 | 散布地 | 縄文 |

註

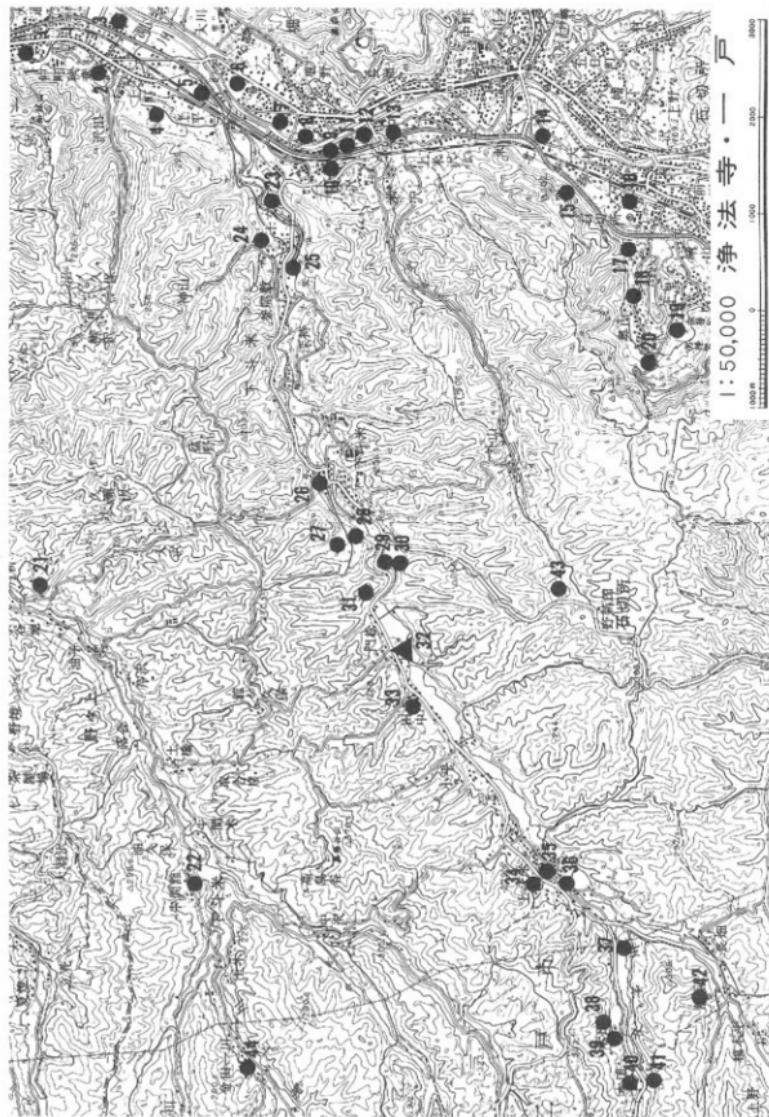
1 岩手県教育委員会生涯学習文化課の遺跡台帳による。

引用・参考文献

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1989) :『駒焼場遺跡発掘調査報告書』 岩埋文第133号

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1990) :『馬場野遺跡発掘調査報告書』 岩埋文第137号

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (2000) :『上台遺跡発掘調査報告書』 岩埋文第334号



III 野外調査と室内整理の方法

1 野外調査

(1) グリッドの設定

基準点測量を委託し、公共座標軸を利用して調査区を設定した。調査区域の西側に基準点1を、東側に基準点2をそれぞれ設定した。基準点の成果値は以下の通りである。

基準点1 X = 31,180.000 Y = 34,300.000 H = 145.643m

基準点2 X = 31,180.000 Y = 34,340.000 H = 144.929m

この2つの基準点を結ぶ線を基準線とし、基準線上を基準点1から西に40m進み、更に基準線に直行する線上を北へ60m進んだ点を原点とした。原点より基準線に平行ないし直行するように40m毎に区切り、大区画とした。大区画を更に4m毎に区切り、小区画とした。

グリッドの名称は南北方向はアルファベット、東西方向は数字を用い、その組み合わせによった。大グリッド名は人文字のアルファベットとローマ数字、小グリッド名は大グリッド名を冠した後、小文字のアルファベットと算用数字を用いて、A I b 2のように表した。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査区域内の数ヵ所にトレンチを入れて検出面までの深さや層序の確認をした後、表土の除去は重機で行った。遺構検出面までの土層の除去は人力で行った。遺構の検出面はⅢ層下位及びⅣ層である。検出された遺構には大グリッド名と小グリッド名を組み合わせ、B I c 5住居跡のように命名した。

(3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構の精査は竪穴住居跡・住居状遺構を4分法、掘立柱建物跡、土坑・陥し穴状遺構を2分法、溝跡・溝状遺構については数箇所に土層確認のためのベルトを残して掘り下げた。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは、遺構内のものは遺構名、遺構外のものは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

(4) 実測

実測は簡易置り方測量を行った。実測図は原則として20分の1の縮尺で平面図・断面図を作成したが、住居跡のカマドなどの細部については10分の1、溝跡の平面図については50分の1の縮尺で図面を作成した。

(5) 写真撮影

写真撮影には、 $6 \times 7\text{cm}$ モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラーリバーサル各1台を使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。

2 室内整理

(1) 作業手順

遺構については、現地で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については、接合、復元、仕分け、登録を行った後、原則として実測図の作成、トレース、写真撮影、図版作成の順に進めた。

(2) 遺構図版・遺物図版

本報告書に掲載した遺構図版の縮尺は以下のとおりである。

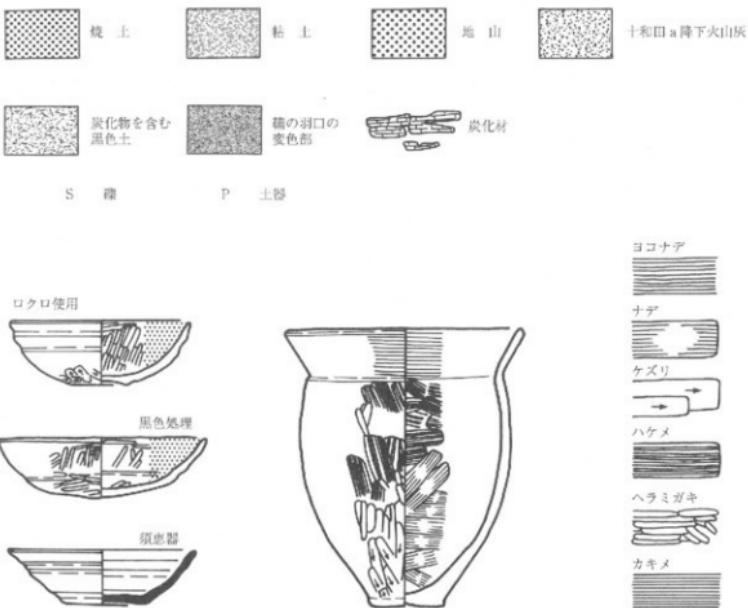
- ・堅穴住居跡・住居状遺構の平面図・断面図……1/60 カマド・炉の断面図……1/30
- ・掘立柱建物跡の平面図・断面図……1/60、1/90
- ・陥し穴状遺構の平面図・断面図……1/40、1/80
- ・柱穴状小土坑の平面図……1/120
- ・溝跡の平面図……1/300 断面図……1/60
- ・溝状遺構の平面図……1/120 断面図……1/40

また、遺物図版の縮尺は、土器は1/3又は1/4、拓本は1/3、砾石器は1/3、剥片石器、土製品、鉄製品は1/2である。

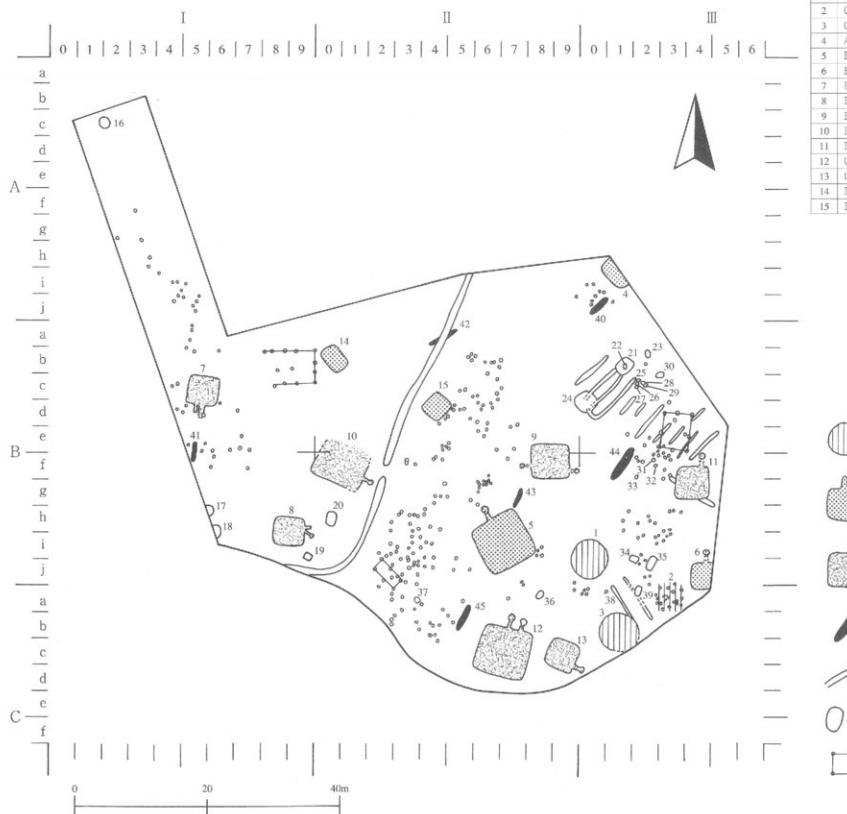
遺物写真は原則として1/3の縮尺を用いたが、これに該当しないものには縮尺率を別に付してある。また、遺構やその他の写真的縮尺は不定である。なお、遺物図版掲載番号と写真図版掲載番号とは統一してある。

遺構図版における土層断面図には、層位ごとに数字を付して色調、土性、混入物等を記してあるが、数字のない層は木根等による搅乱層である。

遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリントーンの種別と土器実測図の凡例は第5図のとおりである。



第5図 スクリントーン・土器実測図凡例



第6図 門松遺跡遺構配図

| No | 遺構名 | No | 遺構名 | No | 遺構名 |
|----|--------------|----|------------|----|----------------|
| 1 | BⅢ i 0 住居跡 | 16 | AⅠ c 2 土坑 | 31 | BⅢ f 2 ②土坑 |
| 2 | CⅢ a 3 住居跡 | 17 | BⅠ b 6 ①土坑 | 32 | BⅢ f 2 ②穴状遺構 |
| 3 | CⅢ b 1 住居跡 | 18 | BⅠ b 6 ②土坑 | 33 | BⅢ f 2 ③土坑 |
| 4 | AⅢ h 1 住居跡 | 19 | BⅠ i 9 土坑 | 34 | BⅢ i 2 ①土坑 |
| 5 | BⅢ h 6 住居跡 | 20 | BⅡ h 0 土坑 | 35 | BⅢ i 2 ②土坑 |
| 6 | BⅢ j 4 住居跡 | 21 | BⅢ b 1 ①土坑 | 36 | CⅡ a 8 土坑 |
| 7 | BⅠ c 5 住居跡 | 22 | BⅢ b 1 ②土坑 | 37 | CⅡ a 3 土坑 |
| 8 | BⅠ h 8 住居跡 | 23 | BⅢ b 2 土坑 | 38 | CⅢ a 1 土坑 |
| 9 | BⅠ d 8 住居跡 | 24 | BⅢ c 0 土坑 | 39 | CⅢ a 2 土坑 |
| 10 | BⅢ f 0 住居跡 | 25 | BⅢ c 2 ①土坑 | 40 | AⅢ j 0 箕形1穴状遺構 |
| 11 | BⅢ f 3 住居跡 | 26 | BⅢ c 2 ②土坑 | 41 | BⅠ e 5 箕形1穴状遺構 |
| 12 | CⅢ b 6 住居跡 | 27 | BⅢ c 2 ③土坑 | 42 | BⅡ a 4 箕形1穴状遺構 |
| 13 | CⅢ c 8 住居跡 | 28 | BⅢ c 2 ④土坑 | 43 | BⅡ g 7 箕形1穴状遺構 |
| 14 | BⅢ b 0 住居状遺構 | 29 | BⅢ c 2 ⑤土坑 | 44 | BⅢ f 1 箕形1穴状遺構 |
| 15 | BⅢ c 4 住居状遺構 | 30 | BⅢ c 2 ⑥土坑 | 45 | CⅡ a 5 箕形1穴状遺構 |

- 繩文時代の住居跡
- 奈良時代の住居跡・住居状遺構
- 平安時代の住居跡
- 陥し穴遺構
- 溝・溝状遺構
- 土坑・柱次小土坑
- 地立柱建築跡

IV 検出された遺構と出土遺物

1 縄文時代の遺構と遺構内出土遺物

縄文時代の遺構として、竪穴住居跡3棟、陥し穴状遺構6基が検出された。また、遺構内から土器や石器が出土している。

(1) 竪穴住居跡

B III i 0 住居跡

遺構（第7図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南東部グリッドB III i 0・j 0にまたがって位置する。IV層上面で中揮浮石を含む黒色土の円形の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は5.5×5.9mである。

＜埋土＞ 8層に細分される。上部は黒色土と黒褐色土、下部は黒褐色土である。いずれも中揮浮石を含んでおり、その割合は下部ほど高い。いずれもよく締まっている。

＜壁＞ ほぼ垂直気味に立ち上がっている。壁高は45～60cmで、南壁が最も高い。

＜床面＞ 南部浮石を含む黒色土である。多少凸凹があるがほぼ平坦で、南側が少し低くなっている。全体によく締まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 28まで28個検出された。平面形は円形や梢円形で、規模は径20×23cm～67×86cm、深さ13～44.7cmである。柱穴の規模と配置から、P15、P 17(18)、P 20、P 21、P 22が主柱穴と考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 | P 10 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 43×48 | 33×35 | 27×38 | 25×35 | 23×30 | 52×62 | 32×43 | 31×61 | 27×36 | 25×27 |
| 深さ | 21.8 | 21.4 | 20.6 | 19 | 13 | 36.9 | 35.4 | 34.8 | 35.6 | 28.2 |

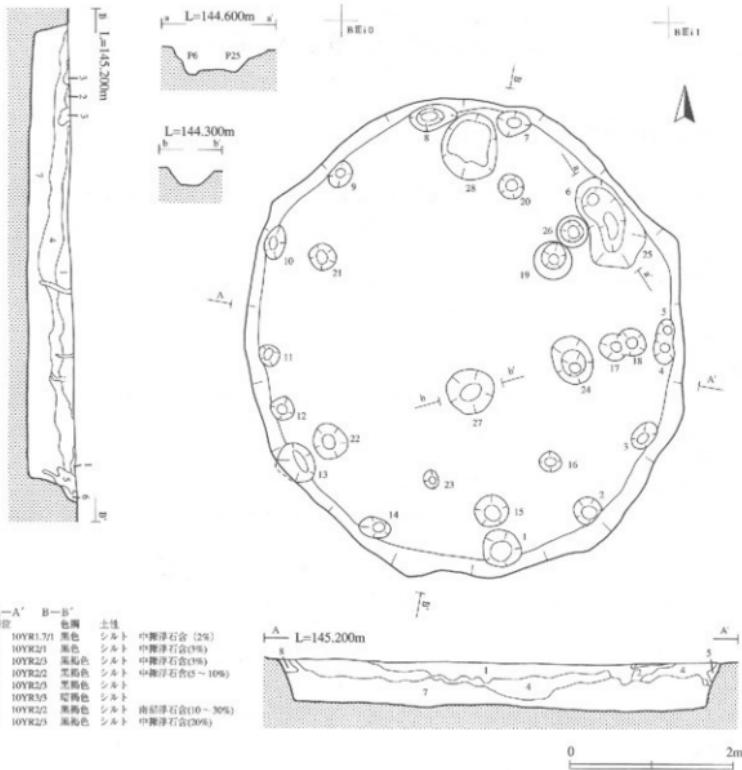
| 番号 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 | P 15 | P 16 | P 17 | P 18 | P 19 | P 20 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|
| 径 | 25×27 | 28×29 | 43×53 | 26×40 | 40×42 | 25×29 | 34×— | 34×— | 30×35 | 30×30 |
| 深さ | 24 | 24.8 | 17.5 | 15.7 | 44.7 | 17.3 | 26.4 | 25.3 | 24.6 | 40.3 |

| 番号 | P 21 | P 22 | P 23 | P 24 | P 25 | P 26 | P 27 | P 28 |
|----|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|
| 径 | 32×36 | 41×46 | 20×23 | 49×62 | 66×— | 26×28 | 55×60 | 67×86 |
| 深さ | 38.2 | 37.1 | 17 | 13.4 | 33.2 | 13.3 | 19.6 | 20.1 |

＜炉＞ 検出されなかった。

遺物（第8図・写真図版33）

土器1・2と石器3・4が出土している。1は深鉢の体部から口縁部である。山形口縁をなし、体部には沈線区画された曲線的な磨消繩文が展開している。内外面ともに炭化物が付着している。2は深鉢の体部で、

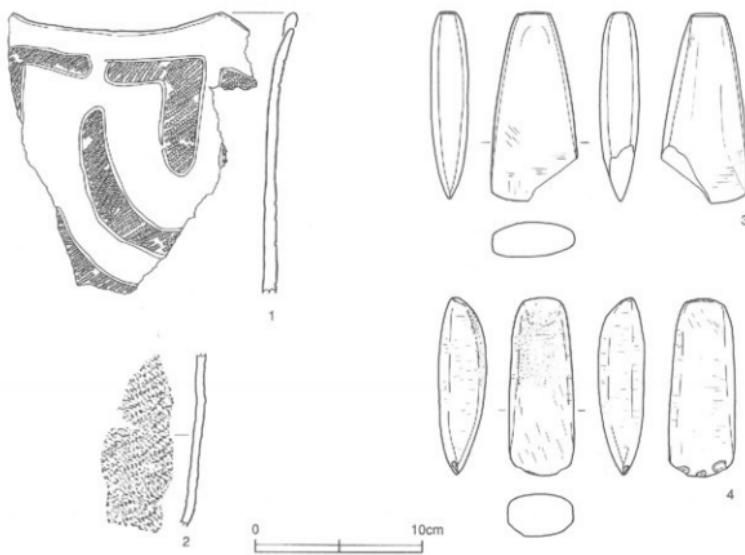


第7図 B III i 0住居跡

内外面ともに炭化物が付着している。どちらも地文はR L単節繩文縦回転である。3・4は磨製石斧である。3は刃部が一部欠損しているが、両者とも全面よく研磨され、刃部は両凸刃で円刃である。

時期

出土遺物から、縄文時代後期初頭と考えられる。



第8図 B III i 0 住居跡出土遺物

C III a 3 住居跡

遺構（第9図、写真図版4）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南東部グリッドC III a 3に位置する。IV層上面で炉と柱穴が検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜床面＞ 中振浮石を含む暗褐色土で、しまりがなく多少凹凸がある。

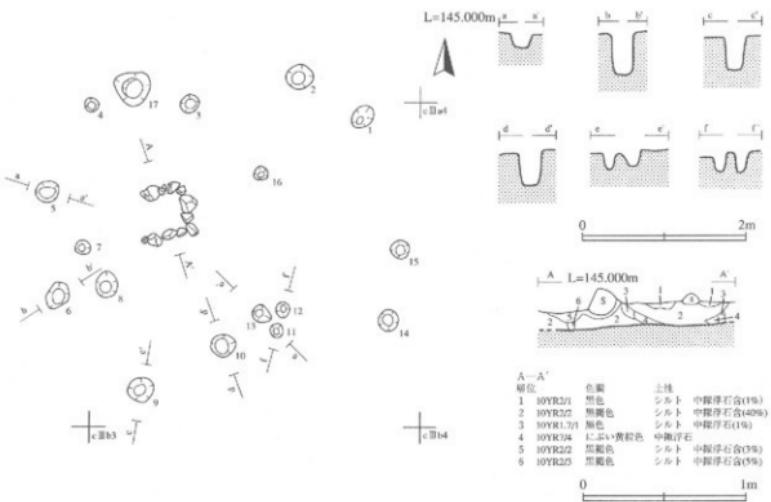
＜柱穴＞ P 1～P 17まで17個検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径15×18cm～40×44cm、深さ7.9～44.6cmである。柱穴の規模や配置から、P1、P2、P5、P6、P9、P14、P15、P17が主柱穴をなすものと考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 24×33 | 31×31 | 22×24 | 17×18 | 26×27 | 27×31 | 18×19 | 27×31 | 30×30 |
| 深さ | 22.5 | 23.2 | 21.7 | 18.8 | 27 | 52.7 | 8.6 | 36 | 44.6 |

| 番号 | P 10 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 | P 15 | P 16 | P 17 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 28×31 | 15×18 | 18×20 | 20×24 | 25×27 | 24×24 | 17×18 | 40×44 |
| 深さ | 44.3 | 23.2 | 27.5 | 19.3 | 32.5 | 31 | 7.9 | 21.9 |



第9図 C III a 3住居跡

＜炉＞ 石囲炉で、中央部からやや北西側に位置している。炉石は西側の一部が遺存しないが、ほぼ円形状に配されていたものと考えられる。焼土は確認されなかった。

遺物

出土していない。

時期

炉と柱穴のみの検出であり、特定できない。

C III b 1住居跡

遺構（第10図、写真図版5）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南東部グリッドC III b 1・b 2・c 1・c 2にまたがって位置する。IV層上面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。南東側の一部は削平されて残存しない。

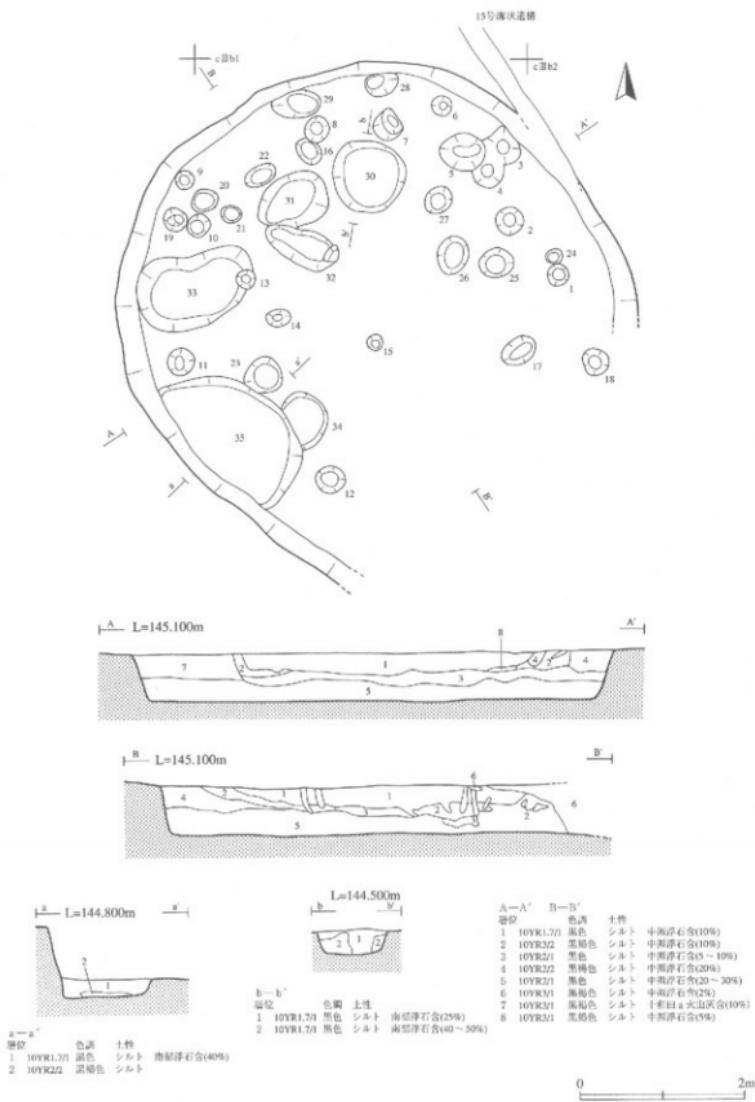
＜重複関係＞ 北東部の一剖が15号溝状遺構と重複している。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は径(5.0)×5.9mと推定される。

＜埋土＞ 8層に細分される。中揮浮石を含む黒色土が主体で、下部ほどその割合が高い。北東側の7層には十和田a降下火山灰が含まれている。全体によく縮まっている。

＜壁＞ 少し外傾しながら立ち上がっている。南東側の壁は削平され残存しない。壁高は55～60cmで、北西側と南西側が高い。

＜床面＞ 南部浮石を含む黒色土で、多少の凹凸があるが、平坦でほぼ水平である。



第10図 C III b 1住居跡

柱穴・土坑 P 1 ~ P 35 まで 35 個検出された。平面形は円形や梢円形で、規模は径 22 × 23cm ~ 113 × 147cm、深さ 12 ~ 43.4cm である。柱穴の規模や配置から P1、P5、P8、P10、P11、P12 が主柱穴の一部と考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位: cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 | P 10 |
|----|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 径 | 25 × 29 | 35 × 35 | 33 × 43 | 36 × 40 | 46 × 52 | 24 × 24 | 35 × 36 | 32 × 33 | 22 × 23 | 28 × 30 |
| 深さ | 43.4 | 20.9 | 24.1 | 20.8 | 27 | 15.4 | 15.5 | 33 | 12 | 26.3 |

| 番号 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 | P 15 | P 16 | P 17 | P 18 | P 19 | P 20 |
|----|---------|---------|---------|---------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 径 | 33 × 40 | 34 × 38 | 23 × 25 | 24 × 32 | 70 × 103 | 27 × 36 | 33 × 43 | 30 × 35 | 27 × 31 | 27 × 34 |
| 深さ | 33.3 | 26.2 | 22 | 25.8 | 25 | 27.4 | 17 | 18.5 | 15.2 | 23.5 |

| 番号 | P 21 | P 22 | P 23 | P 24 | P 25 | P 26 | P 27 | P 28 | P 29 | P 30 |
|----|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 径 | 22 × 25 | 25 × 41 | 44 × 45 | 20 × 23 | 37 × 40 | 39 × 49 | 33 × 36 | 29 × 40 | 37 × 60 | 77 × 87 |
| 深さ | 9.9 | 26.4 | 29 | 22 | 25.8 | 17.3 | 14.1 | 25.7 | 23.6 | 30.8 |

| 番号 | P 31 | P 32 | P 33 | P 34 | P 35 |
|----|---------|---------|----------|---------|-----------|
| 径 | 67 × 87 | 45 × 93 | 92 × 147 | 60 × 72 | 113 × 196 |
| 深さ | 19.3 | 12.5 | 25.1 | 24.5 | 24.4 |

<炉> 検出されなかった。

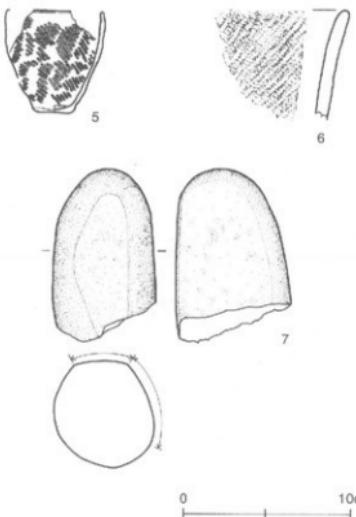
遺物 (第11図、写真図版33)

土器 5・6 と石器 7 が出土している。5 はミニチュア土器である。底部から緩く内湾しながら立ち上がり、体部上半部に最大径を持っている。地文は LR 単節繩文継回転である。外面は一部焼け、胎土には砂粒が少量含まれている。6 は深鉢の口縁部である。緩く外傾しており、口唇部は丸みを持っている。地文は RL 単節繩文継回転である。

7 は磨石で、半分ほど欠失している。横断面形は梢円形で、隣り合った二面に使用痕が認められる。

時期

B III i 0 住居跡の近くであることと形状が似ていることから、繩文時代後期初頭と考えられる。



第11図 C III b 1 住居跡出土遺物

(2) 陥し穴状遺構

6基検出された。いずれも溝状の陥し穴状遺構で、調査区域内に散在している。長軸方向は北一南(1基)、北東一南西(5基)である。

A III j 0陥し穴状遺構(第12図、写真図版6)

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドA III j 0に位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状で、長軸方向は北東一南西である。規模は開口部径80cm×3.2m、底部径25cm×2.85m、深さは中央部で58cm、両端部で56~60cmあり、南西部が少し深くなっている。

＜壁・底面＞ 短軸の断面は漏斗形である。両壁とも底部から緩く外傾しながら立ち上がり、高さ44cm位で大きく外傾している。長軸の断面は逆台形で、南西壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ30cm位で外傾しており、北東壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は凹凸があるがほぼ平坦であり、南西側が少し低くなっている。

＜埋土＞ 埋土は一部しか同化できなかった。黒色土が主体となっており、全体によく締まっている。

出土遺物はなく時期は不明である。

B I e 5陥し穴状遺構(第12図、写真図版6)

＜位置・検出状況＞ 調査区域西部グリッドB I e 5・f 5にまたがって位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出された。南側三分の一は削平され、壁は底面から高さ10cmほどが残存する。

＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状と考えられ、長軸方向は北一南である。規模は開口部径93cm×(3.3)m、底部径17cm×3m、深さは中央部で65cm、両端部で10~64cmである。

＜壁・底面＞ 短軸の断面はU字形である。両壁とも緩く外傾しながら立ち上がっている。長軸の断面は逆台形と推定され、北壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁の残存部も外傾しながら立ち上がっている。底面は凹があるがほぼ平坦であり、南側が少し低くなっている。

＜埋土＞ 埋土は2層に分けられる。中層浮石を含む黒褐色土が主体で、よく締まっている。

出土遺物はなく時期は不明である。

B II a 4陥し穴状遺構(第12図、写真図版6)

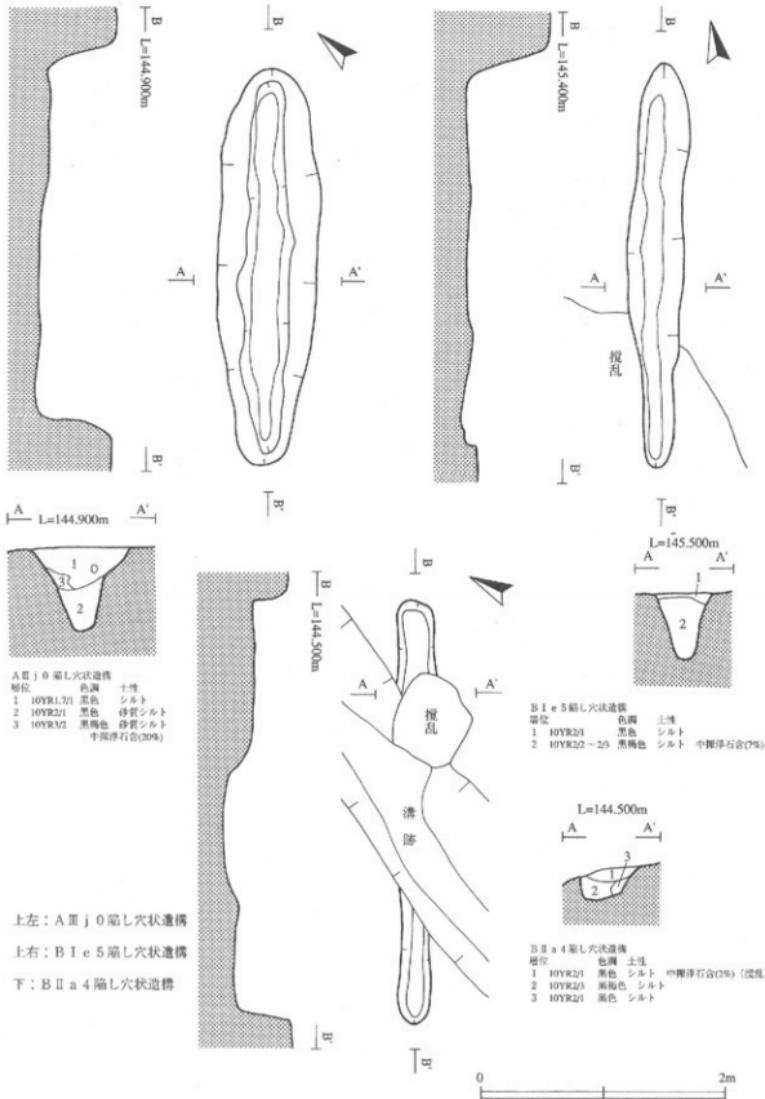
＜位置・検出状況＞ 調査区域北部グリッドB II a 4に位置する。IV層面で中層浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。本遺構は中央部を溝跡に切られ、両端部が残存するのみである。

＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状と推定され、長軸方向は北東一南西である。規模は開口部径(28)cm×3.5m、底部径22cm×3.35m、深さは両端部で35~45cmあり、南西側が深くなっている。

＜壁・底面＞ 短軸の断面は逆台形である。北西壁は垂直に立ち上がり、南東壁は外傾しながら立ち上がっている。長軸の断面はほぼ長方形で、南西壁はほぼ垂直に立ち上がっており、北東壁は垂直に立ち上がり高さ12cm位で外反している。底面は凹凸が少なくほぼ平坦であり、南西側が少し低くなっている。

＜埋土＞ 埋土は3層に分される。黒褐色土が主体でよく締まっている。なお、1層は搅乱層である。

出土遺物はなく時期は不明である。



第12図 A III j 0・B I e 5・B II a 4 埋し穴状造構

B II g 7 陥し穴状遺構 (第14図、写真図版7)

＜位置・検出状況＞ 調査区域北部グリッドB II g 7・h 7にまたがって位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状で、長軸方向は北東—南西である。規模は開口部径75cm×3.65m、底部径20cm×3m、深さは中央部で95cm、両端部で82～92cmであり、南西側が少し深くなっている。

＜壁・床面＞ 短軸の断面は細長いU字形である。北西壁は垂直に立ち上がり、高さ60cm位で大きく外傾している。南東壁は外傾しながら立ち上がっている。長軸の断面は逆台形で、北東壁、南西壁とも外傾しながら立ち上がり、北東壁は高さ40cm位から内湾している。底面は少し凸凹があるがほぼ平坦であり、南西部が少し低くなっている。

＜埋土＞ 埋土は8層に細分される。黒色土と黒褐色土が主体となっており、いずれにも中揮浮石が含まれている。また、下部は黒色土を含んだ中揮浮石が主体である。

出土遺物はなく時期は不明である。

B III f 1 陥し穴状遺構

遺構 (第14図、写真図版7)

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB III e 1・f 1にまたがって位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

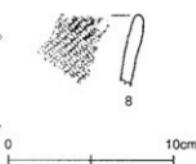
＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状で、長軸方向は北東—南西である。規模は開口部径1.17×5.85m、底部径34cm×4.95m、深さは中央部で90cm、両端部で86～92cmである。

＜壁・床面＞ 短軸の断面は漏斗形である。北西壁、南東壁ともに緩く外傾しながら立ち上がり、高さ60cm位で大きく外傾している。長軸の断面は逆台形に近く、北東壁、南西壁とも垂直に立ち上がり、高さ50cm位から外傾している。底面は水平ではほぼ平坦である。

＜埋土＞ 埋土全体の固化はできなかったが、上部から黒色土、中揮浮石、黒褐色土と中揮浮石の混土となっている。上部の黒色土はよく締まっているが、中部から下部にかけては全体に締まりに欠ける。

遺物 (第13図、写真図版33)

土器8が埋土上部から出土している。深鉢の口縁部で、緩く外傾している。
地文はR L単節繩文縱回転である。外面に炭化物が付着している。



第13図 B III f 1
陥し穴状遺構出土遺物

時期

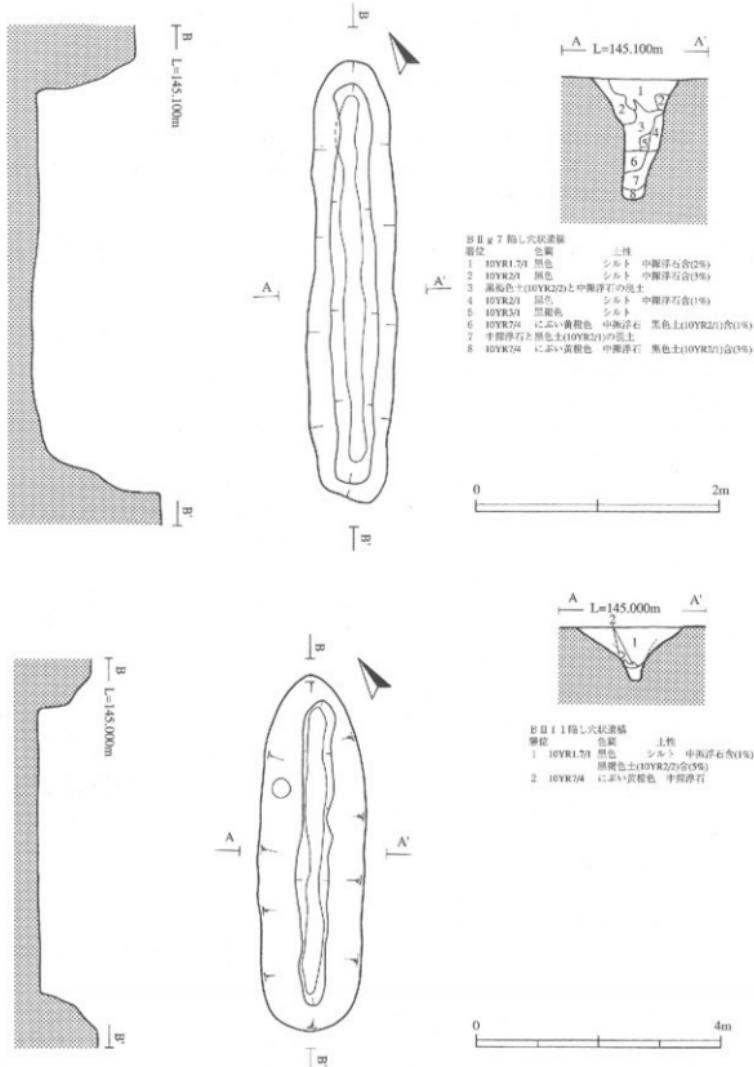
遺物が出土しているが、埋土上部からの出土であり時期は特定できず不明である。

C II a 5 陥し穴状遺構 (第15図、写真図版7)

＜位置・検出状況＞ 調査区域南部グリッドC II a 5・b 5にまたがって位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は細長い溝状で、長軸方向は北東—南西である。規模は開口部径98cm×4.3m、底部径24cm×3.42m、深さは中央部で110cm、両端部で89～107cmであり、中央部が少し深くなっている。

＜壁・床面＞ 短軸の断面は漏斗形である。北西壁、南東壁ともほぼ垂直に立ち上がり、高さ60cm位で両壁とも大きく外傾している。長軸の断面は逆台形で、北東壁、南西壁とも緩く外傾しながら立ち上がり、北

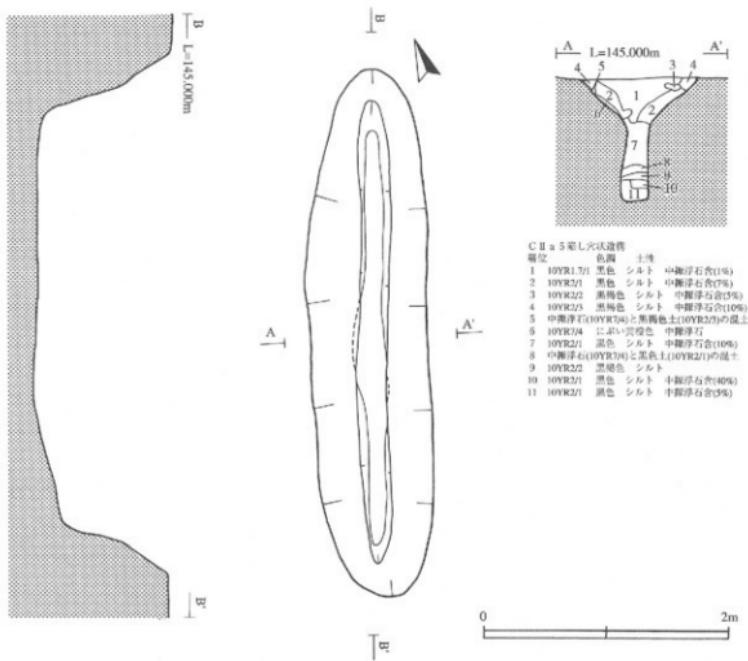


第14図 B II g 7・B III f 1 陥し穴状透構

東壁は60cm、南西壁は高さ50cm位から大きく外傾している。底部は少し凹凸があり、南西側が少し高くなっている。

＜埋土＞ 埋土は11層に細分される。中揮浮石を含んだ黒色土が主体となっており、下部になるほど中揮浮石の割合が高くなっている。全体によく締まっている。

出土遺物はなく時期は不明である。



第15図 C IIa 5陥し穴状構造

2 古代以降の遺構と遺構内出土遺物

古代以降の遺構として、竪穴住居跡10棟（奈良時代3棟、平安時代7棟）、住居状遺構2棟（奈良時代）、掘立柱建物跡3棟、土坑24基、柱穴状小土坑269基、溝跡1条、溝状遺構15条が検出された。また、遺構内から土師器、須恵器、土製品、鉄製品が出土した。

（1）竪穴住居跡（奈良・平安時代）

A III h 1 住居跡

遺構（第16図、写真図版8）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドA III h 0・h 1にまたがって位置する。IV層上面で十和田a降下火山灰の広がりとして検出された。北東側は削平されて遺存しない。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 二分の一ほど削平されているが、平面形は隅丸方形と推定され、規模は(2.4)×5.9mである。

＜埋土＞ 11層に細分され、上部から十和田a降下火山灰、中層浮石を含む黒色土、南部浮石を含む黒色土が主体となっている。また、中部には炭化物や焼土粒を含む黒色土がある。

＜壁＞ 北東壁は削平され残存しない。他の壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50～60cmで、南西壁が最も高い。

＜床面＞ 南部浮石混じりの黒色土で、少し凹凸があるがほぼ平坦である。北西壁が少し高くなっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 14まで14個検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径15×17cm～50×85cm、深さ8.2～33.1cmである。検出時の状況や柱穴配置からP 1とP 2が主柱穴の一部と考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

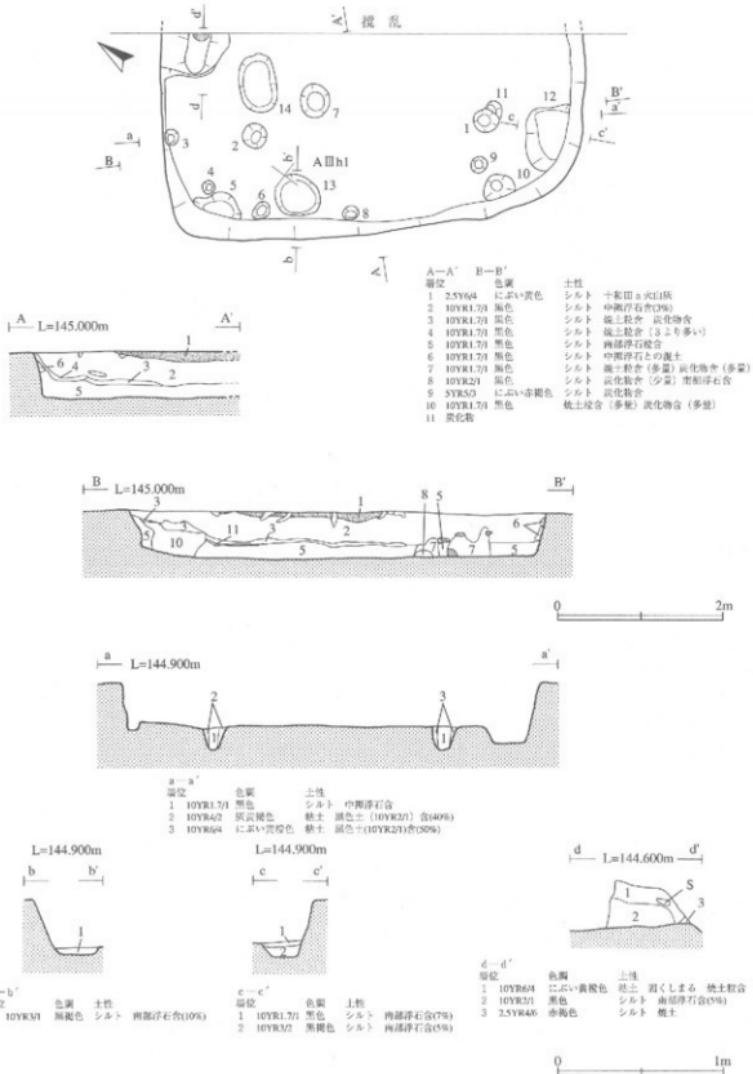
| 柱穴計測表 | | | | | | | 単位：cm |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 |
| 径 | 29×33 | 30×30 | 19×27 | 15×17 | 35×62 | 18×24 | 35×43 |
| 深さ | 33.1 | 30 | 13.3 | 9 | 17 | 12.5 | 14.3 |

| 番号 | P 8 | P 9 | P 10 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 |
|----|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|
| 径 | 17×20 | 20×20 | 30×40 | 21×— | 45×85 | 50×56 | 45×71 |
| 深さ | 10 | 8.7 | 8.2 | 12.1 | 22.5 | 10.8 | 8.9 |

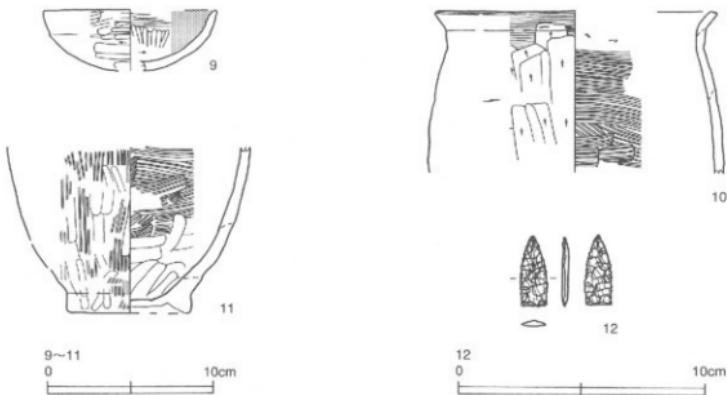
＜カマド＞ 残存しない。北西壁際の床面に、10×14cmの不整形で厚さ4cmの焼土が残っており、これが燃焼部の焼土の可能性がある。

遺物（第17図、写真図版33）

土器9～11と石器12が出土している。9は土師器の壺である。底部は丸底風と推定され、体部は底部から内湾しながら立ち上がり口縁部へ続いている。口縁部は垂直気味に立ち上がり、口唇部は丸みをもっている。内面はミガキ後黒色処理され、また、外面にもミガキが施され、口縁部1.5cm下には沈線が1本巡っている。10・11は甕である。10の口縁部は短く、口唇部は平らに開口され、中央部に凹みがある。どちらにも輪積痕が残り、11は外面が一部黒変している。12は流れ込みと考えられる繩文時代の石器である。無茎（平茎）式で、側縁は緩い弧状をなす。横断面形は平たい菱形である。



第16図 A III h 1 住居跡



第17図 A III h 1 住居跡 出土遺物

時期

出土遺物から、奈良時代と考えられる。

B II h 6 住居跡

遺構（第18～20図、写真図版9・10）

＜位置・検出状況＞ 調査区域中央部B II h 6・h 7・i 6・j 7・j 6にまたがって位置する。IV層上面で十和田a降下火山灰を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は7.8×7.9mである。

＜埋土＞ 6層に細分される。大別すると3つに分けられ、上部から十和田a降下火山灰を含む黒色土、十和田a降下火山灰、南部浮石を含む黒色土である。1層、2層は木根による搅乱が著しいが、埋土は全体によく締まっている。

＜壁＞ ほぼ垂直気味に立ち上がっている。壁高は36～55cmで、南西壁が最も高い。

＜床面＞ 南部浮石を含む黒色土である。多少凹凸があり、中央部が若干高くなっている。北西壁左隅と南東壁間に、それぞれ18×56cm、40×53cmの大きさの粘土塊が検出された。性格や用途は不明である。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 70の70個検出された。平面形は円形や梢円形で、規模は径19×20cm～130×137cm、深さ7～59cmである。検出時の状況や柱穴配置から、P 1～P 4が主柱穴と考えられる。P 2の底面からは、径12.4×13.2cm、厚さ3.6cmの板材が出土している。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位: cm

| 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ |
|------|-------|------|------|-------|------|------|---------|------|------|-------|------|
| P 1 | 62×68 | 53.6 | P 19 | 62×64 | 29.1 | P 37 | 26×32 | 15.2 | P 55 | 55×61 | 27.5 |
| P 2 | 47×70 | 59.0 | P 20 | 24×34 | 6.5 | P 38 | 24×25 | 13.6 | P 56 | 33×35 | 36.2 |
| P 3 | 52×69 | 54.8 | P 21 | 20×26 | 19.3 | P 39 | 22×23 | 17.7 | P 57 | 36×42 | 32.8 |
| P 4 | 32×78 | 51.2 | P 22 | 24×26 | 13.9 | P 40 | 26×31 | 23.1 | P 58 | 20×20 | 10.3 |
| P 5 | 34×58 | 21.1 | P 23 | 35×— | 34.8 | P 41 | 22×26 | 20.6 | P 59 | 20×23 | 29.0 |
| P 6 | 43×50 | 23.2 | P 24 | 37×43 | 33.2 | P 42 | 26×39 | 21.8 | P 60 | 19×21 | 25.0 |
| P 7 | 65×88 | 32.7 | P 25 | 26×27 | 27.1 | P 43 | 28×33 | 22.3 | P 61 | 23×25 | 15.1 |
| P 8 | 40×54 | 23.9 | P 26 | 39×50 | 31.7 | P 44 | 44×59 | 25.8 | P 62 | 42×46 | 13.6 |
| P 9 | 47×— | 22.7 | P 27 | 22×24 | 8.9 | P 45 | 52×72 | 28.2 | P 63 | 30×31 | 12.7 |
| P 10 | 43×— | 19.0 | P 28 | 25×29 | 30.8 | P 46 | 41×45 | 26.7 | P 64 | 45×— | 27.6 |
| P 11 | 34×45 | 23.7 | P 29 | 24×25 | 19.6 | P 47 | 26×41 | 24.3 | P 65 | 43×53 | 22.6 |
| P 12 | 17×47 | 24.5 | P 30 | 22×22 | 12.7 | P 48 | 18×27 | 15.4 | P 66 | 41×49 | 27.0 |
| P 13 | 30×37 | 26.0 | P 31 | 24×26 | 18.6 | P 49 | 37×45 | 13.8 | P 67 | 43×55 | 28.2 |
| P 14 | 26×51 | 25.7 | P 32 | 45×61 | 23.4 | P 50 | 32×38 | 16.8 | P 68 | 42×48 | 26.9 |
| P 15 | 27×32 | 24.9 | P 33 | 34×45 | 24.2 | P 51 | 39×43 | 19.7 | P 69 | 32×38 | 27.2 |
| P 16 | 19×25 | 11.4 | P 34 | 80×80 | 27.4 | P 52 | 130×137 | 38.9 | P 70 | 41×55 | 33.2 |
| P 17 | 52×70 | 29.9 | P 35 | 39×40 | 21.1 | P 53 | 37×44 | 13.1 | | | |
| P 18 | 21×49 | 26.2 | P 36 | 23×24 | 14.5 | P 54 | 77×110 | 24.3 | | | |

＜カマド＞ 北西壁中央部に設置されている。本体は袖部が残る。芯材として凝灰岩を使用し、それを粘土質シルトで覆い構築している。焼成部の焼土は、径56×58cmの不整形で、厚さは最大で7cmあり、よく焼成を受けている。焼土上から径11×16cmの石が検出されており、支脚の可能性がある。煙道部は掘り込み式である。煙道は板状の凝灰岩を側壁と天井に据え、粘土で固めて構築されており、壁からの長さは1.66mである。煙出部は円形の土坑状ではほぼ垂直に立ち上がり、深さは51cmである。底面は煙道底面より6cmほど掘り下げられている。

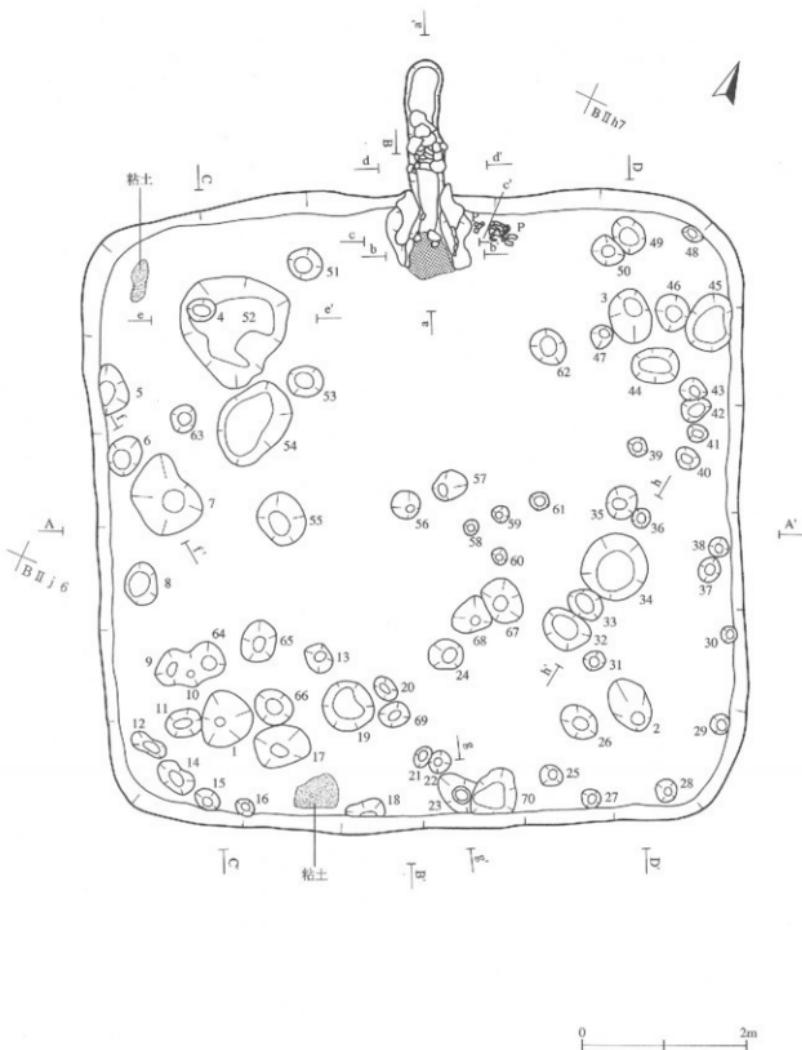
遺物（第21～24図、写真図版33～36）

土器13～37、石器38、土製品39～42、板材43が出土している。13～15はロクロ使用の土師器杯で、墨書きされている。13は底部で、内面はミガキ後黒色処理されており、底部の切り離しは回転糸切りである。底部に墨書きされている。14・15は口縁部で、15の口縁端部は僅かに外方に折れている。両者とも墨書きされているが文字は判読できない。

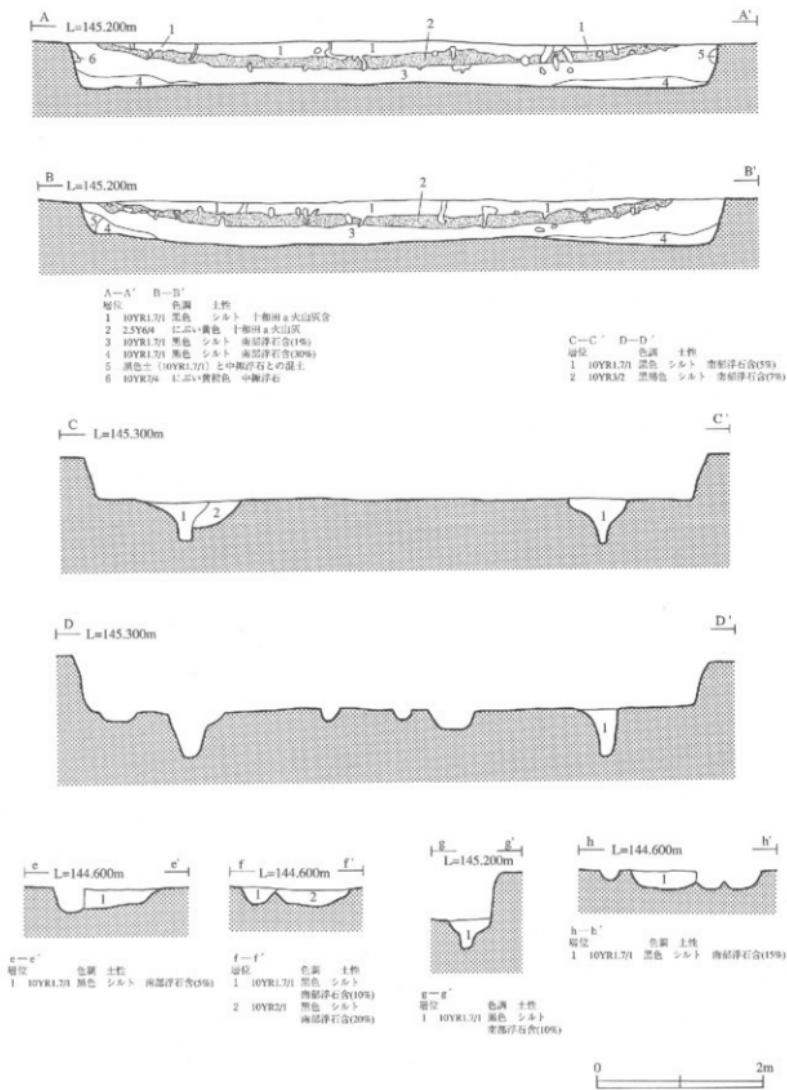
16～18はロクロ不使用の土師器杯で、いずれも内面はミガキ後黒色処理されている。16は外面に沈線が1条巡り、17は体部中央に明瞭な段を持つ。18の口縁部は僅かに内湾している。体部上半部には沈線が1条巡り、胎土には砂粒が多量に含まれている。19は碗である。底部から内湾しながら立ち上がっており、口縁部も僅かに内湾している。口縁端部は僅かに肥厚し、口唇部は凹みをもっている。内面はミガキ後黒色処理され、外面も一部磨かれている。20は高台杯である。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は垂直気味に立ち上がっている。内面はミガキ後黒色処理され、外面は丁寧に磨かれ、沈線が1条巡っている。胎部はハの字状に開き、疊付けは丸みを持っている。

21はロクロ使用の杯である。底部から外傾して立ち上がり、口縁端部は僅かに肥厚している。胎土には砂粒が多量に含まれている。

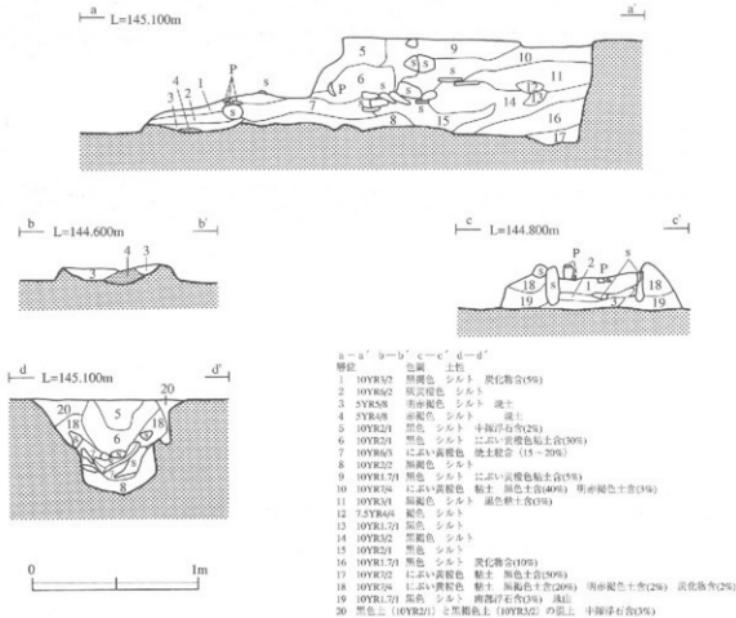
22～35は土師器甕である。頸部に体部最大径をもつもの（23）、底部が平らに調整されているもの（22～25、31、33～35）、口縁部がケズリ後ヨコナデ又はヘラナデされているもの（22、24、25、28）、頸部に段を持つもの（26～28、32）、輪積痕が残るもの（22～24、26、35）がある。30はロクロ使用の甕で、口



第18図 B II h 6 住居跡 (1)



第19図 B II h 6 住居跡 (2)



第20図 B II h 6 住居跡 (3)

縁部は外方へ大きく折れ、口縁部は上方へ引き出され、口唇部は丸くおさまっている。36は小型の土師器壺である。底部から内湾しながら立ち上がって、頸部へ続き、頸部には段を持っていて。内外両面にはケズリが施されている。

37は須恵器壺である。底部から緩く外傾しながら立ち上がって口縁部へ続き、口唇部は丸くおさまっている。底部切り離しは回転式切りであり、胎土には砂粒が多く含まれている。

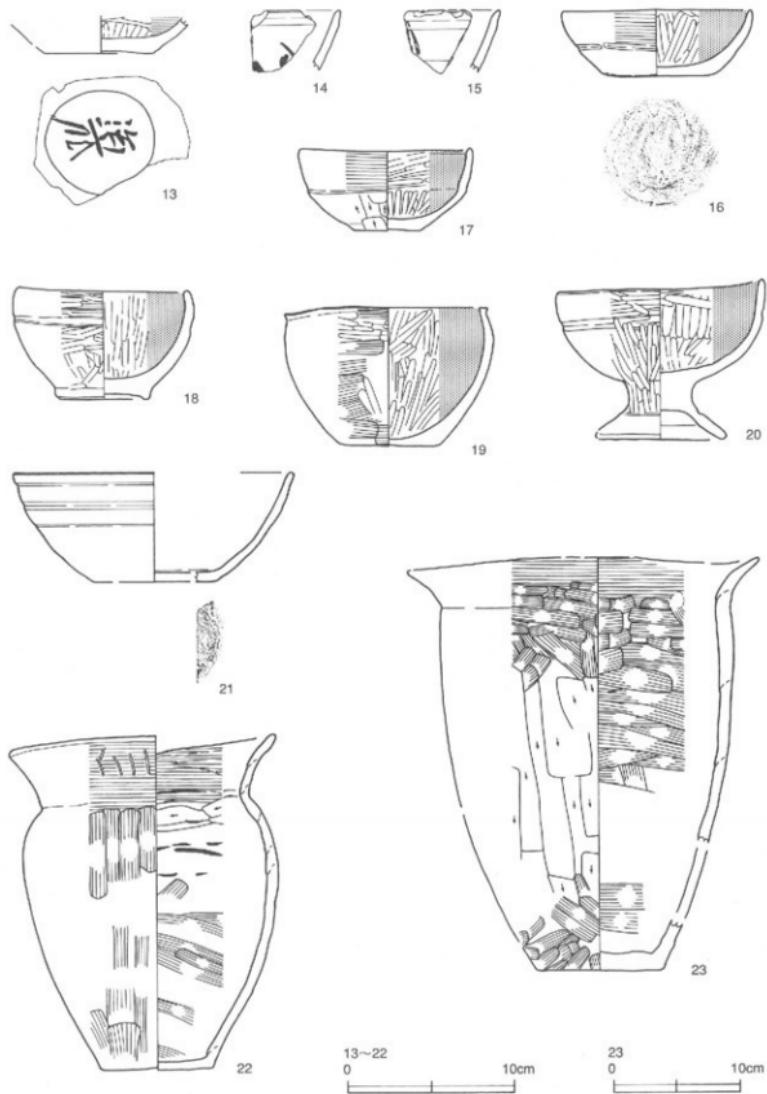
38は磨石である。表裏両面に使用痕が認められる。横断面形は楕円形である。39は土製の勾玉で、直径2mmの穴が穿たれている。

40・41は紡錘車である。両者とも中央部に径8mmの穴が開いており、表面にはナデが施されている。42は鐸型土製品である。口縁部が外方へ引き出され、平らに調整されている。43は板材で、P2底面から出土したものである。平面形は台形状で、大きさは径12.4×13.2cm、厚さは3.6cmである。

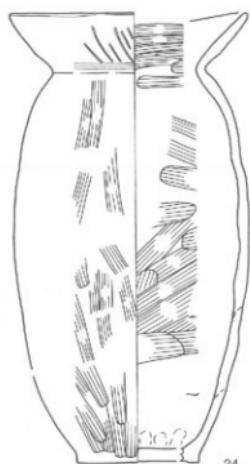
出土遺物のうちロクロ使用の壺(13~15・21・37)や甕(30)は、他からの流れ込みと考えられる。

時期

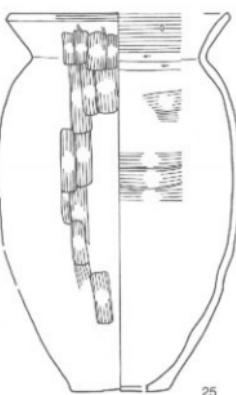
出土遺物から、奈良時代と考えられる。



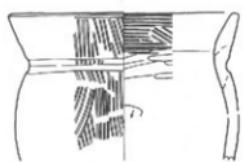
第21図 B II h 6 住居跡 出土遺物 (1)



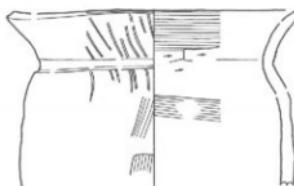
24



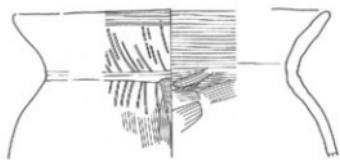
25



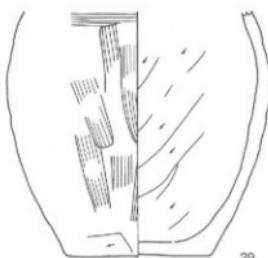
26



27



28

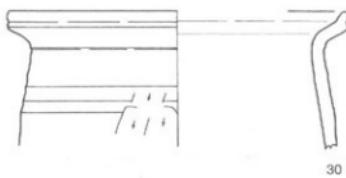


29

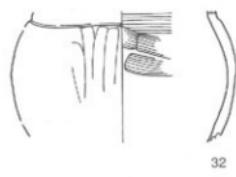
26~29
0 10cm

24・25
0 10cm

第22図 B II h 6 住居跡 出土遺物 (2)



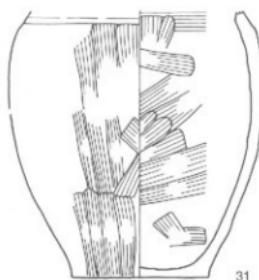
30



32



33



31



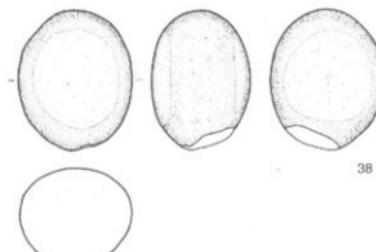
3



36



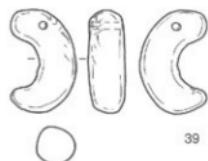
37



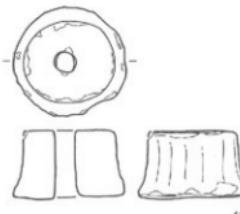
38



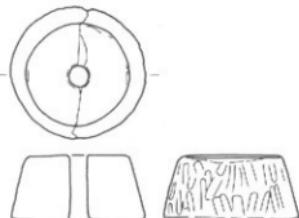
第23図 B II h 6住居跡 出土遺物 (3)



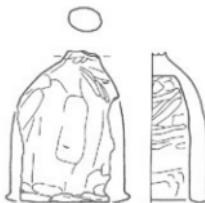
39



40

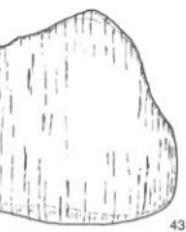
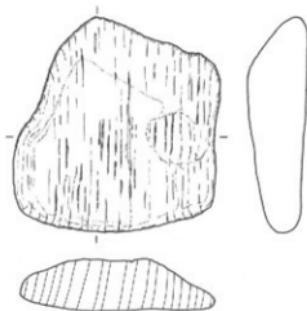


41



42

39~42
0 10cm



43
0 10cm

第24図 B II h 6 住居跡 出土遺物 (4)

B III j 4 住居跡

遺構（第25図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞ グリッドB III j 4に位置する。IV層上面で黒色土の広がりとして検出された。東側約三分の一は削平され残存しない。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 三分の一ほど削平されているが、平面形は隅丸方形と推定され、規模は(3.3)×4.15mである。

＜埋土＞ 5層に細分され、上部は黒色土、下部は南部浮石を含んだ黒色土が主体となっている。全体によく締まっている。

＜壁＞ 東壁は残存しない。他の壁は緩く外反しながら立ち上がっている。壁高は49～60cmであり、西壁が最も高い。

＜床面＞ 南部浮石混じりの黒色土である。多少凸凹があり、東側が少し低くなっている。全体にかたく締まっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 18まで18個検出された。平面形は円形や梢円形で、規模は径15×16cm～37×42cm、深さ10.5～53.9cmである。柱穴の規模と配置からP 1とP 15が主柱穴の一部をなすものと考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 37×42 | 15×16 | 19×20 | 15×16 | 22×29 | 16×20 | 22×35 | 19×21 | 30×37 |
| 深さ | 53.9 | 21.8 | 13.9 | 30.1 | 17.2 | 10.5 | 11.7 | 12.9 | 34.5 |

| 番号 | P 10 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 | P 15 | P 16 | P 17 | P 18 |
|----|------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|
| 径 | 25×— | —×28 | 20×30 | 24×30 | 18×21 | 33×36 | 20×— | 23×27 | 13×17 |
| 深さ | 18.6 | 31.2 | 41.8 | 33.8 | 11.3 | 50.2 | 17.8 | 32 | 6.3 |

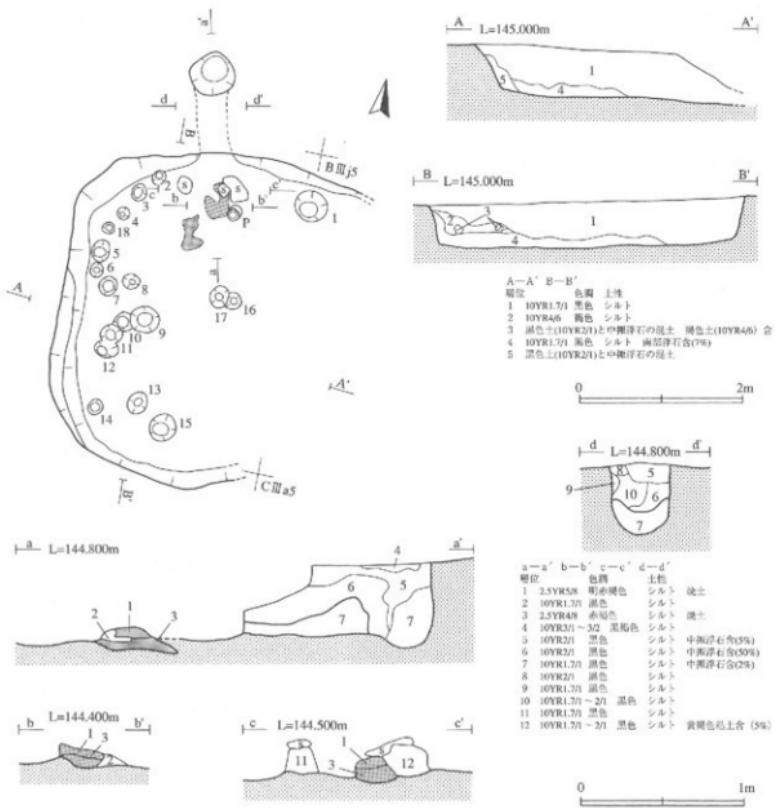
＜カマド＞ 北壁中央部に設置されている。本体は袖部の一部が残るのみである。燃焼部の焼上は径30×45cmの不整形で、厚さは最大で14cmあり、良く焼成している。煙道部は例り貫き式と考えられる。煙道はほぼ水平に伸びて煙出部へ続いており、壁からの長さは約70cmである。天井部は崩落したと考えられ、煙道の横断面形は三日月状である。煙出部は円形の土坑状をなし、開口部は径55×55cmの不整形で、深さは52cmである。底面は煙道底面より10cmほど掘り下げられている。

遺物（第26図、写真図版36）

上器44～48、土製品49が出土している。44～46はロクロ不使用の土師器杯である。44は底部が平らに調整されており、体部は外傾しながら立ち上がって口縁部へ続き、口唇部は丸くおさまっている。外面はヨコナデが施され、内面はミガキ後黒色処理されている。45は底部が丸底風と考えられ、体部は内湾しながら口縁部へ続いている。口縁部は垂直気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさまっている。内外両面ともミガキが施され、内面は黒色処理されている。46は口縁部で外傾しており、内面はミガキ後黒色処理されている。44・46は沈線が1条巡り、45は段をもっている。

47はロクロ不使用の土師器壺である。体部上半部に最大径があり、頸部に段を持っている。口縁部は内外両面にヨコナデ、体部は外面にケズリ後ナデ、内面にナデが施されている。

48はロクロ不使用の壺である。口縁部は頸部から緩く外反しながら立ち上がり、口縁端部は僅かに肥厚している。口唇部は平らに調整され、中央には凹みがある。頸部には輪積痕が残る。49は紡錘車である。

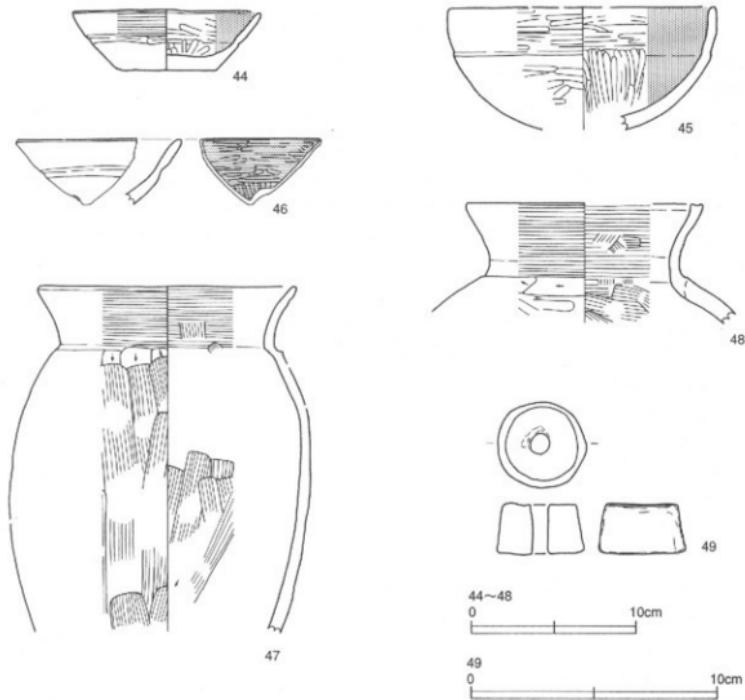


第25図 B III j 4 住居跡

截頭円錐台形で、中央に直径7mmの穴が開いている。

時期

出土遺物から、奈良時代と考えられる。



第26図 B III j 4住居跡 出土遺物

B I c 5住居跡

遺構（第27図、写真版12）

＜位置・検出状況＞ 調査区域西部グリッドB I c 5・c 6・d 5・d 6にまたがって位置する。IV層上面で十和田a降下火山灰を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形であるが、東壁が若干凸凹様になっている。規模は $4.6 \times 4.95m$ である。

＜埋土＞ 5層に細分され、上部から黒色～黒褐色土、十和田a降下火山灰、黒色土が主体となっている。2層には十和田a降下火山灰が、4・5層には中揮浮石がそれぞれ含まれている。全体によく縮まっている。

＜壁＞ 西壁と南壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁と東壁は少し外傾しながら立ち上がっている。壁高は20～35cmで、東壁側が最も高い。

＜床面＞ 中漂浮石を含む暗褐色土で、多少凹凸があり、東側が少し低くなっている。全体に柔らかく、縮まりに欠ける。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 7まで7個検出された。平面形は円形や梢円形で、規模は径18×22cm～55×68cm、深さ21.8～40.5cmである。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

| 番号 | 単位：cm | | | | | |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 |
| 直径 | 55×68 | 36×37 | 44×46 | 36×42 | 36×40 | 33×36 |
| 深さ | 36.1 | 28.9 | 27.7 | 21.9 | 21.8 | 40.5 |
| | | | | | | 22.1 |

＜カマド＞ 南壁に設置されている。本体は残存しないが、煙道部が2基検出されたことから作り替えと考えられる。旧カマドを1号カマド、新カマドを2号カマドとした。

【1号カマド】 南壁中央部に設置されている。本体は残存せず、掘り込み式と考えられる煙道部だけが残る。煙道の長さは70cmである。

【2号カマド】 南壁やや東寄りに設置されている。本体は残存せず、袖部の芯材に使用されたと考えられる礎2個と、燃焼部の焼土だけが残る。焼土は径28×33cmの不整形で、厚さは最大5cmである。煙道部は掘り込み式と考えられ、煙道の長さは1.25mである。

遺物（第28図、写真図版36・37）

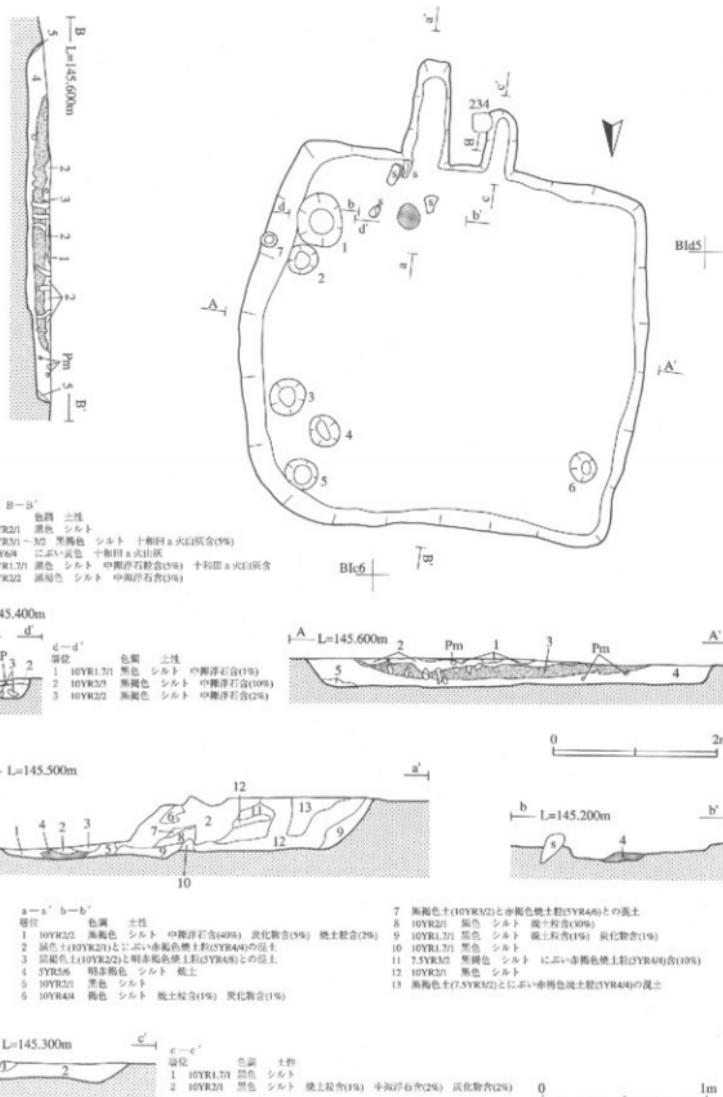
土器50～54が出土している。50・51はロクロ使用の土師器壺である。50は底部から外傾しながら立ち上がって口縁部へ続き、口唇部は丸くなっている。51は底部から内湾しながら立ち上がって口縁部へ続き、口縁端部は僅かに外方へ折れ、口唇部は小さな丸みをもっている。どちらも底部切り離しは回転糸切りで、胎土に砂粒が少量含まれている。

52はロクロ使用の土師器壺の体部から口縁部である。体部中央部に最大径をもち、内湾しながら頸部へ続いている。口縁部は頸部から外傾して立ち上がっており、途中で垂直に立ち上がり、口縁端部は丸みをもっておさまっている。胎土には砂粒と金雲母が含まれている。

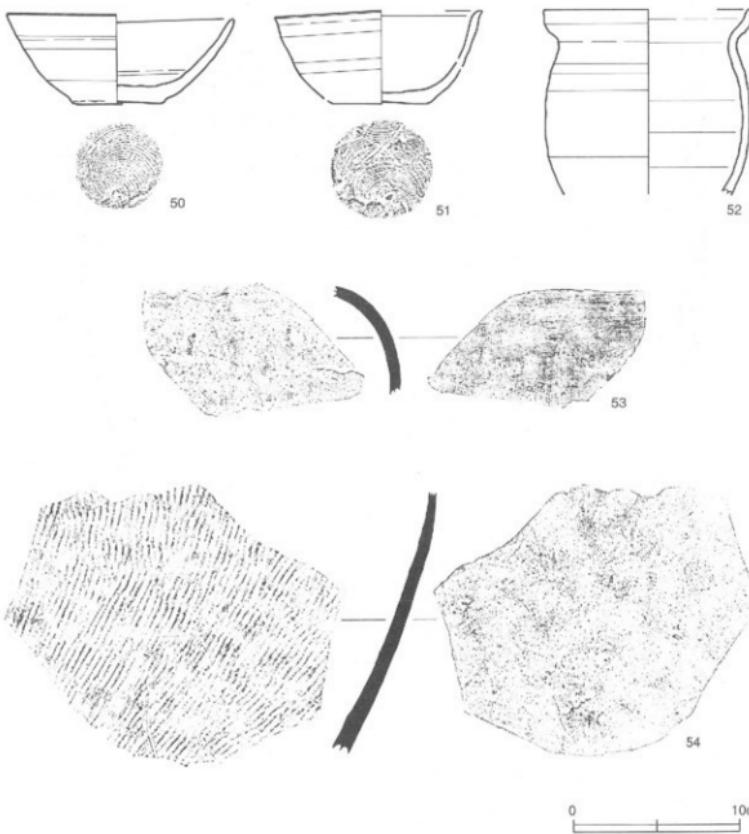
53は須恵器壺の肩部である。体部上半部から大きく内湾している。胎土には砂粒が含まれている。54は須恵器壺の体部下半部である。外傾しながら上半部へ続くものと考えられる。外面には平行敲き目痕、内面には放射状の当て具痕が残る。

時期

出土遺物から、平安時代と考えられる。



第27図 B I c 5住居跡



第28図 B I c 5住居跡 出土遺物

B I h 8住居跡

遺構（第29図、写真図版13）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部グリッドB I h 8・h 9・i 8・i 9にまたがって位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ 東壁の同一場所から向きが多少異なる煙道部が検出され重複住居跡と考えられたが、平面形

や切り合ひ関係が明確でないことから、本住居跡はカマドの作り替えが行われたものであるとした。しかし、重複の可能性は否定できない。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は $4.1 \times 4.2\text{m}$ である。

＜埋上＞ 黒色土が主体で、中撰浮石と南部浮石の混入の割合によって6層に細分される。粘性はあるが全体に縮まりに欠ける。

＜壁＞ 外傾しながら立ち上がっている。壁高は $20 \sim 30\text{cm}$ であり、南壁が最も高い。

＜床面＞ 南部浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが全体に平坦である。

＜柱穴＞ P 1からP 14まで14個検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径 $19 \times 21\text{cm} \sim 46 \times 52\text{cm}$ 、深さ $13 \sim 41\text{cm}$ である。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 |
|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 径 | 46×52 | 23×30 | 33×34 | 22×28 | 30×35 | 34×38 | 25×27 |
| 深さ | 41 | 36 | 26.2 | 27.6 | 23.2 | 27.3 | 21.2 |

| 番号 | P 8 | P 9 | P 10 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 |
|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 径 | 33×36 | 28×34 | 30×31 | 19×21 | 28×29 | 20×25 | 31×35 |
| 深さ | 14.6 | 18.6 | 22.8 | 16.7 | 14 | 13 | 21.5 |

＜カマド＞ 東壁に設置されている。作り替えと考えられ、旧カマドを1号カマド、新カマドを2号カマドとした。

【1号カマド】 煙道部だけが残存する。掘り込み式と考えられる。煙道はほぼ水平に延び、長さは 1.3m と推定される。煙出部は円形の土坑状で、底部は煙道底面より 5cm ほど掘り下げられている。

【2号カマド】 本体は芯材として使用された疊が7個残存するのみである。燃焼部の焼土は $35 \times 40\text{cm}$ の不整形で、厚さは最大で 6cm あり、よく焼成している。煙道部は掘り込み式と考えられる。煙道はほぼ水平にのび、長さは 1.25m である。

遺物（第30図、写真図版37）

上器55～62が出土している。55～57はロクロ使用の土師器坏である。いずれも底部から緩やかに内湾しながら立ち上がっている。56は口縁部が僅かに外方へ折れており、55・56とも口唇部は小さな丸みをもっている。いずれも内面はミガキ後黒色処理されており、55・56は黒色処理が外面にまで及んでいる。底部切り離しは56・57が回転系切りである。55は磨耗しており不明である。

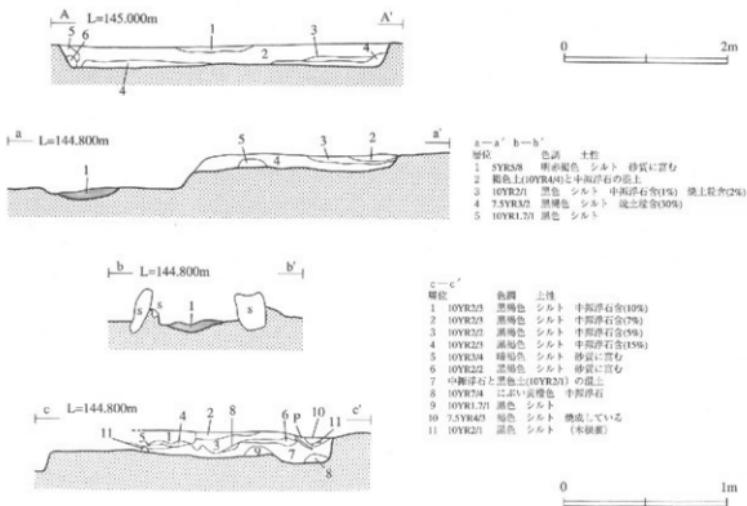
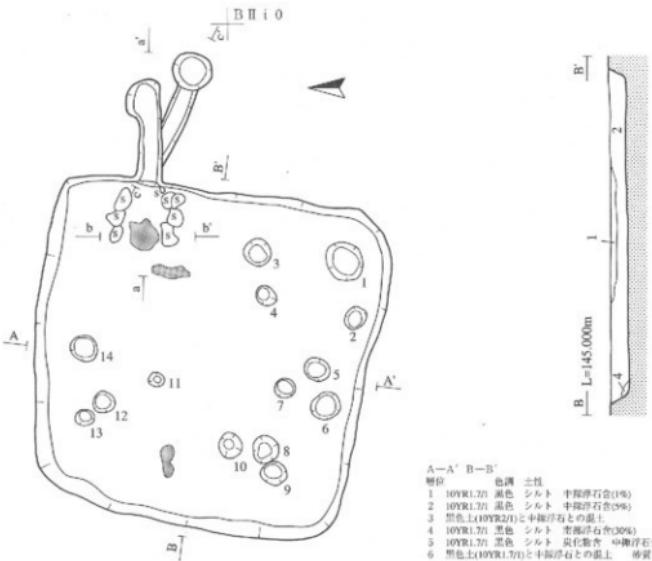
58は須恵器蓋の摘み部である。底部は回転窓ケズリされている。

59・60は土師器壺で、接合しないが同一固体の可能性がある。59は口縁部が頸部から大きく外傾しており、口唇部は平らに調整されている。60は底部が僅かに上げ底風で、体部は緩く内湾しながら立ち上がっている。59は外面に、60は内外両面に炭化物が付着しており、60には輪積痕が残っている。

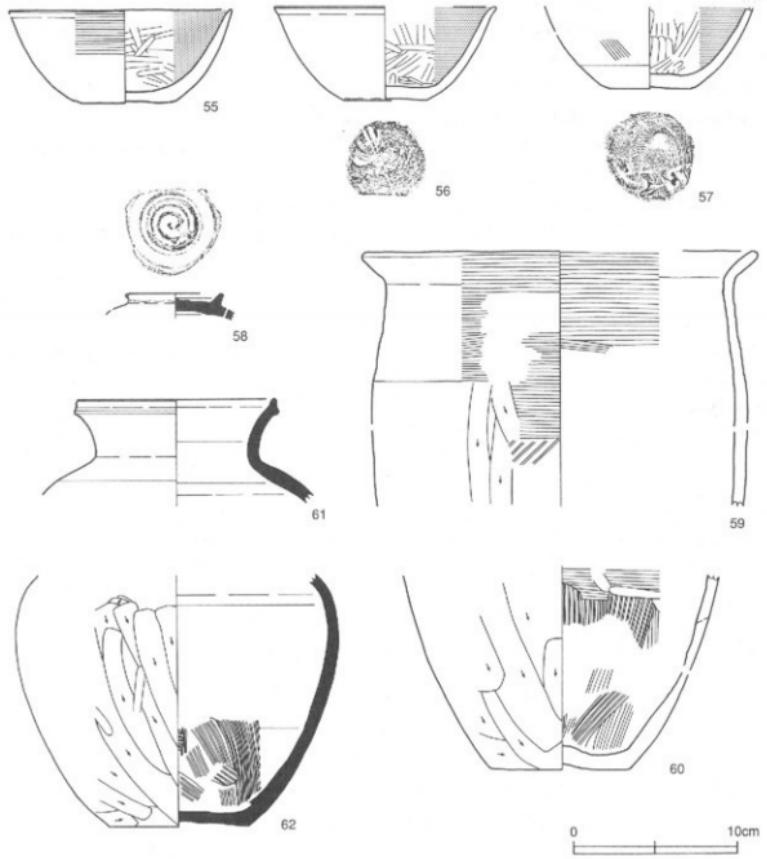
61・62は須恵器壺である。61は肩部から内湾して頸部へ続き、口縁部は頸部からやや外反気味に立ち上がっている。口縁部は上方に引き出され、口唇部は丸みをもっている。内面には炭化物が付着し、口縁部には自然釉が残っている。62は底部から内湾しながら立ち上がって肩部まで続いている。外面にはケズリが多用されている。

時期

出土遺物から、平安時代と考えられる。



第29図 B I h 8住居跡



第30図 BI h 8住居跡 出土遺物

B II e 8 住居跡

遺構（第31・32図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB II e 8・e 9・f 8・f 9にまたがって位置する。IV層面で十和田a降下火山灰を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は5.6×5.65mである。

＜埋土＞ 4層に細分される。上部から十和田a降下火山灰を含む黒色土、十和田a降下火山灰、中振浮石を含む黒色土が主体で、いずれもよく締まっている。

＜壁＞ 外傾しながら立ち上がっている。壁高は33～58cmで、南壁が最も高い。

＜床面＞ 南部浮石混じりの黒色土である。少し凹凸があるが、ほぼ平坦である。また、カマド部分を除き壁溝がほぼ全体に巡っており、その規模は上端幅8～30cm、深さ2.5～25.3cmである。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 38まで38個検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径10×11cm～44×50cm、深さ4.5～47cmである。柱穴の規模や配置から、P 1・P 2・P 3・P 37が1号カマドを持つ住居跡の主柱穴と考えられる。2号カマドを持つ住居跡の主柱穴は確認できなかった。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 | P 10 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 44×50 | 45×45 | 35×45 | 20×22 | 15×18 | 25×25 | 26×30 | 15×18 | 16×20 | 15×18 |
| 深さ | 40 | 47 | 40 | 17 | 10.4 | 13 | 26.2 | 26.1 | 21.7 | 20.1 |

| 番号 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 | P 15 | P 16 | P 17 | P 18 | P 19 | P 20 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 16×17 | 20×23 | 23×25 | 14×16 | 20×25 | 21×21 | 15×20 | 21×23 | 19×20 | 18×18 |
| 深さ | 23.7 | 27.9 | 25.7 | 21.9 | 12.7 | 12.5 | 13.9 | 14.9 | 28.4 | 16.7 |

| 番号 | P 21 | P 22 | P 23 | P 24 | P 25 | P 26 | P 27 | P 28 | P 29 | P 30 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 21×23 | 25×28 | 18×18 | 19×21 | 25×26 | 13×15 | 20×23 | 10×12 | 20×23 | 15×17 |
| 深さ | 18.2 | 20.8 | 19.3 | 15.8 | 36.7 | 25.6 | 24.2 | 23.1 | 18.6 | 25.4 |

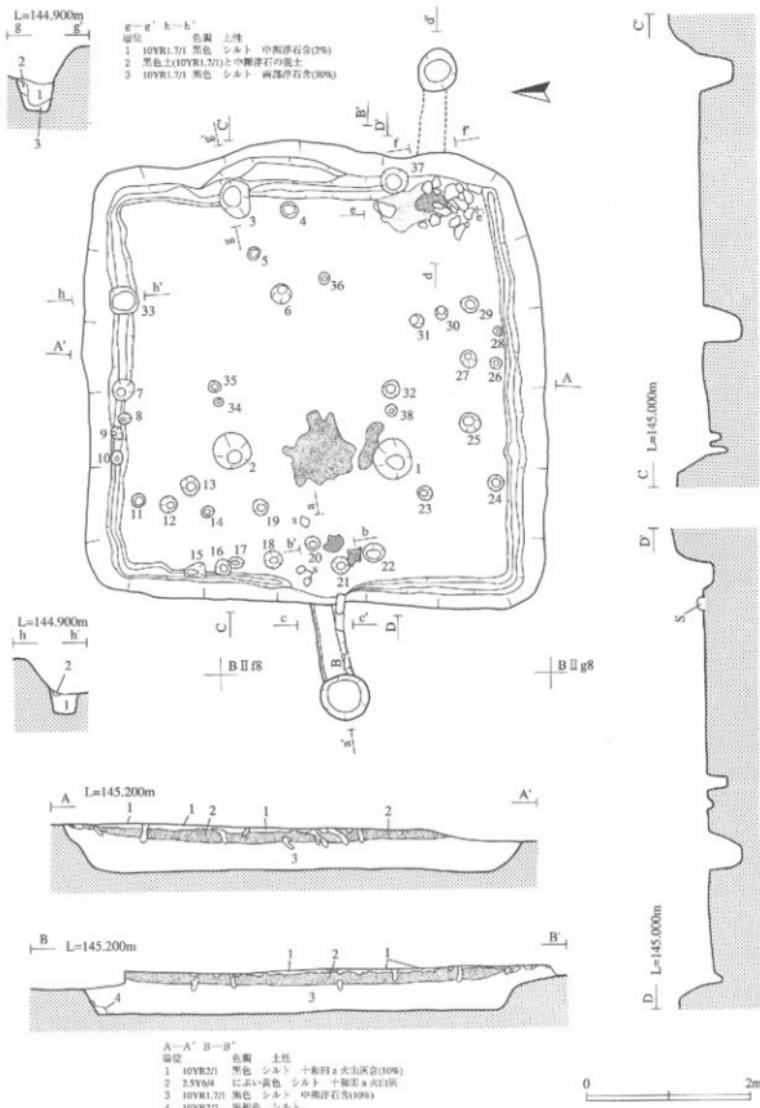
＜カマド＞ 作り替えである。旧カマドを1号カマド、新カマドを2号カマドとする。

〔1号カマド〕 西壁や南側に設置されている。本体は残存せず、燃焼部の焼土が残るのみである。焼土は径22×26cmの不整形で、厚さは最大で5cmある。煙道部は掘り込み式で、入り口付近の側壁に角礫が2個立てかけてある。煙道は壁から緩やかに下り、煙出部につながっている。煙道の長さは88cmである。煙出部は円形の土坑状で、深さは63cmあり、底部は煙道底面より5cmほど低くなっている。

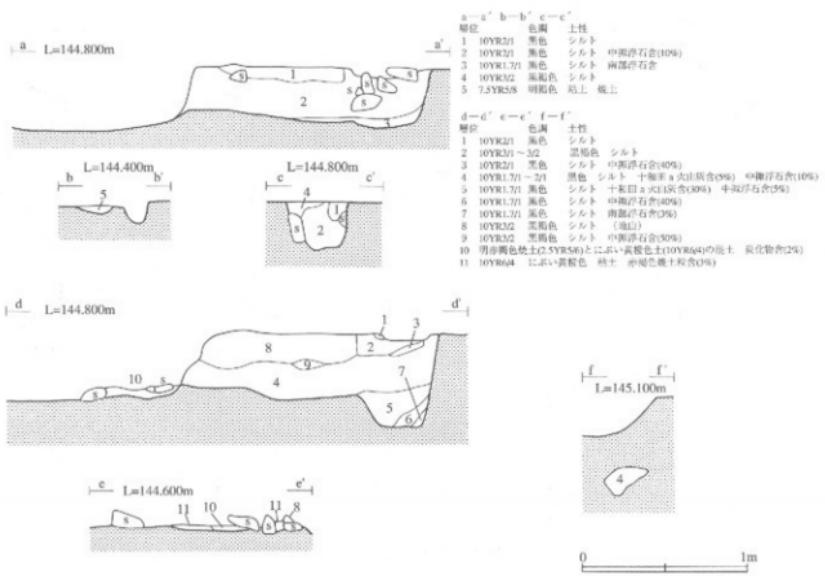
〔2号カマド〕 東壁南側に設置されている。本体は残存せず、芯材として使用された礫が残る。燃焼部の焼土は径27×42cmの不整形で表面だけが焼成している。煙道部は割り抜き式である。煙道は天井部が崩落したと考えられ、断面形は台形状である。煙道の長さは76cmである。煙出部は梢円形の土坑状で、深さは57cmあり、底部は煙道底面より20cmほど低くなっている。

遺物（第33図、写真図版37）

土器63～67、鉄製品68・69が出土している。63はロクロ使用の土師器壺の底部である。内面はミガキ後黒色処理されている。64はロクロ使用の須恵器壺である。底部から外傾しながら立ち上がって口縁部へ



第31図 B II e 8住居跡 (1)



第32図 B II e 8 住居跡 (2)

続き、口縁端部は僅かに肥厚し、口唇部は丸くおさまっている。外面体部下端部には一部ナテが施され、胎土には砂粒が多く含まれている。63・64とも底部切り離しは回転糸切りである。

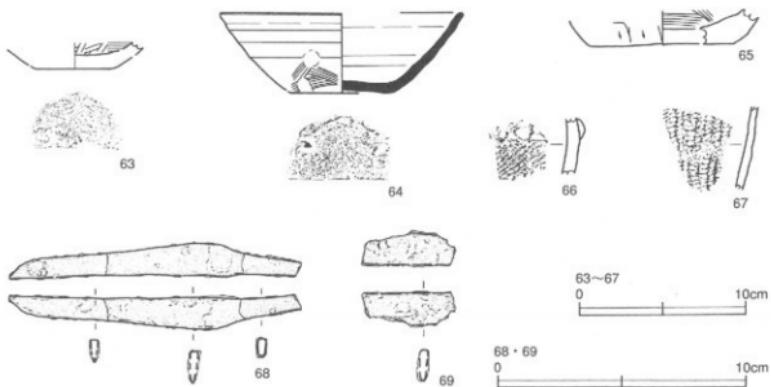
65は土師器の裏の底部で、底面は平らに調整されている。

66・67は流れ込みと考えられる繩文土器である。どちらも深鉢の体部で、66は墜帶の上に指頭状の圧痕が残っている。地文は66がL R 単筋縄文回転、67がR L 単筋縄文斜め回転である。

68・69は刀子の身部である。68は残存長11.9cm、最大幅1.3cm、最大厚0.3cmである。69は残存長3.8cm、最大幅1.3cm、最大厚0.25cmである。

時期

出土遺物から、平安時代と考えられる。



第33図 B II e 8 住居跡 出土遺物

B II f 0 住居跡

遺構（第34・35図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞ 調査区域西部グリッドB II f 0・f 1・f 2にまたがって位置する。IV層上面でカマドの袖部と煙道部が検出されたが、それ以外は削平され残存しない。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形と推定され、規模は(5.4)×8.3mである。

＜壁＞ 北壁は削平されており、東壁及び西壁の南側半分と南壁が僅かに残るのみである。壁高は東壁が最も高く、最大で4cmである。

＜床面＞ 中摺浮石を含む黒色上で、全体にやや縮まりに欠ける。北側は削平され、南側に比べ20cmほど低くなっている。西側には掘り方が一部残っている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 17まで17個検出された。平面形は楕円形が多く、規模は径16×19cm～70×85cm、深さ5.6～58.2cmである。柱穴の規模や配置から、P 1・P 4・P 10・P 11・P 12・P 14が主柱穴と考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

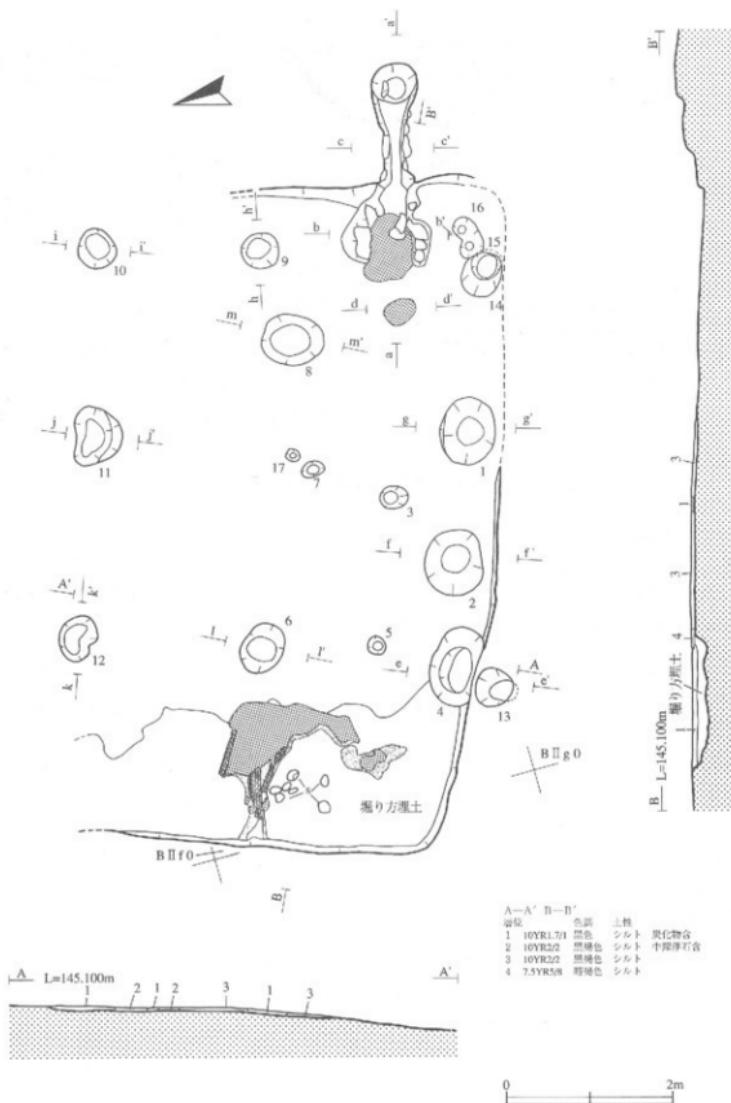
単位：cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 62×85 | 70×85 | 27×35 | 55×98 | 18×23 | 49×60 | 22×28 | 62×75 | 44×45 |
| 深さ | 42.6 | 49.7 | 51.7 | 51.4 | 10.2 | 43.8 | 12.5 | 37.1 | 43.3 |

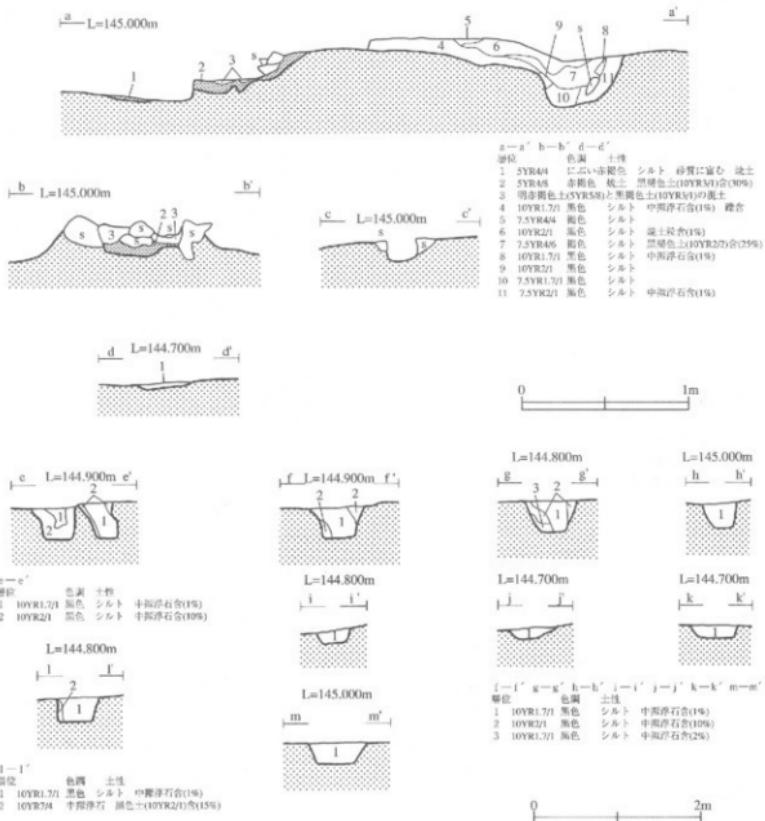
| 番号 | P 10 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 | P 15 | P 16 | P 17 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|
| 径 | 45×50 | 56×76 | 46×57 | 47×49 | 46×53 | 32×— | 28×— | 16×19 |
| 深さ | 29.5 | 29 | 23 | 58.2 | 57.7 | 11.4 | 11.3 | 5.6 |

＜カマド＞ 東壁南側に設置されている。本体の残存状況はよくなく、袖部の一部が残存するのみである。

袖部は芯材として礫を3個ずつ使用し、それを粘土質シルトで被覆し構築していたものと考えられる。



第34図 B II f 0 住居跡 (1)

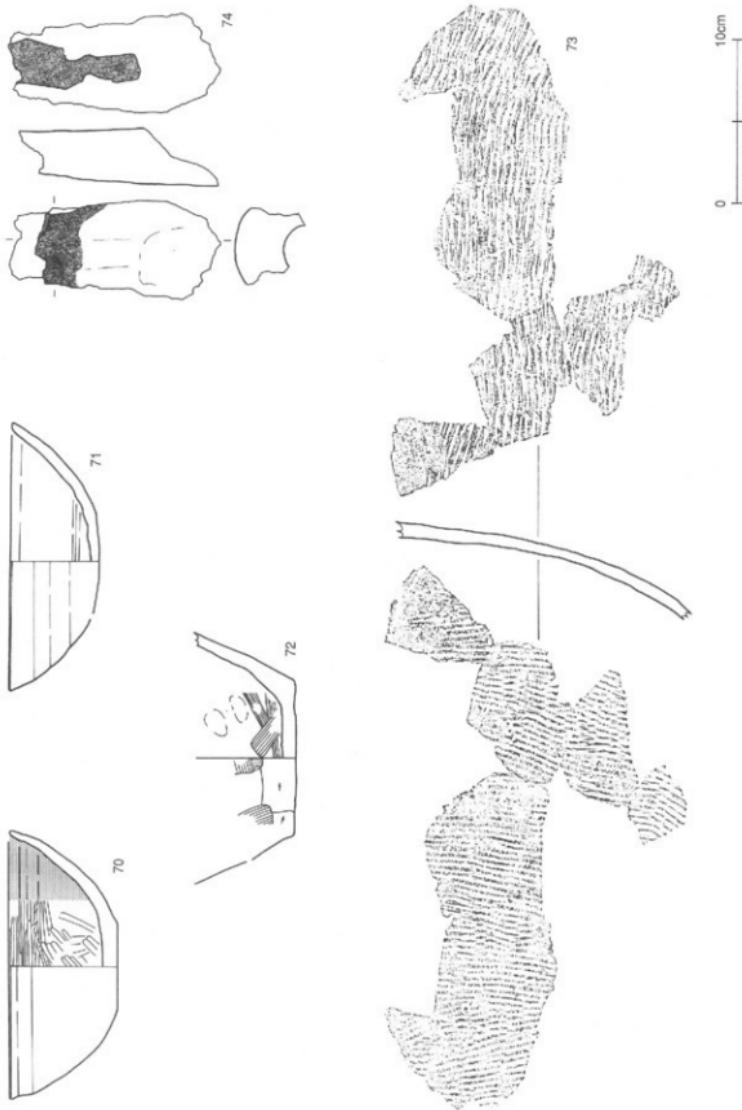


第35図 B II f 0 住居跡 (2)

燃焼部の焼土は径 $50 \times 85\text{cm}$ の不整形で、厚さは最大で7cmあり、よく焼成を受けている。煙道部は掘り込み式である。煙道は側壁に一部石を配し、緩やかに下りながら煙出部に続いており、長さは1.1mである。煙出部は底部に円形の掘り込みを持ち、ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は煙道底面より23cmほど低くなっている。

遺物 (第36図、写真図版38)

土器70~73、土製品74が出土している。70・71はロクロ使用の土師器坏で、どちらも摩耗が著しい。



第36図 B II f 0住居跡 出土遺物

70は底部から緩く内湾しながら立ち上がって、口縁部へ続いている。口縁部は端部が僅かに外方へ折れ、口唇部は小さな丸みをもっている。内面はミガキ後黒色処理されている。底部切り離しは不明である。71は底部から外傾しながら立ち上がって口縁部へ続き、口唇部は丸い。底部切り離しは回転糸切りと考えられる。両者とも口径に比べ底径が小さい。

72はロクロ不使用の土師器壺の底部から体部下縫部である。底部は一部に調整痕が残り、体部は底部から外傾しながら立ち上がっており、内外両面とも焼け、炭化物が付着している。また、胎土には砂粒が多量に含まれている。71はB II h 6 住居跡、70・72はB I h 8 住居跡の遺物とそれぞれ接合したものである。

73は土師器長脚壺の体部下部である。底部から内湾しながら立ち上がって上半部へ續くものと考えられる。外面には平行縞き目痕、内面には平行當て具痕が残っている。北陸型土器と考えられる。

74は繩の羽口の一部である。残存長8.5cm、最大幅4cm、最大厚2.8cm、重さ50.13gで、火熱によって一部赤褐色に変化している。

時期

出土遺物から、平安時代と考えられる。

B III f 3 住居跡

遺構（第37・38図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB III f 3・f 4・g 3・g 4にまたがって位置する。IV層上面で十和田a降下火山灰の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は4.9×5.1mである。

＜埋土＞ 壁溝や土坑の埋土を含め7層に細分される。上部は十和田a降下火山灰、下部は中標浮石を含んだ黒色土が主体で、どちらもよく締まっている。特に上部の十和田a降下火山灰層は木根による擾乱が著しい。

＜壁＞ どの壁も外傾しながら立ち上がっており、壁高は52~68cmで、南壁が最も高い。

＜床面＞ 南部浮石を含む黒色土である。多少の凹凸があるが、ほぼ平坦であり、全体にかたく締まっている。また、壁溝が東壁際の一部を除き、ほぼ全体に巡っている。溝の規模は、上端幅12~25cm、深さ4~29.6cmである。

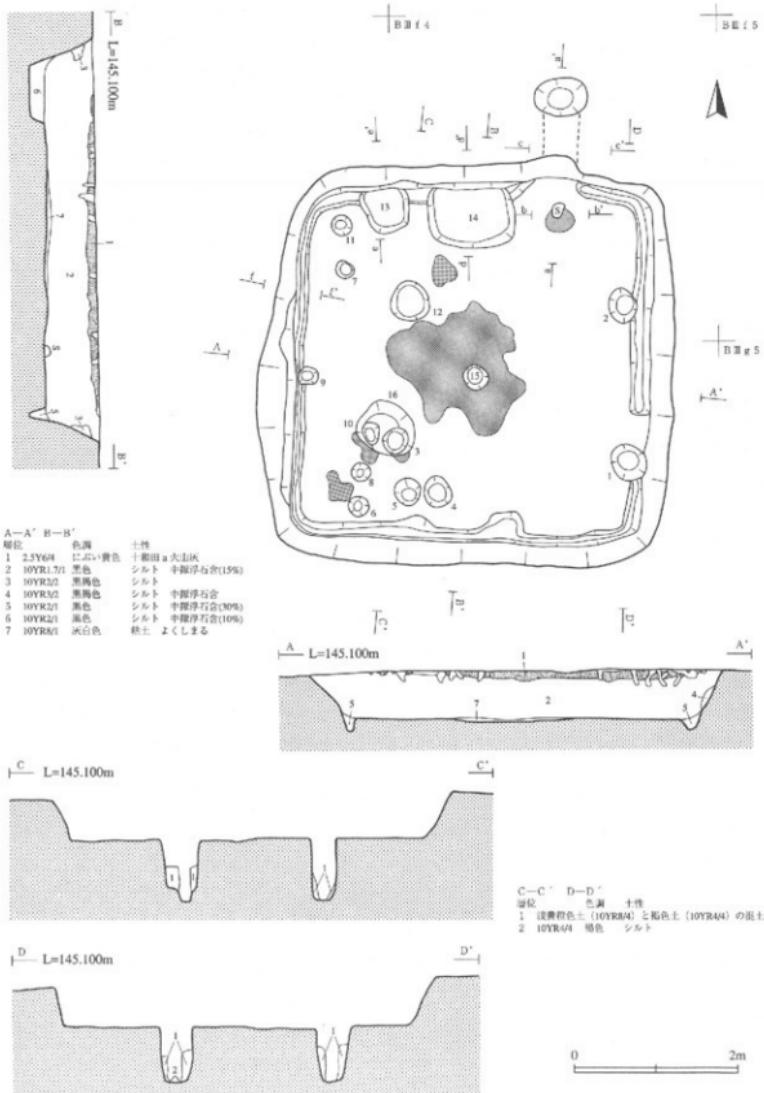
＜柱穴・土坑＞ P 1 ~ P 16まで16個検出された。平面形は円形や隅丸方形で、規模は径20×24cm~74×105cm、深さ12.8~73cmである。柱穴配置や規模から、P 1・P 2・P 3・P 12が主柱穴と考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

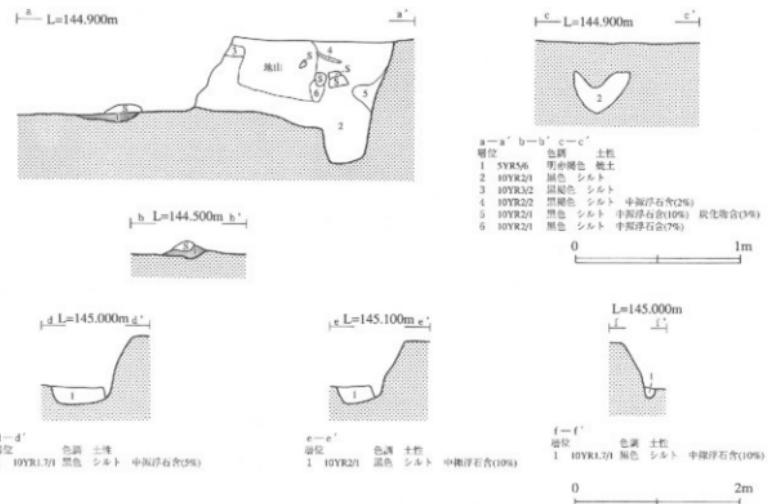
| 番号 | — は計測値なし 単位: cm | | | | | | | |
|----|-----------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 |
| 径 | 43×47 | 35×42 | 30×32 | 33×40 | 32×32 | 25×26 | 20×24 | 24×27 |
| 深さ | 73 | 68 | 70 | 18.8 | 21 | 39.6 | — | 24.9 |

| 番号 | P 9 | P 10 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 | P 15 | P 16 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|
| 径 | 23×26 | 22×30 | 25×25 | 50×50 | 55×56 | 74×105 | 31×33 | 65×75 |

＜カマド＞ 北壁の東寄りに設置されている。本体は残存せず、燃焼部の焼土が残るのみである。焼土は径32×36cmのほぼ円形で、厚さは最大で8cmあり、よく焼成し締まっている。煙道部は割り貫き式である。



第37図 B III f 3 住居跡 (1)



第38図 B III f 3住居跡 (2)

煙道は奥壁から僅かに傾斜しながら下がり、煙出部へ続いており、長さは60cm、直径は約60cmである。天井部が崩落したと考えられるため、煙道の横断面形はV字形になっている。煙出部は円形の土坑状で、ほぼ垂直に立ち上がっている。開口部は径47×65cmの楕円形で、深さは75cmあり、底面は煙道底面より21cmほど低くなっている。

遺物（第39図、写真図版38）

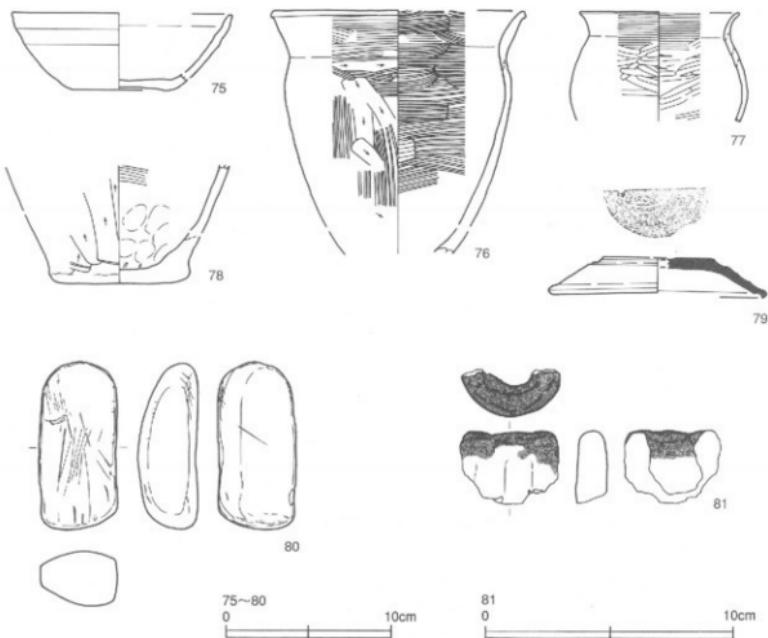
土器75～79、石器80、土製品81が出土している。75はロクロ使用の土師器壺で、摩耗が著しい。76～78はロクロ不使用の土師器壺である。76は体部上半部に最大径をもち、口縁部は緩く外傾している。口縁端部は僅かに肥厚し、口唇部は平らに調整されている。内外両面が煤けている。77は体部中央に最大径をもち、口縁部は緩やかに外反している。内外両面とも入念なミガキが施されている。また、内外両面が煤け、外面には炭化物が付着している。78は底部に調整痕が残り、体部は外傾しながら立ち上がっている。外面はケズリが施され、内面には指痕が残っている。また、外面が煤けている。

79は須恵器蓋である。頂部から大きく開き、口縁端部は引き出されている。

80は砥石である。石質は凝灰岩で、三面に使用痕が認められる。また、鋭利な刃物で傷つけられた痕跡が残っている。81は櫛の羽口である。残存長3cm、最大幅4cm、最大厚1.3cm、重さ15.66gで、火熱を受け一部赤褐色に変化している。

時期

出土遺物から、平安時代と考えられる。



第39図 B III f 3住居跡 出土遺物

C II b 6 住居跡

遺構（第40～42図、写真図版17・18）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南部グリッドC II b 6・b 7・c 6・c 7・d 6・d 7にまたがって位置する。IV層上面で、十和田a降下火山灰を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ 本住居跡は拡張された住居跡と考えられる。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は8×8.2mである。

＜埋土＞ 11層に細分される。3層の十和田a降下火山灰をはさんで、上部が黒色土や黒褐色土、下部が黒色土を主体としている。全体によく締まっている。

＜壁＞ ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は40～65cmで、北壁が最も高い。

＜床面＞ 南部浮石を含む黒色土である。多少の凹凸はあるが、ほぼ平坦であり、北側が少し低くなっている。

＜柱穴・土坑＞ P 1～P 50まで50個が検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は径12×12cm～

144×165cm、深さ9~101.4cmである。柱穴の規模や配置からP 21・P 27・P 30・P 41が拡張前の主柱穴、P 1~P 6が拡張後の主柱穴をなすものと考えられる。P 21・P 27・P 30・P 41には、底部付近に14×25cm~18×30cmの長方形状の掘り込みがあることから、柱として板材を使用したと考えられる。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

| 単位: cm | | | | | | | | | | | |
|--------|-------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|---------|-------|
| 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ |
| P 1 | 65×68 | 27.4 | P 14 | —×35 | 19.7 | P 27 | 45×62 | 80.2 | P 40 | 25×29 | 14.7 |
| P 2 | 62×80 | 42.2 | P 15 | 32×34 | 34.1 | P 28 | 35×58 | 42 | P 41 | 52×60 | 48.3 |
| P 3 | 90×99 | 49.6 | P 16 | 40×80 | 41.6 | P 29 | 25×30 | 34 | P 42 | 27×32 | 17.8 |
| P 4 | 35×40 | 30.6 | P 17 | 27×33 | 42.1 | P 30 | 50×57 | 65.3 | P 43 | —×38 | 12.6 |
| P 5 | 36×50 | 29.2 | P 18 | 50×83 | 42.5 | P 31 | 38×44 | 45.1 | P 44 | —×45 | 30.8 |
| P 6 | 45×57 | 39.2 | P 19 | 43×57 | 20.8 | P 32 | 38×70 | 45 | P 45 | 37×50 | 11.4 |
| P 7 | 15×16 | 40 | P 20 | 25×25 | 17.3 | P 33 | 39×47 | 69.8 | P 46 | 30×33 | 9 |
| P 8 | 12×12 | 45.9 | P 21 | 60×79 | 54.3 | P 34 | 35×37 | 16 | P 47 | 33×45 | 17.3 |
| P 9 | 15×19 | 43.7 | P 22 | 56×59 | 36.7 | P 35 | 38×38 | 13.1 | P 48 | 20×24 | 14.1 |
| P 10 | 37×44 | 34.9 | P 23 | 33×43 | 25 | P 36 | 43×45 | 17.1 | P 49 | 68×85 | 36.8 |
| P 11 | —×50 | 32.6 | P 24 | 25×27 | 17.1 | P 37 | 50×60 | 20.6 | P 50 | 144×165 | 101.4 |
| P 12 | 60×62 | 27.6 | P 25 | 27×30 | 42.1 | P 38 | 26×32 | 16.2 | | | |
| P 13 | 37×54 | 29.6 | P 26 | 25×33 | 36.9 | P 39 | 29×30 | 30.3 | | | |

＜カマド＞ 北壁に設置されている。作り替えと考えられる。旧カマドを1号カマド、新カマドを2号カマドとする。

〔1号カマド〕 北壁中央部に設置されている。煙道部が残存するのみである。掘り込み式と考えられる。煙道は幅50cm、深さ40cmで、ほぼ水平にのび、煙出部へ続いている。壁からの長さは約1.2mである。煙道底面は中揮浮石を含んだ黒色土である。煙出部は底部に掘り込みを持たない。

〔2号カマド〕 北壁東寄りに設置されている。煙道部が残存するのみである。掘り込み式である。煙道は側壁に加工された凝灰岩を配し、幅60cm、深さ25~30cmで、ほぼ水平に延び、煙出部へ続いている。長さは約1.15mである。煙出部は底部に径40×42cmの円形状の掘り込みをもち、底面は煙道底面より10cmほど深くなっている。

遺物（第43~46図、写真図版39~41）

土器82~111・115、土製品112・113、鉄製品114、石器116が出土している。82~92はロクロ使用の上師器壺である。85・87・91を除き内面はミガキ後黒色処理されており、83・84・86・89・92は口縁端部が僅かに外方へ折れている。また、82~88は体部に墨書きされ、特に88は横位に墨書きされている。82は「海」、88は「海□」の可能性がある。93は須恵器蓋である。摘み部から大きく外傾し、口縁端部は外方へ折れている。底面には回転ヘラケズリ痕が残っている。

94~106は土師器壺で、そのうち97~101・106はロクロ不使用である。94・95は小型壺である。94は口縁部が大きく外方へ折れ、口縁端部は丸みをおびている。内面全体と外面の一部にカキメ痕が残っている。95は底部切り離しが静止糸切りで、口縁部は頸部から外方へ折れた後上方へ引き出されている。96は口縁部が頸部から外傾しており、口縁端部は平らに調整されている。内外両面とも煤け、外面には炭化物が付着している。97は底部の周辺が突出し、体部は僅かに外傾しながら立ち上がっており、上半部に最大径をもっている。口縁部は外方へ折れ、口縁端部は平らに調整されている。底部は木葉痕である。器面調整は口縁部が内外両面ともヨコナデ、体部は外面がナデ、ケズリ、内面がハケメである。98は輪積み痕が残り、器面調整は外面がケズリ、内面は指ナデ、ヘラナデである。底部は木葉痕で、口縁部内面は煤けている。99

は口縁端部が平らに調整されている。口縁部内面は焼け、炭化物が付着している。100・101の口縁部は頸部から外傾しており、口縁端部は僅かに肥厚し、平らに調整されている。100は外面が焼け、頸部内面に炭化物が付着しており、101は口縁部外面が焼けている。102は口縁部が外方へ折れ、途中から上方に引き出され、口縁端部は小さな丸みをもっている。内面に炭化物が付着している。103は垂直気味に立ち上がってている体部から口縁部が外方へ折れ、口縁端部は僅かに肥厚し平らに調整されている。体部には外面に平行敲き目痕が、内面には平行當て具痕が残っている。104・105は底部である。外面には敲き目痕、内面には當て具痕が残っており、いずれも底面にまで及んでいる。104の底部は丸底風であり、105の底部は平らに調整されている。103と104は接合しないが同一個体の可能性がある。106の底部は木葉痕である。

107～109は須恵器の壺である。107の口縁部は僅かに肥厚し、口縁端部は丸くおさまっている。108の体部下端には一部ナデやケズリが施されている。底部は切り離しが回転糸切りであるが、切り離し後、一部調整されている。109の底部切り離しは回転糸切りである。

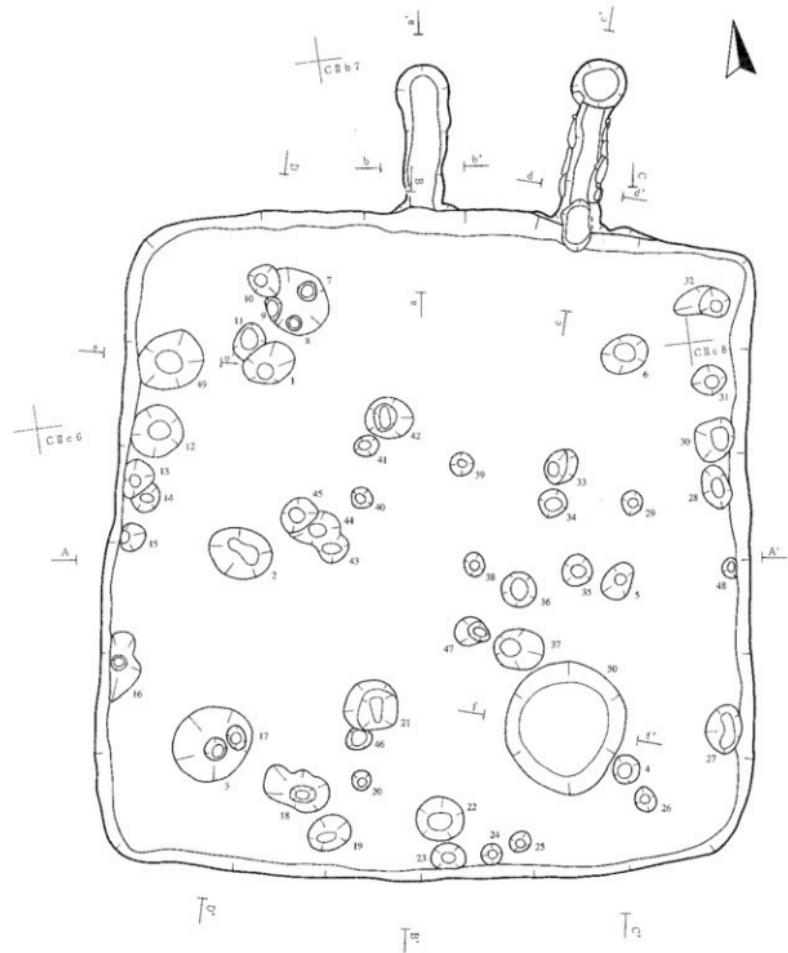
110・111は須恵器壺の口縁部である。110は垂直気味に、111は外反気味に立ち上がり、口縁端部は110が平らに、111が上方へ引き出されている。

112・113は紡錘車で、半分が欠失している。どちらも径7～8mmの穴があいていたと考えられる。114は刀子の柄部で、身部の一部も残っている。身部の断面形は細長い三角形である。

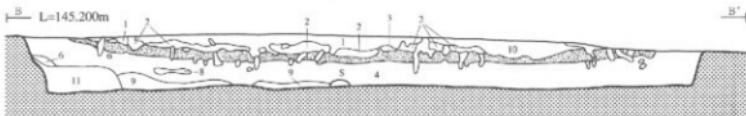
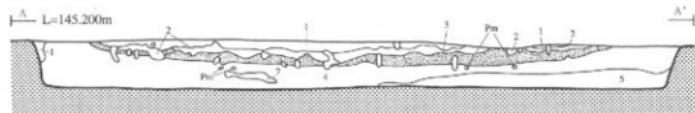
115は流れ込みの縄文土器（深鉢）で、表面の剥落が著しく、斜格子状の沈線が僅かに残るのみである。内外両面とも焼けており、内面上部には炭化物が付着している。輪積痕が残り、胎土には砂粒を多量に含んでいる。116は搔器である。横断面形は台形状である。

時期

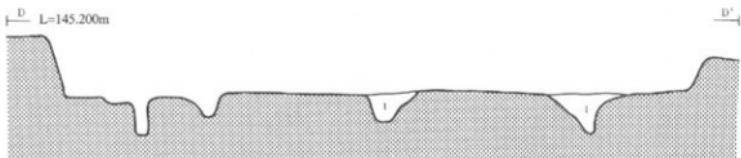
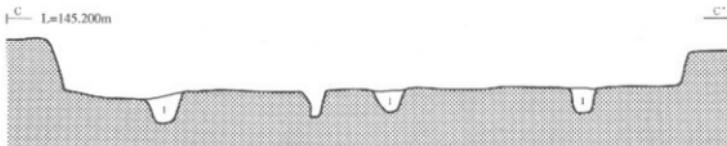
出土遺物から、平安時代と考えられる。



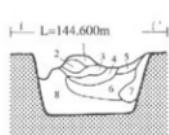
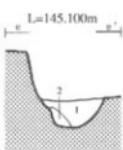
第40図 C II b 6住居跡 (1)



| A—A' B—B' | |
|-----------|---------------------------------------|
| 部位 | 色調 土性 |
| 1 | 10YR2/1 茶褐色 シルト 中層漂浮石含(2%) |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色 シルト 黑色土(10YR2/1)含 十和田山火山灰 |
| 3 | 2.5Y6/4 に近い黄色 上部土 a 大山灰 |
| 4 | 10YR1.7/1 黒色 シルト 中層漂浮石 含 |
| 5 | 黒色(10YR1.7/1)と中層漂浮石と漂浮石の混土 漂土含 吸水化物含 |
| 6 | 10YR3/3 暗褐色 シルト 形質に富む 黑色土(10YR1.7/1)含 |
| 7 | 10YR1.7/1 黒色 シルト 中層漂浮石含(30%) |
| 8 | 黑色土(10YR1.7/1)と中層漂浮石の混土 |
| 9 | 10YR1.7/1 黑色 シルト 南部漂浮石含(15%) |
| 10 | 十和田山火山灰と黒色土(10YR1.7/1)の混土 (複合層) |
| 11 | 10YR2/1 黑色 シルト 南部漂浮石含 中層漂浮石含 |

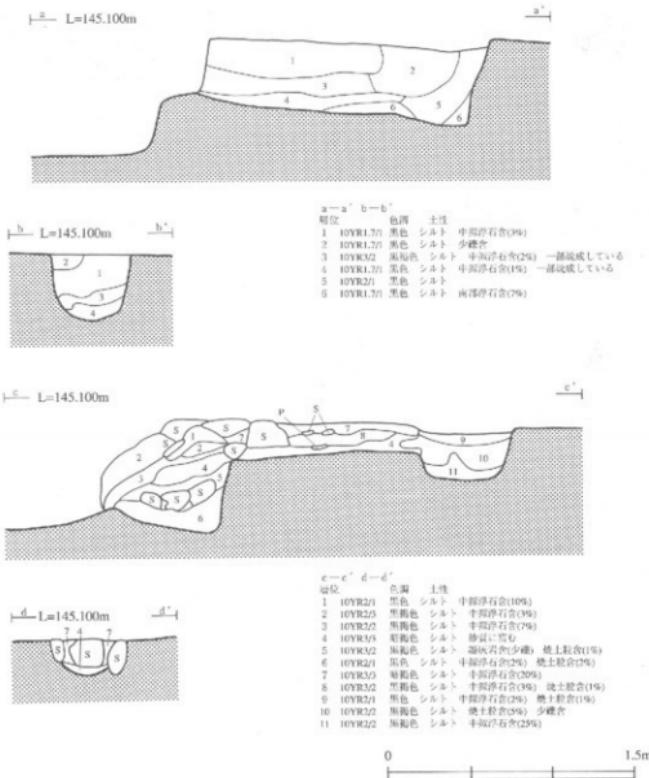


| C—C' D—D' | |
|-----------|---------------------------------|
| 部位 | 色調 土性 |
| 1 | 10 Y R 1.7/1 黑色 シルト 内部漂浮石含(30%) |

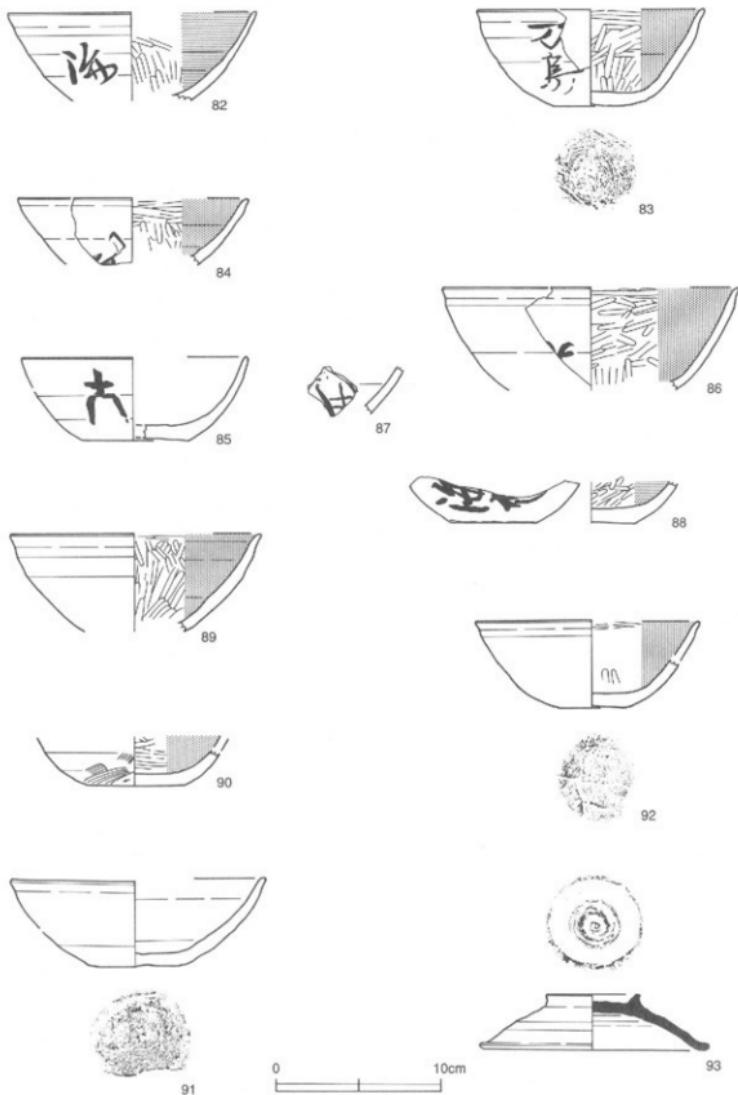


| e—e' | |
|------|------------------------------|
| 部位 | 色調 土性 |
| 1 | 10YR1.7/1 黑色 シルト 内部漂浮石含(10%) |
| 2 | 黑色土(10YR1.7/1)と南部漂浮石の混土 |

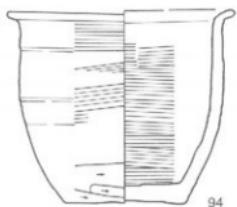
第41図 C II b 6 住居跡 (2)



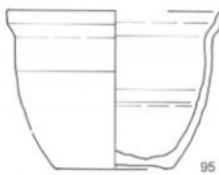
第42図 C II b 6住居跡 (3)



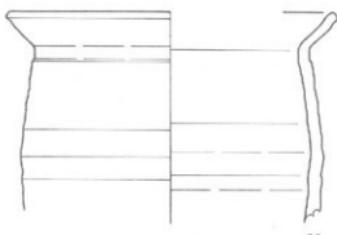
第43図 C II b 6住居跡 出土遺物 (1)



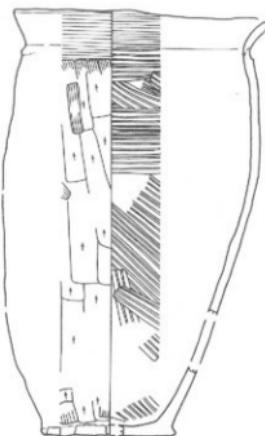
94



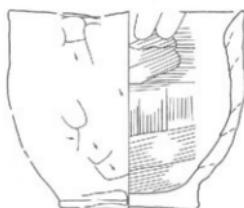
95



96



97



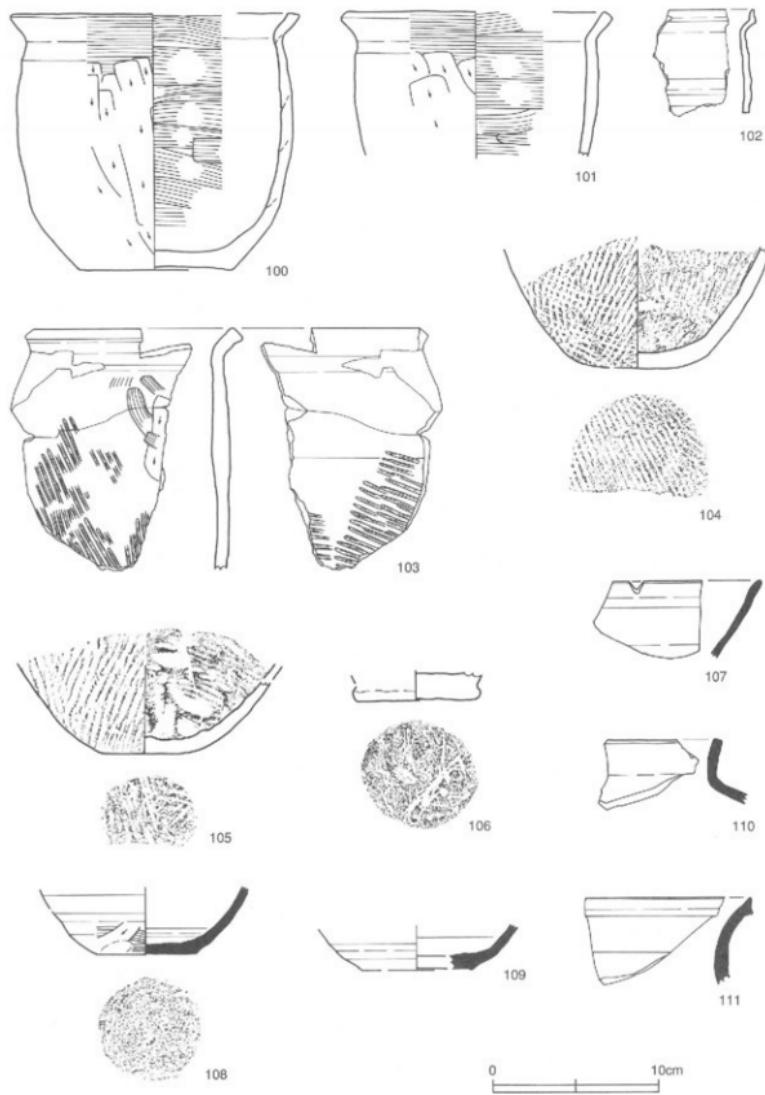
98

94~96・98・99
0 10cm

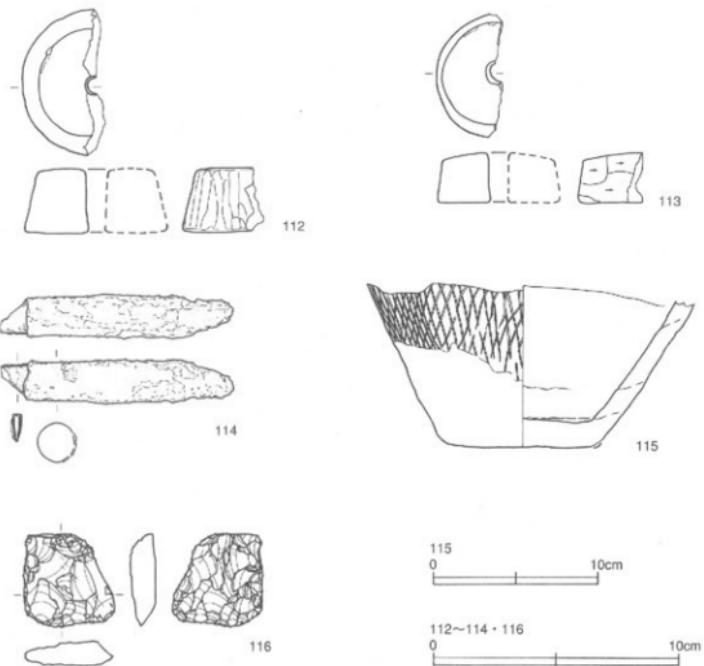


99

第44図 C II b 6 住居跡 出土遺物 (2)



第45図 C II b 6 住居跡 出土遺物 (3)



第46図 C II b 6 住居跡 出土遺物 (4)

C II c 8 住居跡

遺構 (第47図、写真図版18・19)

<位置・検出状況> 調査区画南部グリッドC II c 8・c 9・d 8・d 9にまたがって位置する。IV層上面で十和田a降下火山灰の広がりとして検出された。

<重複関係> なし。

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形で、規模は $4.5 \times 4.8\text{m}$ である。

<埋土> 14層に細分され、上部は黒色～黒褐色土、中部は十和田a降下火山灰、下部は炭化物や焼土粒を含んだ黒色土が主体である。特に十和田a降下火山灰の厚さは最大で25cmある。全体にどの層もよく縮まっている。

<壁> 外傾しながら立ち上がりっている。壁高は43～53cmで、北壁が最も高い。

<床面> 南部浮石を含む黒色土である。多少凹凸があるがほぼ平坦であり、よく縮まっている。北側が少

し深くなつており、床面上のほぼ全面に焼土粒や炭化物が残存している。

＜柱穴・土坑＞ 約20個検出したが、計測したのは1個である。カマド右からの検出であり、規模は径35×35cm、深さ23.8cmである。

＜カマド＞ 東壁や南寄りに設置されている。本体は袖部が残る。芯材として扁平な凝灰岩を使用し、それを粘土質シルトで覆って構築されている。燃焼部の焼土は、径45×68cmの不整形に広がり、厚さは最大で13cmあり、よく焼成している。煙道部は掘り込み式である。煙道はほぼ水平に延び、煙出部へ続いている。長さは1.4mである。煙出部は径48×50cmの円形状の掘り込みをもち、底面は煙道底面より18cmほど低くなっている。

遺物（第48図、写真図版41・42）

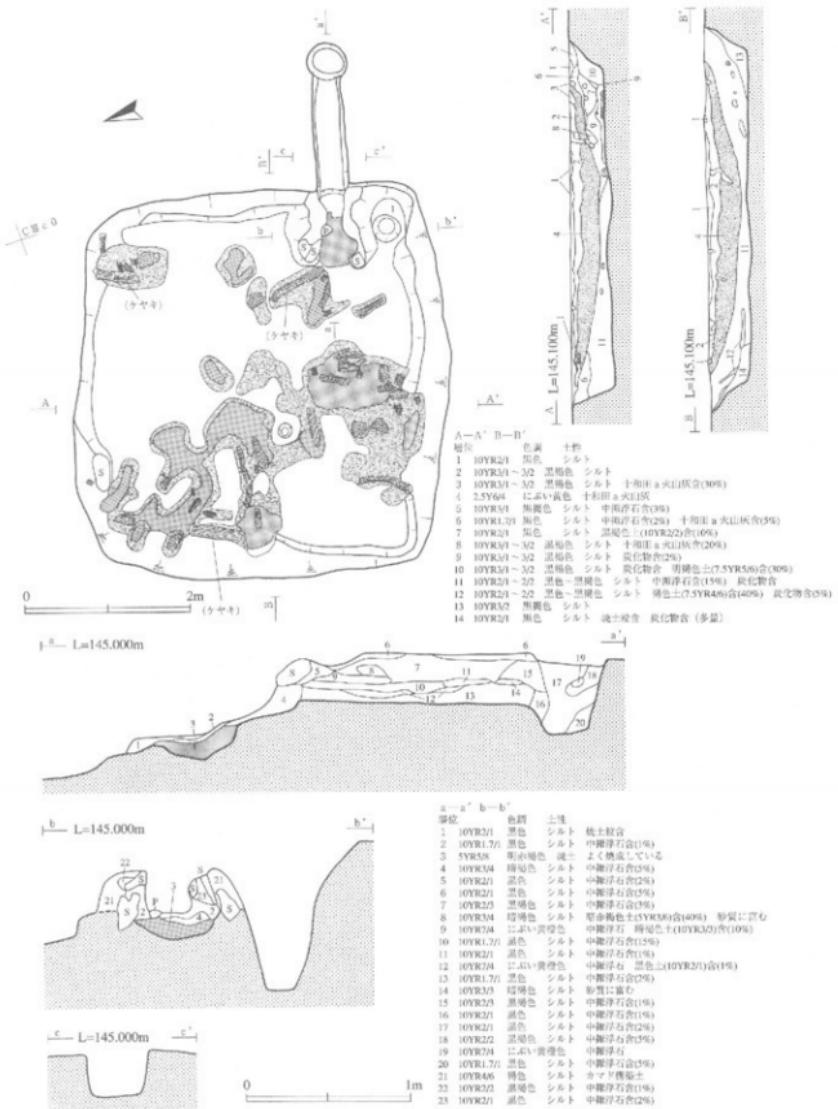
土器117～121、鉄製品122・123が出土している。117～120はロクロ使用の土師器壺である。119の口縁部は端部が僅かに外方へ折れている。いずれも底面の切り離しは回転糸切りである。117は体部に墨書きされている。

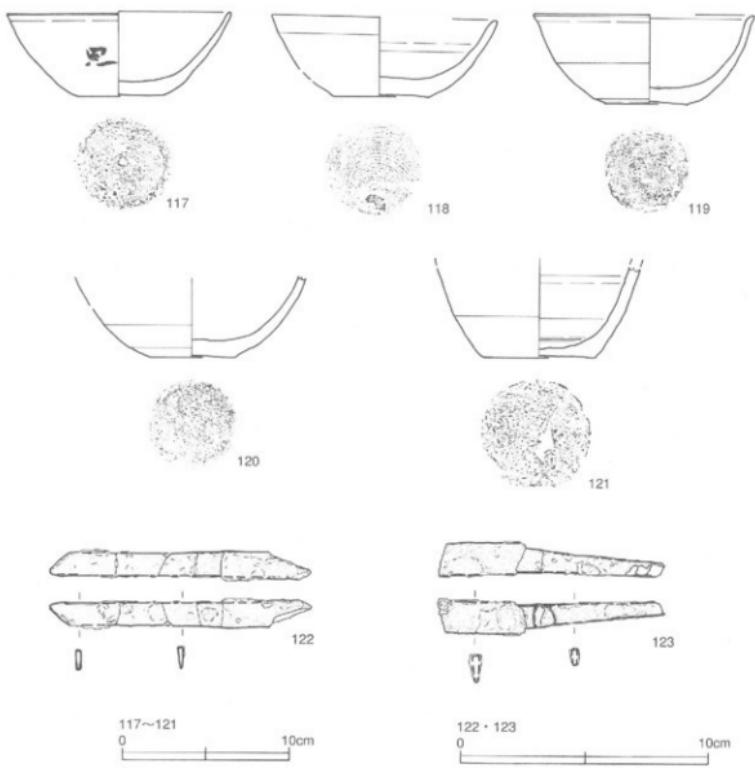
121はロクロ使用の土師器壺で、底部から緩く外傾しながら立ち上がりつてある。胎上には砂粒が多量に含まれ、外面は塗けている。底部の切り離しは回転糸切りである。

122・123は刀子の身部である。いずれも断面形は幅長の三角形である。122は残存長10.7cm、最大幅9mm、最大厚2mm、123は残存長9.2cm、最大幅1.1cm、最大厚3mmである。

時期

出土遺物から、平安時代と考えられる。





第48図 C II c 8 住居跡 出土遺物

(2) 住居状遺構

B II b 0 住居状遺構

遺構 (第49図、写真図版20・21)

<位置・検出状況> 調査区域中央部グリッドB II b 0に位置する。IV層上面で十和田a降下火山灰の広がりとして検出された。

<重複関係> なし

<平面形・規模> 平面形は隅丸長方形で、規模は $2.8 \times 4.2m$ である。

<埋土> 3層に分けられる。上部から十和田a降下火山灰、十和田a降下火山灰をブロック状に含む黒色土、中摺浮石を含む黒色土である。3層の黒色土はよく縮まっている。

<壁> 南西壁はほぼ垂直に、他は緩く外傾しながら立ち上がっている。壁高は30~50cmで、南西壁と北西壁が高くなっている。

<床面> 南部浮石を含む黒色土である。多少の凹凸があるがほぼ平坦であり、南東側が少し低くなっている。

<柱穴> P 1~P 14まで14個検出された。南東壁を除く三方の壁際からの検出である。平面形はほぼ円形で、規模は径 $13 \times 14cm \sim 20 \times 24cm$ 、深さ $14.3 \sim 24.4cm$ である。なお、柱穴計測値は次のとおりである。

| 番号 | 単位: cm | | | | | | | | | |
|----|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 | P 10 |
| 径 | 17×18 | 19×20 | 18×20 | 17×19 | 20×24 | 17×21 | 18×18 | 19×20 | 18×18 | 16×18 |
| 深さ | 17.1 | 24.4 | 16.1 | 18 | 17.5 | 14.5 | 15.7 | 19.2 | 20.1 | 20 |

| 番号 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 |
|----|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 15×15 | 20×20 | 13×14 | 14×15 |
| 深さ | 16.1 | 14.3 | 16 | 15.9 |

遺物

出土していない。

時期

B II c 4 住居状遺構と検出面や検出状況が同じことから奈良時代と考えられる。

B II c 4 住居状遺構

遺構 (第50図、写真図版20・21)

<位置・検出状況> 調査区域中央部グリッドB II c 4・d 4にまたがって位置する。IV層上面で十和田a降下火山灰の広がりとして検出された。北西壁と南西壁の一部が削平され残存しない。

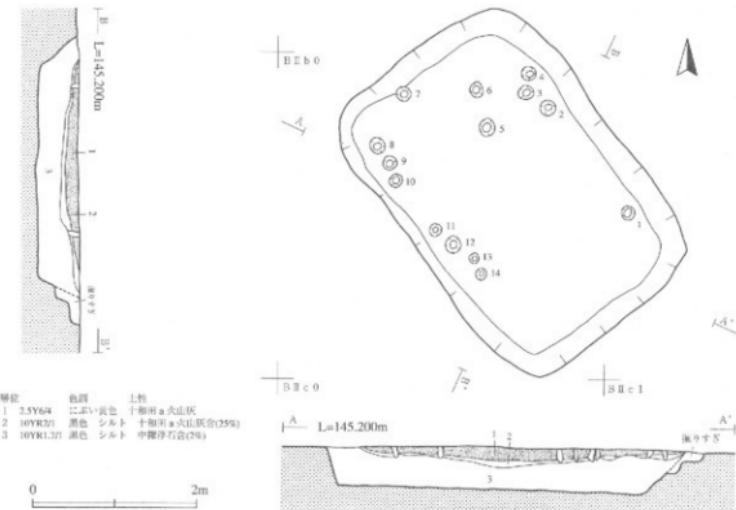
<重複関係> なし

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形で、規模は径 $3.3 \times 3.5m$ である。

<埋土> 4層に細分され、上部から十和田a降下火山灰、中摺浮石を含む黒色土が主体で、全体によく縮まっている。

<壁> 繊やかに外傾しながら立ち上がっている。壁高は30~55cmで、北東壁が最も高い。

<床面> 南部浮石を含む黒色土である。少し凹凸があるがほぼ平坦であり、かたく縮まっている。北西壁が少し低くなっている。



第49図 B II b 0 住居状遺構

＜柱穴＞ P 1～P 25まで25個検出された。平面形はほぼ円形で、規模は径12×13cm～29×30cm、深さ8.6～34.6cmである。なお、柱穴計測値は次の表のとおりである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 | P 8 | P 9 | P 10 |
|----|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 22×23 | 16×20 | 18×29 | 22×29 | 23×— | 24×— | 20×20 | 18×23 | 17×19 | 17×18 |
| 深さ | 18.7 | 17.4 | 13 | 8.6 | 15.3 | 17.3 | 12.3 | 11.6 | 14.3 | 33.3 |

| 番号 | P 11 | P 12 | P 13 | P 14 | P 15 | P 16 | P 17 | P 18 | P 19 | P 20 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 22×30 | 21×30 | 28×30 | 26×27 | 18×20 | 19×21 | 20×23 | 24×26 | 29×30 | 16×16 |
| 深さ | 29.9 | 16.1 | 18.1 | 16.8 | 12 | 17.3 | 18.3 | 16.3 | 19.4 | 13 |

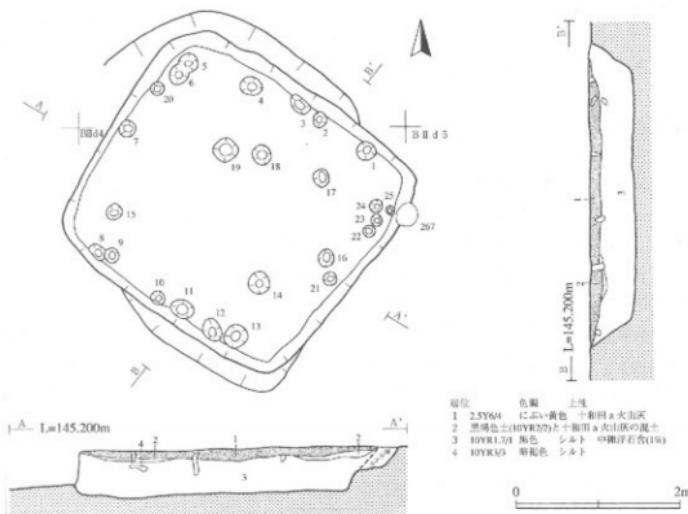
| 番号 | P 21 | P 22 | P 23 | P 24 | P 25 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 17×17 | 15×16 | 14×14 | 15×18 | 12×13 |
| 深さ | 34.6 | 16.2 | 12.9 | 12.1 | 9.1 |

遺物（第51図、写真図版42）

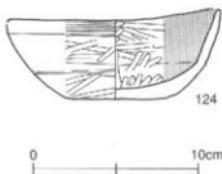
土器124が床上から出土している。ロクロ不使用の土器器坏である。底部は平らに調整され、体部下半部には沈線が1条流っている。内面はミガキ後黒色処理されており、黒色処理は口縁部外面にまで及んでいる。外面は口縁部にヨコナデ、体部にミガキが施されている。

時期

出土遺物から、奈良時代と考えられる。



第50図 B II c 4 住居状遺構



第51図 B II c 4 住居状遺構
出土遺物

(3) 堀立柱建物跡

調査区域東部、南西部、北西部から1棟ずつ計3棟検出された。検出面はIV層面である。

1号堀立柱建物跡

遺構（第52図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB III d 3・e 3にまたがって位置する。IV層面で中振浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ P 248が5号溝状遺構を切っている。また、P 252はP 13に切られている。

＜規模・方向＞ 規模は桁行2間（5.2～5.55m）、梁行2間（4.05～4.25m）である。棟方向は北一南を示し、北に対して11度東偏している。

＜柱配置・柱間寸法＞ 柱穴は8個検出された。平面形は円形で、規模は下表のとおりである。柱痕跡は確認されなかった。柱配置はほぼ長方形である。桁行柱間寸法は、P 249—P 248：2.7m、P 248—P 255：2.5m、P 251—P 252：3.25m、P 252—P 253：2.3m、P 249—P 250：2.05m、P 250—P 251：2m、P 255—P 254：2.35m、P 254—P 253：1.9m、P 248—P 252：4.2m、P 250—P 254：5.35mである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 249 | P 248 | P 255 | P 251 | P 252 | P 253 | P 250 | P 254 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 40×41 | 48×60 | 54×70 | 43×48 | 48×55 | 50×67 | 44×49 | 61×68 |
| 深さ | 60.5 | 63.3 | 49.6 | 62.4 | 54 | 72 | 67.7 | 77.7 |

＜埋土＞ 一部を除き埋土の固化は省略したが、黒色土又は黒褐色土上で中振浮石を含んでおり、よく締まっている。

遺物

出土していない。

時期

P 248が5号溝状遺構を切っていることから溝状遺構より新しいと考えられるが、詳細は不明である。

2号堀立柱建物跡

遺構（第53図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部グリッドB II j 2・j 3にまたがって位置する。IV層面で中振浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ なし。

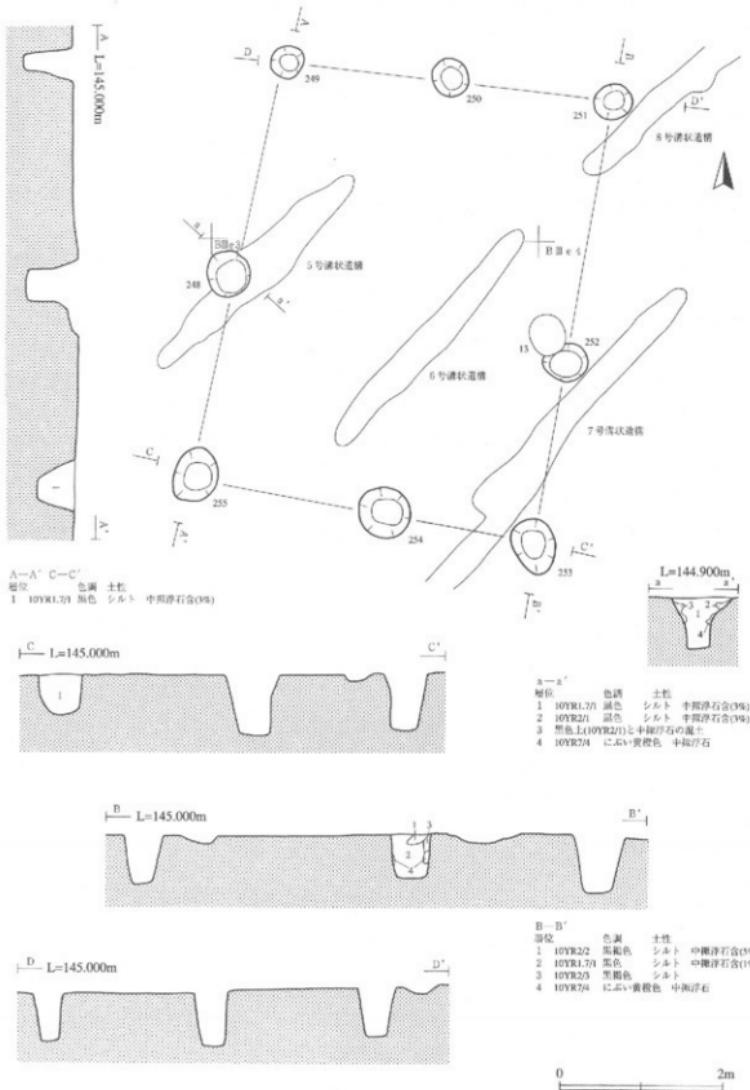
＜規模・方向＞ 規模は桁行2間（4.15～4.25m）×梁行1間（2.05m）である。棟方向はほぼ北西一南東を示し、北に対して50度西偏している。

＜柱配置・柱間寸法＞ 柱穴は6個検出された。平面形は円形や梢円形で、規模は下表のとおりである。柱配置はほぼ長方形であり、柱間寸法は、P 262—P 171：2.15m、P 171—P 169：2.1m、P 270—P 172：2.15m、P 172—P 174：2.05m、P 262—P 270：2.05m、P 169—P 174：2.05mである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 262 | P 171 | P 169 | P 270 | P 172 | P 174 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 37×37 | 34×39 | 50×69 | 35×35 | 42×52 | 50×69 |
| 深さ | 22 | 37 | 31.8 | 22.5 | 31.3 | 31.8 |



第52図 1号堀立柱建物跡

＜埋土＞ 墓上の固化は省略したが、黒色土又は黒褐色土で中漂浮石を多量に含んでおり、やや縮まりに欠ける。

遺物

出土遺物はない。

時期

不明である。

3号掘立柱建物跡

遺構（第53図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北西部グリッドB I b 8・b 9・c 8・c 9にまたがって位置する。IV層上面で十和田a降下火山灰を多量に含む黒色土の広がりとして検出された。西側の一部は削平されており残存しない。

＜重複関係＞ なし。

＜規模・方向＞ 規模は桁行（4）間（7.65m）×梁行3間（5m）である。棟方向はほぼ東一西を示し、西に対して2度南偏している。

＜柱配置・柱間寸法＞ 柱穴は13個検出された。平面形は円形や楕円形で、規模は下表のとおりである。柱配置はほぼ長方形であり、中央部にも2個配置されていることから、寄せ棟造りと考えられる。柱間寸法は、P 1—P 2：1.6m、P 2—P 3：1.7m、P 3—P 4：1.48m、P 4—P 5：2.85m、P 6—P 7：2.95m、P 10—P 11：1.65m、P 11—P 12：1.6m、P 12—P 13：2.8m、P 5—P 8：1.7m、P 8—P 9：1.55m、P 9—P 13：1.75mである。

柱穴計測表

単位：cm

| 番号 | P 1 | P 2 | P 3 | P 4 | P 5 | P 6 | P 7 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 24×25 | 23×24 | 23×25 | 27×28 | 23×25 | 23×25 | 26×27 |
| 深さ | 28.8 | 27.3 | 39.8 | 25.7 | 26.9 | 31.6 | 18.7 |

| 番号 | P 8 | P 9 | P 10 | P 11 | P 12 | P 13 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径 | 27×30 | 25×29 | 34×43 | 23×25 | 26×29 | 24×25 |
| 深さ | 25 | 26.7 | 28 | 29.4 | 27.2 | 29.2 |

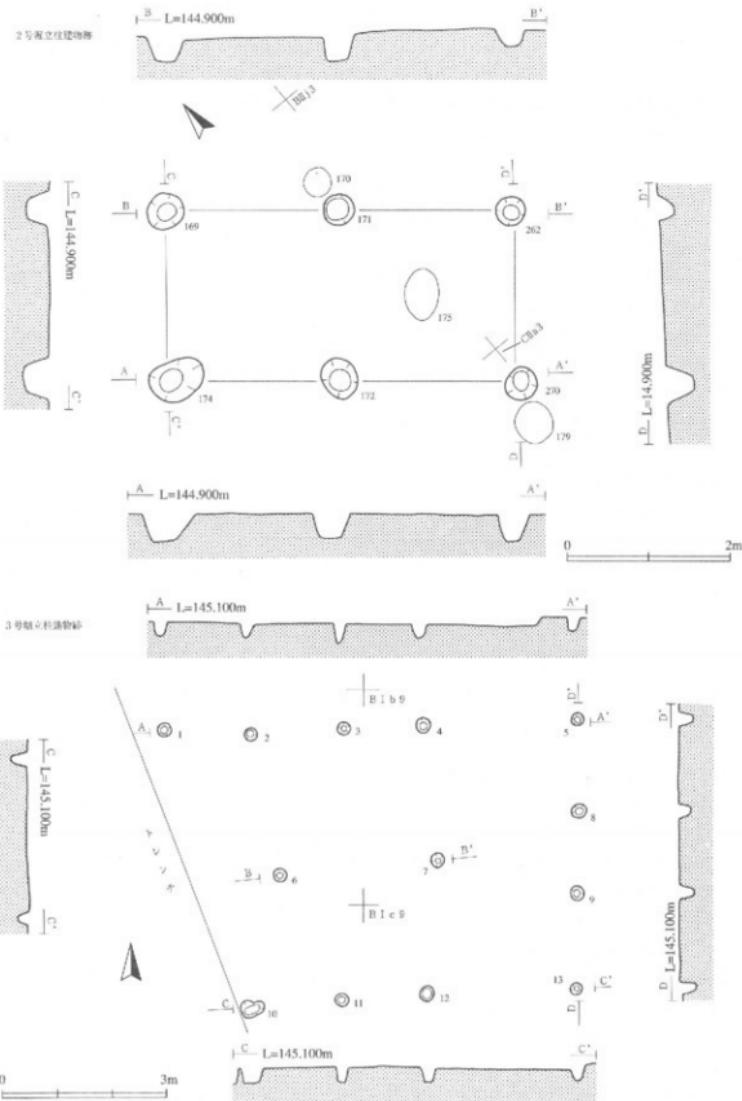
＜埋土＞ 墓上の固化は省略したが、黒色土で十和田a降下火山灰がブロック状で含まれ、その割合は上部ほど高い。全体に縮まりに欠ける。

遺物

出土していない。

時期

埋土に十和田a降下火山灰を含んでいることから、奈良時代又は平安時代の可能性があるが、後世の擾乱で混入したこととも考えられることから、時期は特定できない。



第53図 2・3号船立柱跡跡

(4) 土坑

全部で24基検出された。調査区域北部と中央部以外からの検出である。平面形は、円形、楕円形、開丸長方形、隅丸方形である。

A I c 2 土坑（第54図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北西部グリッドA I c 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径1.45×1.45m、底部径1.3×1.3m、深さは最深部で30cmあり、東側の一部が削平され残存しない。

＜壁・底面＞ 壁は底面から垂直に立ち上がっている。壁高は15.8～24.6cmである。底面は凹凸がなく、ほぼ平坦で締まっている。

＜埋土＞ 埋土は黒色土で、中揮浮石を含んでおり、よく締まっている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B I h 6 ①土坑（第54図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部グリッドB I h 6に位置する。IV層面で南部浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。造構の半分は調査区域外である。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形と考えられ、規模は開口部径(1)×1.8m、底部径(82cm)×1.15m、深さは最深部で54.3cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は38.3～54.3cmである。床面は黄褐色粘土で、凹凸があるがよく締まっている。

＜埋土＞ 2層に分けられる。どちらも南部浮石を含んだ黒色土でよく締まっている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B I h 6 ②土坑（第54図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部グリッドB I h 6・i 6にまたがって位置する。IV層面で南部浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。造構の半分は調査区域外である。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形と考えられ、規模は開口部径(1)×1.95m、底部径(82)×(82)cm、深さは最深部で66cmである。

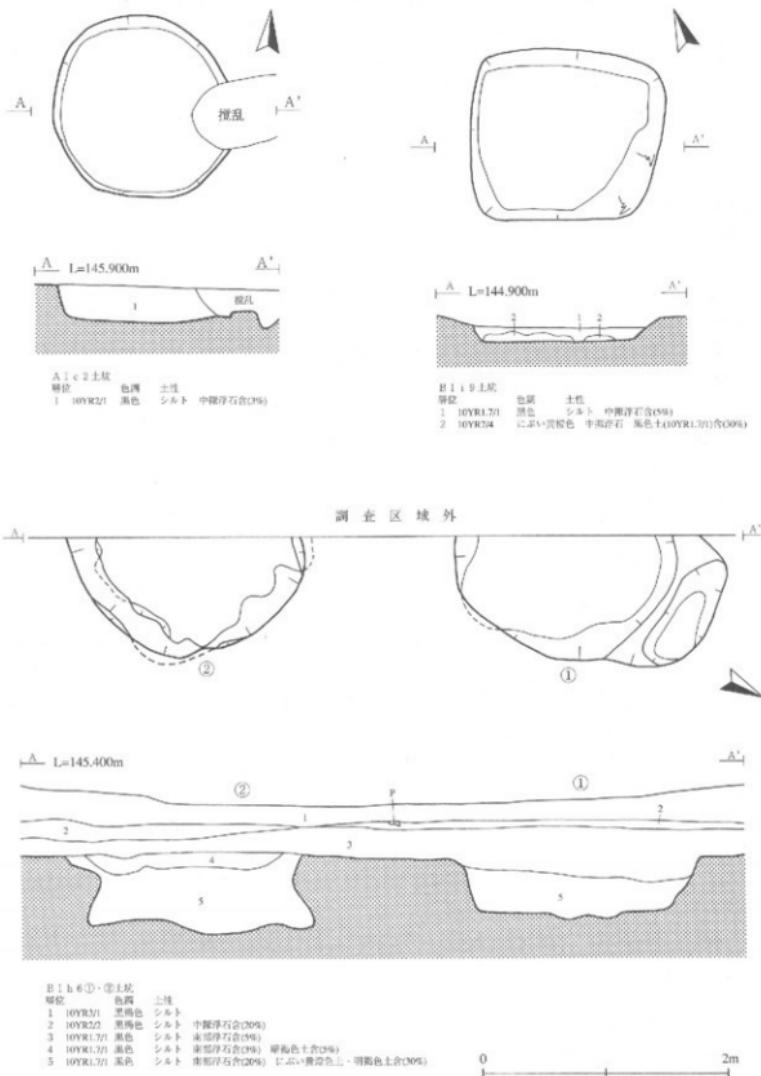
＜壁・底面＞ 壁は底面から内湾しながら立ち上がり、高さ35cm位で外反している。壁高は51.8～60.1cmである。床は黄褐色粘土で、凹凸があるがよく締まっている。

＜埋土＞ 2層に分けられる。どちらも南部浮石を含んだ黒色土でよく締まっている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B I i 9 土坑（第54図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部グリッドB I i 9・j 9にまたがって位置する。IV層面で中揮浮石を含んだ黒色土の広がりとして検出された。



第54図 A I c 2・B I h 6①・②・B II i 9土坑

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は開口部径 1.38×1.58 m、底部径 1.17×1.38 m、深さは最深部で18.5cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は11.8～18.5cmである。底面は中振浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 2層に分けられる。上部が中振浮石を含む黒色土、下部が中振浮石で、両者とも縦まりに欠ける。出土遺物はなく、時期は不明である。

B II h 0 土坑（第55図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部グリッドB II h 0に位置する。IV層下面で中振浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸長方形で、規模は開口部径 1.76×2.24 m、底部径 1.54×2.07 m、深さは最深部で14cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は6～11cmである。底面は中振浮石を含む黒色土で、凹凸があり、北側が少し低くなっている。

＜埋土＞ 黒色土で、焼土がブロック状に含まれている。やや縦まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III b 1 ①土坑（第55図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III b 1に位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出された。南西部が9・10号溝状遺構を切っている。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は開口部径 2.25×2.58 m、底部径 2.1×2.47 m、深さは最深部で12.6cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がり、壁高は2.5～12.6cmである。底面は中振浮石を含む黒色土で、凹凸が多くあり、縦まりに欠ける。

＜埋土＞ 墓土は3層に細分される。中振浮石を含む黒褐色土が主体で、全体に縦まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III b 1 ②土坑（第55図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III b 1に位置する。B III b 1 ①土坑の床面精査中に黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形で、規模は開口部径 55×84 cm、底部径 41×61 cm、深さは最深部で14cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がり、壁高は9.1～13.4cmである。底面は中振浮石を含む黒色土で、凹凸があり、縦まりに欠ける。南壁側が低くなっている。

＜埋土＞ 墓土は3層に細分される。黒褐色土が主体で、全体にやや縦まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III b 2 土坑（第55図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III b 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径87×100cm、底部径65×80cm、深さは最深部で11.8cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は9.9～11.8cmである。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 埋土は2つに分けられる。中揮浮石を含む黒色土と砂質に富む黒褐色土で、黒褐色土は全体に締まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III c 0 土坑（第56図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB II d 0・B III c 0にまたがって位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。検出時、1・10・11号溝状遺構が木造構内に延びているのが確認された。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径3×3.3m、底部径2.15×2.32m、深さは最深部で97.1cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は83.4～97.1cmで、南東壁が高くなっている。底面は南部浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 埋土の固化は省略したが、中揮浮石を含む黒色土が主体であり、よく締まっている。

出土遺物がなく時期は不明であるが、検出時の状況から1・10・11号溝状遺構より古いと考えられる。

B III c 2 ①土坑（第55図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III c 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径52×57cm、底部径30×36cm、深さは最深部で13cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は7.3～11cmである。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 黒色土で、やや締まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III c 2 ②土坑（第55図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III c 2に位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出された。南側の一部をB III c 2③土坑に切られている。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径54×63cm、底部径44×45cm、深さは最深部で14cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は9.6～9.9cmである。底面は中揮浮石

を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 2つに分けられる。上部の黒色土はやや総まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III c 2③土坑（第55図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III c 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。北側の一部がB III c 2②土坑を切っている。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径33×51cm、底部径20×34cm、深さは最深部で13cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっており。壁高は8.9～12.4cmである。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 中揮浮石を含む黒色土で、縦まっている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III c 2④土坑（第55図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III c 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。南東側の一部がB III c 2⑤土坑を切っている。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径90×91cm、底部径63×68cm、深さは最深部で21.6cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっており。壁高は17.3～21.6cmである。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 2層に分けられる。下部の暗褐色土は砂質に富んでいる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III c 2⑤土坑（第55図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III c 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含んだ黒色土の広がりとして検出された。北西側の一部がB III c 2④土坑に切られている。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径52×(75)cm、底部径32×(65)cm、深さは最深部で16.3cmである。

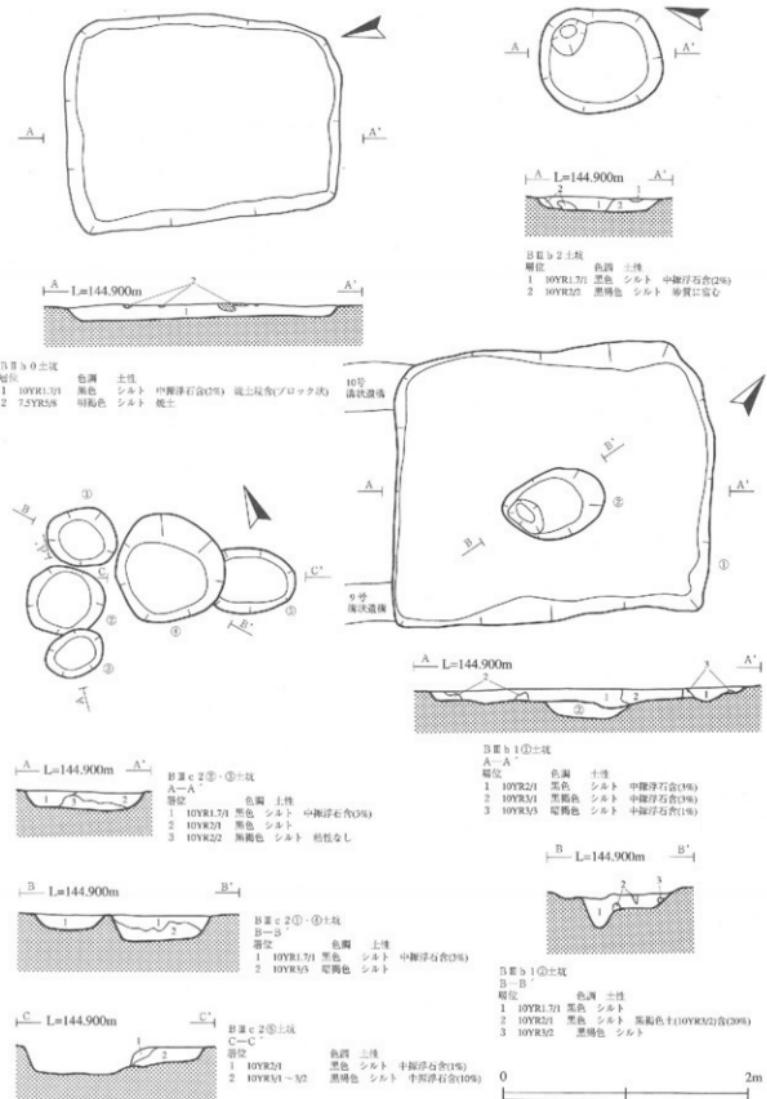
＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっており。壁高は11.1～13.7cmである。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 2層に分けられる。上部から黒色土と黒褐色土で、どちらも中揮浮石を含んでおり、特に下部の黒褐色土はその割合が高い。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III c 2⑥土坑（第56図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞ 調査区域北東部グリッドB III c 2・c 3にまたがって位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。



第55図 B II h 0・B III b 1①・②・B III b 2・B III c 2①・②・③・④・⑤土坑

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形で、規模は開口部径 1.13×1.34 m、底部径 98 cm $\times 1.20$ m、深さは最深部で 12 cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は $5.2 \sim 9$ cmである。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 2層に分けられる。黒色土と黒褐色土で、黒色土には中揮浮石が含まれている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III f 2 ①土坑（第56図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB III f 2に位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形で、規模は開口部径 32×50 cm、底部径 20×35 cm、深さは最深部で 12 cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は $7.8 \sim 8.3$ cmである。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 黒色土で締まっている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III f 2 ②土坑（第56図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB III f 2に位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は梢円形で、規模は開口部径 57×76 cm、底部径 38×70 cm、深さは最深部で 16 cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は $10.4 \sim 14.4$ cmで、東壁が高くなっている。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があり、中央部が低くなっている。

＜埋土＞ 3層に分けられる。黒色土が主体で、全体に締まっている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III f 2 ③土坑（第56図、写真図版26）

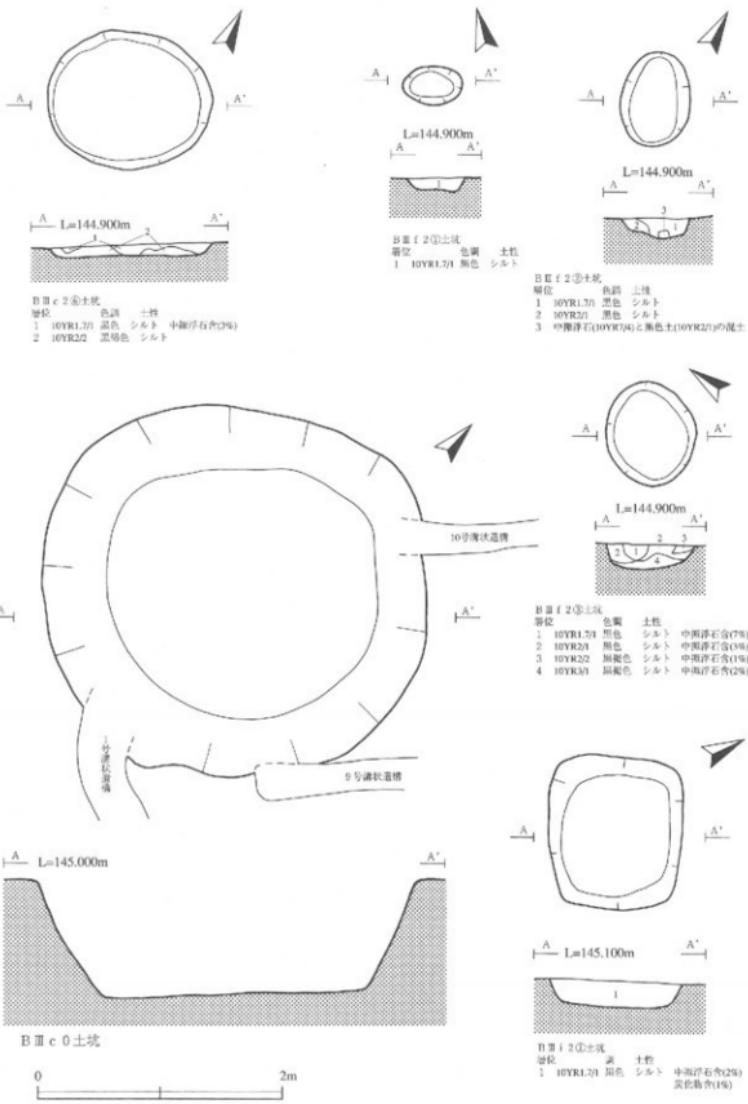
＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB III f 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 76×85 cm、底部径 60×72 cm、深さは最深部で 21 cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は $15 \sim 20$ cmである。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があり、中央部が少し低くなっている。

＜埋土＞ 4層に細分される。黒色土と黒褐色土が主体で、いずれも中揮浮石を含んでいる。

出土遺物はなく、時期は不明である。



B III i 2 ①土坑 (第56図、写真図版27)

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB III i 2・j 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は開口部径 1×1.24 m、底部径 78×100 cm、深さは最深部で22cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は15.5～21.1cmである。底面は南部浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが、平坦であり、北東側が少し低くなっている。

＜埋土＞ 埋土は黒色土で、中揮浮石と炭化物を含んでおり、全体に締まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

B III i 2 ②土坑

遺構 (第58図、写真図版27)

＜位置・検出状況＞ 調査区域東部グリッドB III i 2・j 2にまたがって位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸長方形で、規模は開口部径 1.2×2.68 m、底部径 1.07×2.43 m、深さは最深部で24.1cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は9～24.1cmである。底面は南部浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦であり、西側が少し低くなっている。

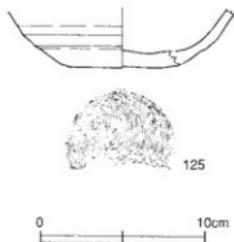
＜埋土＞ 2層に分けられる。中揮浮石を含んだ黒色土が主体で、全体に締まりに欠ける。

遺物 (第57図、写真図版42)

土器125が埋土上部から出土している。ロクロ使用の上師器耳である。体部は底部から外傾しながら立ち上がり、底部の切り離し技法は回転糸切りである。胎土には砂粒が多量に含まれている。

時期

遺物は埋土上部からの出土であり、時期は特定できず不明である。



第57図 B III i 2 ②土坑 出土遺物

C II a 3 土坑 (第58図、写真図版27)

＜位置・検出状況＞ 調査区域南部グリッドC II a 3に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形で、規模は開口部径 1.04×1.51 m、底部径 64×87 cm、深さは最深部で31.7cmである。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は25.8～31.7cmで、北西壁が高くなっている。底面は南部浮石を含む黒色土で、凹凸があるが平坦である。

＜埋土＞ 4層に細分される。中揮浮石を含む黒色土が主体であり、全体に締まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。

C II a 8 土坑（第58図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南部グリッドC II a 8に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ隅丸長方形で、規模は開口部径 $1.24 \times 1.73\text{m}$ 、底部径 $1.03 \times 1.12\text{m}$ 、深さは最深部で 13cm である。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は $8.9 \sim 12.8\text{cm}$ である。底面は中揮浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦であり、全体に締まりに欠ける。

＜埋土＞ 2層に分けられる。中揮浮石を含む黒色土が主体であり、全体に締まりがない。

出土遺物はなく、時期は不明である。

C III a 1 土坑（第58図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南部グリッドC III a 1に位置する。IV層面で黒色土と中揮浮石を含む黒褐色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は開口部径 $81 \times 100\text{cm}$ 、底部径 $57 \times 78\text{cm}$ 、深さは最深部で 22.3cm である。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は $14.4 \sim 22.3\text{cm}$ である。底面は南部浮石を含む黒色土で、少し凹凸があるが平坦である。全体に締まりに欠ける。

＜埋土＞ 4層に細分される。上部から黒褐色土、黒色土、黒褐色土で、1層以外は中揮浮石を含んでおり、全体に締まっている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

C III a 2 土坑（第58図、写真図版28）

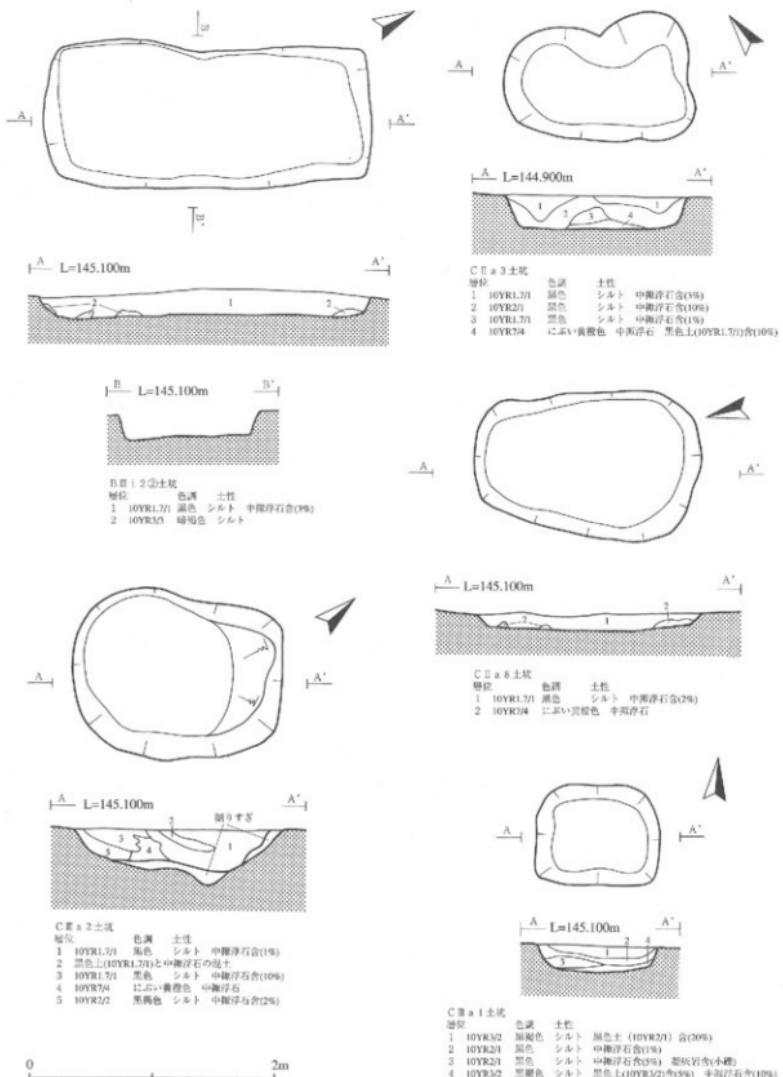
＜位置・検出状況＞ 調査区域南部グリッドC III a 2に位置する。IV層面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ隅丸長方形で、規模は開口部径 $1.35 \times 1.7\text{m}$ 、底部径 $1.12 \times 1.55\text{m}$ 、深さは最深部で 34cm である。

＜壁・底面＞ 壁は底面から外傾しながら立ち上がり、外傾の度合いは北東壁が大きい。壁高は $13.4 \sim 20.8\text{cm}$ で、西壁が高くなっている。底面は南部浮石を含む黒色土で、少し凹凸があり、北東側が低くなっている。なお、床面と北東壁は精査の際、少し掘り過ぎている。

＜埋土＞ 5層に細分される。中揮浮石を含む黒色土が主体であり、全体に締まりに欠ける。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第58図 B III i 2②・C II a 3・C II a 8・C III a 1・C III a 2土坑

(5) 柱穴状小土坑

270個（掘立柱建物跡柱穴を含む）が検出された。調査区域東部、中央部、西部に集中している。ここでは、東部柱穴状小土坑群、中央部柱穴状小土坑群、西部柱穴状小土坑群として記載する。各柱穴状小土坑群とも時期や性格については不明である。

東部柱穴状小土坑群（第59・60図、写真図版28）

全部で72個の検出である。IV層上面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。平面形は円形が多く、規模は径13×14cm～61×68cm、深さ5.8～77.7cmである。埋土は黒色土又は黒褐色土が主体であり、中揮浮石を含みよく締まっている。

中央部柱穴状小土坑群（第61・62図、写真図版29）

全部で155個の検出である。IV層上面で中揮浮石を含む黒色土の広がりとして検出された。平面形は円形や橢円形で、規模は径12×13cm～63×85cm、深さ4～61.6cmである。埋土は黒色土又は黒褐色土が主体であり、中揮浮石を含んでいる。特に南側に集中している柱穴は中揮浮石を多く含んでおり、締まりに欠ける。

西部柱穴状小土坑群（第63図、写真図版29）

全部で43個の検出である。IV層下面で中揮浮石を多量に含む黒色土の広がりとして検出された。平面形はほとんど円形であるが、一部方形もある。規模は径17×20cm～35×35cm、深さは8～48.2cmである。埋土は黒色土又は黒褐色土が主体であり、中揮浮石を含み、全体に締まりに欠ける。

東部柱穴状小土坑群計測表

単位：cm

| 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ |
|----|-------|------|----|-------|------|----|-------|------|----|-------|------|-----|-------|------|
| 1 | 20×28 | 10.8 | 16 | 21×27 | 19.4 | 31 | 19×21 | 9.2 | 46 | 16×18 | 20.2 | 61 | 32×35 | 25 |
| 2 | 25×28 | 14.7 | 17 | 24×27 | 23.3 | 32 | 32×37 | 14 | 47 | 25×29 | 34.1 | 62 | 27×30 | 35.8 |
| 3 | 17×18 | 9.5 | 18 | 22×35 | 20.3 | 33 | 22×23 | 15.2 | 48 | 32×35 | 40.4 | 248 | 48×60 | 63.3 |
| 4 | 28×30 | 10.3 | 19 | 40×50 | 32.6 | 34 | 18×19 | 8.7 | 49 | 26×29 | 22.5 | 249 | 40×41 | 60.5 |
| 5 | 17×20 | 9.7 | 20 | 20×22 | 26.4 | 35 | 16×17 | 7.5 | 50 | 16×17 | 17.4 | 250 | 44×49 | 67.7 |
| 6 | 19×20 | 11.6 | 21 | 25×31 | 18.8 | 36 | 18×24 | 12.9 | 51 | 21×22 | 10.7 | 251 | 43×48 | 62.4 |
| 7 | 29×35 | 20.9 | 22 | 25×28 | 21 | 37 | 30×36 | 25.5 | 52 | 20×21 | 15.8 | 252 | 48×55 | 54 |
| 8 | 20×25 | 5.8 | 23 | 26×28 | 22.6 | 38 | 19×20 | 37.9 | 53 | 24×35 | 39.4 | 253 | 50×67 | 72 |
| 9 | 20×23 | 19 | 24 | 23×28 | 23.6 | 39 | 28×29 | 20.6 | 54 | 13×14 | 13.3 | 254 | 61×68 | 77.7 |
| 10 | 33×37 | 55.5 | 25 | 35×38 | 67.3 | 40 | 16×18 | 15.5 | 55 | 23×30 | 27.5 | 255 | 54×70 | 49.6 |
| 11 | 23×32 | 21.3 | 26 | 27×31 | 21.6 | 41 | 24×26 | 18.1 | 56 | 36×56 | 29.3 | 256 | 48×53 | 28.9 |
| 12 | 26×28 | 15.8 | 27 | 25×29 | 18.4 | 42 | 28×30 | 54.2 | 57 | 26×29 | 23.1 | 257 | 34×36 | 41.8 |
| 13 | 45×54 | 30.8 | 28 | 30×31 | 44.3 | 43 | 16×17 | 18 | 58 | 33×34 | 27.2 | | | |
| 14 | 30×32 | 22.3 | 29 | 23×32 | 22.4 | 44 | 28×30 | 54.2 | 59 | 24×25 | 20 | | | |
| 15 | 31×36 | 62.5 | 30 | 35×57 | 22 | 45 | 29×33 | 35.1 | 60 | 30×31 | 29.7 | | | |

* 248～255は1号掘立柱建物跡の柱穴

中央部柱穴状小土坑群計測表

単位: cm

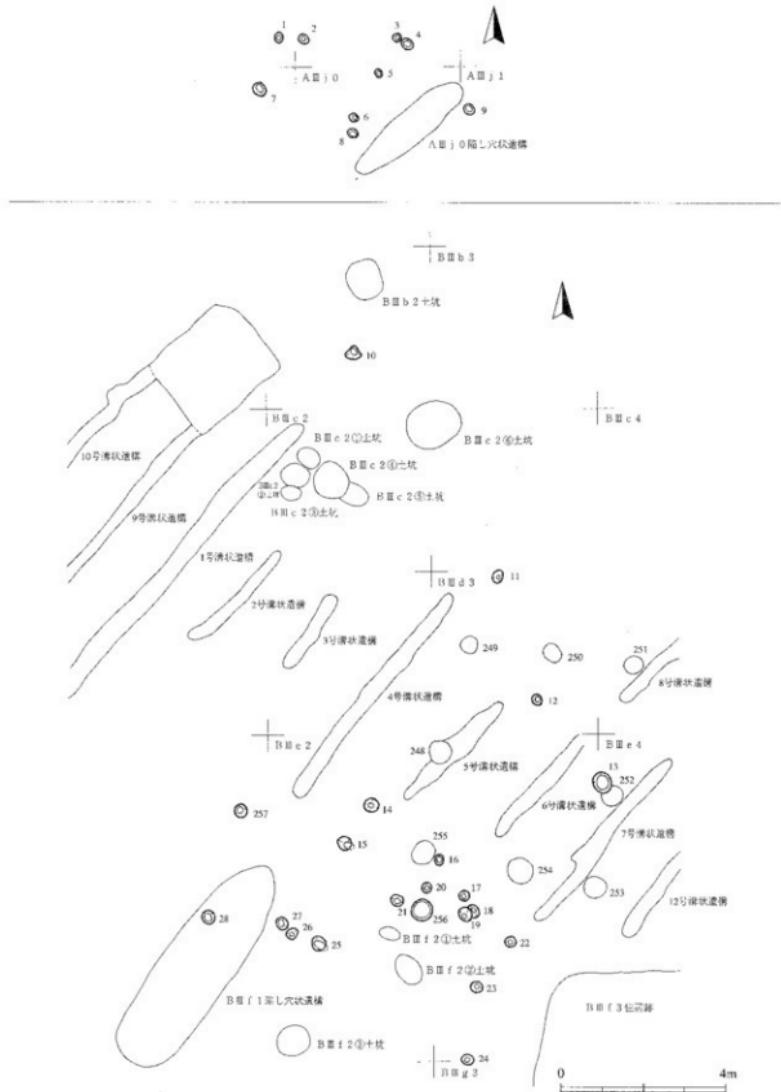
| 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ | 番号 | 径 | 深さ |
|----|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|------|
| 63 | 28×31 | 13.7 | 94 | 25×33 | 37.3 | 125 | 20×26 | 16.3 | 156 | 45×60 | 35.5 | 187 | 28×30 | 31.5 |
| 64 | 27×29 | 37.1 | 95 | 28×37 | 36 | 126 | 27×35 | 12 | 157 | 29×31 | 29.7 | 188 | 40×43 | 26.4 |
| 65 | 40×44 | 53.8 | 96 | 35×35 | 13.9 | 127 | 20×23 | 8.8 | 158 | 38×70 | 20.2 | 189 | 35×36 | 32.7 |
| 66 | 28×30 | 20.9 | 97 | 30×32 | 22.9 | 128 | 19×19 | 13.6 | 159 | 22×30 | 18 | 190 | 28×33 | 35.3 |
| 67 | 40×56 | 41.7 | 98 | 19×20 | 16.4 | 129 | 20×22 | 15.8 | 160 | 20×24 | 13.4 | 191 | 37×50 | 23.8 |
| 68 | 30×35 | 16.3 | 99 | 27×29 | 22.8 | 130 | 25×28 | 12.9 | 161 | 30×34 | 35.8 | 192 | 34×58 | 26.3 |
| 69 | 38×43 | 17.2 | 100 | 21×25 | 42 | 131 | 17×18 | 34.3 | 162 | 30×32 | 36.7 | 193 | 33×57 | 24.3 |
| 70 | 42×45 | 26 | 101 | 31×35 | 21.5 | 132 | 13×14 | 6.3 | 163 | 28×31 | 27.6 | 194 | 21×24 | 28.6 |
| 71 | 30×35 | 16.3 | 102 | 26×27 | 28.8 | 133 | 15×17 | 31 | 164 | 22×25 | 22.9 | 195 | 33×39 | 25.4 |
| 72 | 35×42 | 19.8 | 103 | 18×19 | 15.6 | 134 | 12×13 | 14.6 | 165 | 29×42 | 33.5 | 196 | 29×37 | 26 |
| 73 | 40×50 | 18 | 104 | 20×20 | 16.9 | 135 | 16×16 | 4 | 166 | 30×33 | 22.7 | 197 | 31×52 | 19.1 |
| 74 | 34×42 | 21.9 | 105 | 20×21 | 21.2 | 136 | 23×26 | 14.4 | 167 | 37×42 | 31.2 | 198 | 19×20 | 24 |
| 75 | 28×35 | 22.6 | 106 | 23×24 | 58.3 | 137 | 14×16 | 8.2 | 168 | 38×40 | 33.5 | 199 | 18×24 | 25.6 |
| 76 | 26×28 | 15.2 | 107 | 27×40 | 17.2 | 138 | 33×35 | 37.4 | 169 | 50×69 | 31.8 | 200 | 16×16 | 19.9 |
| 77 | 32×35 | 22.9 | 108 | 18×15 | 16.1 | 139 | 30×40 | 15.3 | 170 | 31×36 | 28.5 | 201 | 15×16 | 21.2 |
| 78 | 20×21 | 13.6 | 109 | 24×28 | 33.5 | 140 | 30×33 | 61.6 | 171 | 34×39 | 37 | 202 | 28×32 | 22.9 |
| 79 | 23×26 | 11.8 | 110 | 25×28 | 13.3 | 141 | 25×35 | 14.4 | 172 | 42×52 | 31.3 | 203 | 27×27 | 32.6 |
| 80 | 18×20 | 15.4 | 111 | 21×19 | 26.5 | 142 | 27×30 | 19.5 | 173 | 32×36 | 21.7 | 204 | 30×32 | 33.1 |
| 81 | 23×25 | 17.7 | 112 | 18×20 | 18.8 | 143 | 20×20 | 23.9 | 174 | 50×69 | 31.8 | 205 | 23×24 | 10.1 |
| 82 | 33×34 | 20.5 | 113 | 18×18 | 55.2 | 144 | 20×22 | 12.7 | 175 | 38×56 | 19.5 | 206 | 29×34 | 45 |
| 83 | 19×22 | 22.7 | 114 | 19×20 | 39.5 | 145 | 33×33 | 37.4 | 176 | 30×34 | 10.2 | 207 | 30×35 | 22.5 |
| 84 | 18×20 | 11.7 | 115 | 26×27 | 21.4 | 146 | 24×28 | 16.6 | 177 | 40×47 | 22.1 | 208 | 24×25 | 56.8 |
| 85 | 22×25 | 29.1 | 116 | 16×17 | 9 | 147 | 29×43 | 36.4 | 178 | 45×45 | 38.6 | 209 | 37×37 | 22 |
| 86 | 18×20 | 15.4 | 117 | 22×24 | 13.4 | 148 | 32×34 | 20.2 | 179 | 46×54 | 40 | 210 | 30×35 | 46.2 |
| 87 | 22×23 | 15.8 | 118 | 25×26 | 18 | 149 | 33×35 | 29.5 | 180 | 45×55 | 37.3 | 211 | 36×47 | 34.6 |
| 88 | 16×16 | 11.8 | 119 | 21×23 | 10 | 150 | 19×22 | 9.8 | 181 | 63×85 | 22 | 212 | 46×52 | 37.5 |
| 89 | 15×15 | 18.5 | 120 | 13×13 | 7.3 | 151 | 25×26 | 10 | 182 | 46×50 | 27.2 | 213 | 54×68 | 30.5 |
| 90 | 19×22 | 21.8 | 121 | 21×21 | 8.8 | 152 | 30×32 | 29.6 | 183 | 48×53 | 24 | 214 | 23×32 | 16.1 |
| 91 | 18×21 | 15.8 | 122 | 20×20 | 7.2 | 153 | 26×30 | 25.4 | 184 | 41×60 | 18.5 | 215 | 26×16 | 19.8 |
| 92 | 23×23 | 10 | 123 | 27×31 | 16.2 | 154 | 35×41 | 35.9 | 185 | 38×42 | 23.7 | 216 | 29×33 | 47.8 |
| 93 | 24×25 | 22.7 | 124 | 23×25 | 39.8 | 155 | 26×29 | 23.4 | 186 | 40×42 | 18.4 | 217 | 30×35 | 22.5 |

* 169、171、172、174、262、270は2号掘立柱建物跡の柱穴

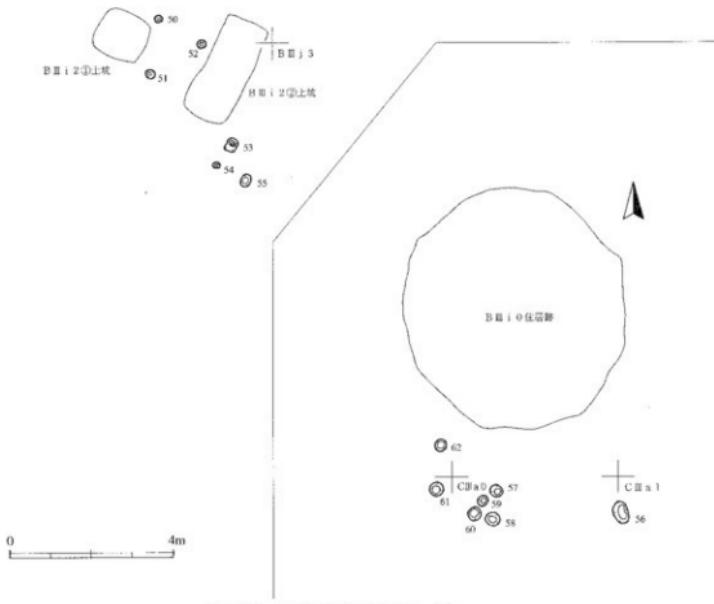
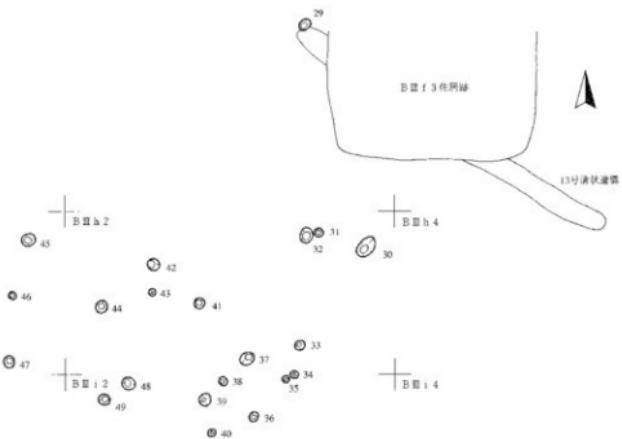
西部柱穴状小土坑群計測表

単位: cm

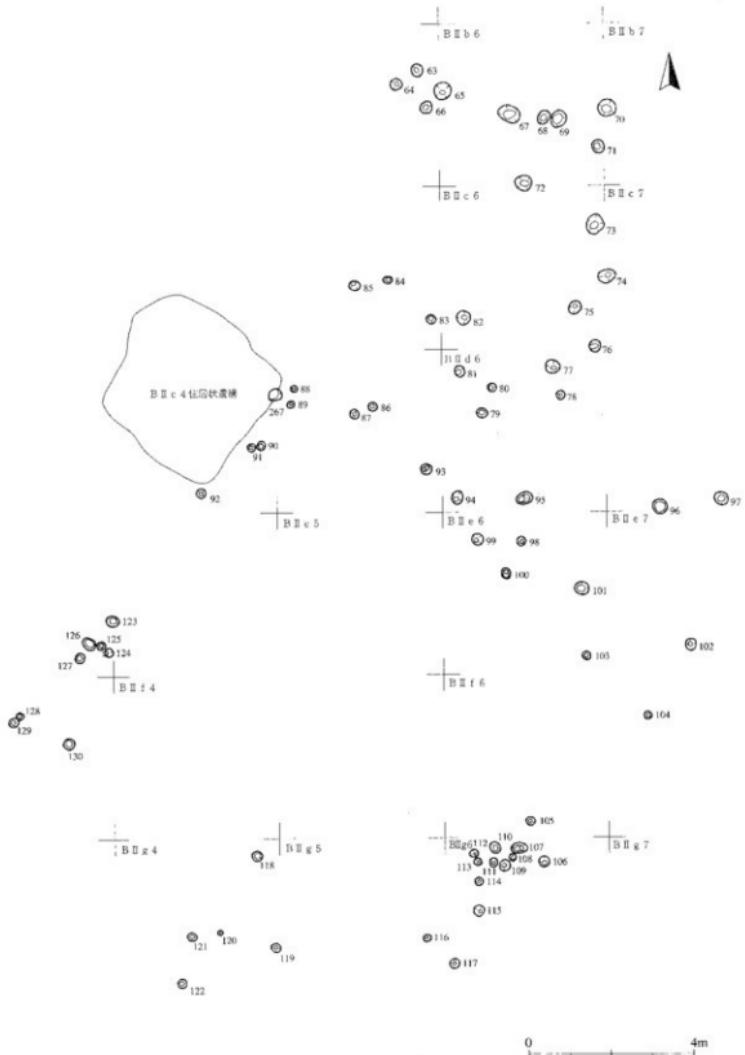
| 番号 | 径 | 深さ |
|-----|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|------|-----|-------|------|
| 205 | 19×28 | 32.4 | 214 | 25×32 | 9.6 | 223 | 27×28 | 8 | 232 | 31×35 | 21 | 241 | 27×32 | 21.3 |
| 206 | 19×20 | 20.6 | 215 | 20×25 | 61.9 | 224 | 33×35 | 14.9 | 233 | 27×30 | 39.2 | 242 | 30×30 | 46.8 |
| 207 | 23×25 | 15.2 | 216 | 26×28 | 11.1 | 225 | 25×29 | 48.2 | 234 | 21×25 | 40.8 | 243 | 35×35 | 24.2 |
| 208 | 25×28 | 26.5 | 217 | 26×30 | 11.3 | 226 | 25×28 | 39.6 | 235 | 21×23 | 18.6 | 244 | 25×26 | 25.2 |
| 209 | 17×20 | 15.2 | 218 | 28×28 | 29.8 | 227 | 29×30 | 34.7 | 236 | 28×30 | 12.4 | 245 | 25×29 | 29.7 |
| 210 | 23×25 | 9.6 | 219 | 21×22 | 17 | 228 | 23×26 | 11 | 237 | 27×29 | 16.7 | 246 | 30×31 | 39.6 |
| 211 | 30×32 | 24.4 | 220 | 26×28 | 33.6 | 229 | 26×27 | 18.2 | 238 | 22×25 | 16 | 247 | 28×28 | 35.9 |
| 212 | 23×25 | 23.4 | 221 | 24×25 | 20.3 | 230 | 24×28 | 18.2 | 239 | 23×27 | 20.5 | | | |
| 213 | 27×27 | 19.5 | 222 | 30×32 | 29.5 | 231 | 28×33 | 30.9 | 240 | 24×25 | 30.4 | | | |



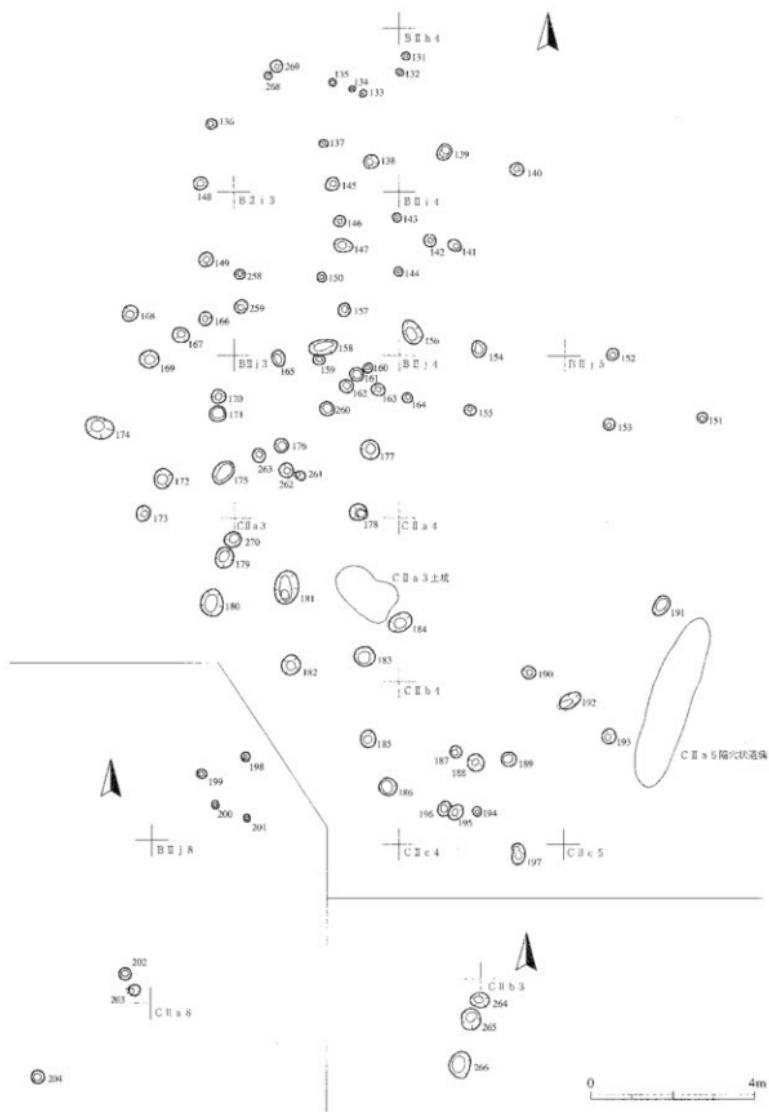
第59図 東部柱穴状小土杭群 (1)



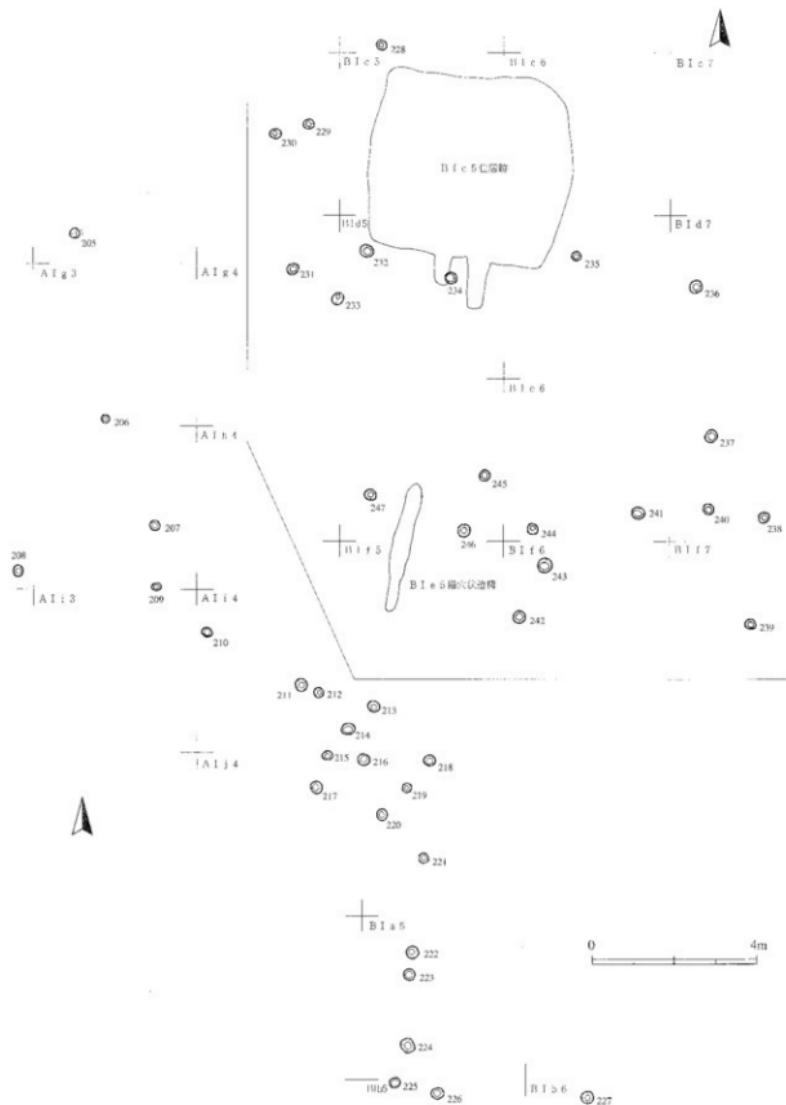
第60図 東部柱穴状小土杭群（2）



第61図 中央部柱穴状小土杭群(1)



第62図 中央部柱穴状小土杭群 (2)



第63図 西部柱穴状小土杭群

(6) 溝跡

遺構（第65図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞ 調査区域南西部から北部にかけて位置する。IV層上面で帯状に細長く伸びた十和田a降下火山灰の広がりとして検出された。

＜重複関係＞ 北側グリッドB II a 4で、B II a 4隣し穴状遺構を切っている。

＜規模・平面形＞ 南西端のある調査区域グリッドB I j 8から東へ伸び、途中から北東へ向きを変え、北東端のあるグリッドA II i 5に伸びている。全長は約60m、上端幅90cm～1.85m、下端幅25～60cm、深さは60～95cmである。グリッドB II f 2付近には幅約1mの土橋が設けられている。本溝は両端とも調査区域外へ伸びている。

＜断面形・壁・底面＞ 断面形は箱梁断面で、土橋から北側では片箱梁断面の部分もある。壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は南部浮石を含む黒色上で、少し凹凸があるもののほぼ平らであり、かたく結まっている。

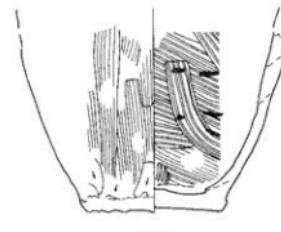
＜埋土＞ 土橋の南側は上部が黒色土、下部は黒褐色土が主体で、上部ほど中漂浮石を含む割合が高くなっている。北側は上部が十和田a降下火山灰、中部から下部は黒色土が主体であり、全体によく締まっている。

遺物（第64図、写真図版42）

土器126が土橋の南側埋土下部から出土している。甕の底部から体部下半部である。底部内面はやや上げ底風で、体部は外傾しながら立ち上がっている。器面調整は外面がナデとケズリ、内面はナデとハケメである。また、一部輪積痕が残っている。胎土には砂粒が多く含まれており、底部には木葉痕が残っている。

時期

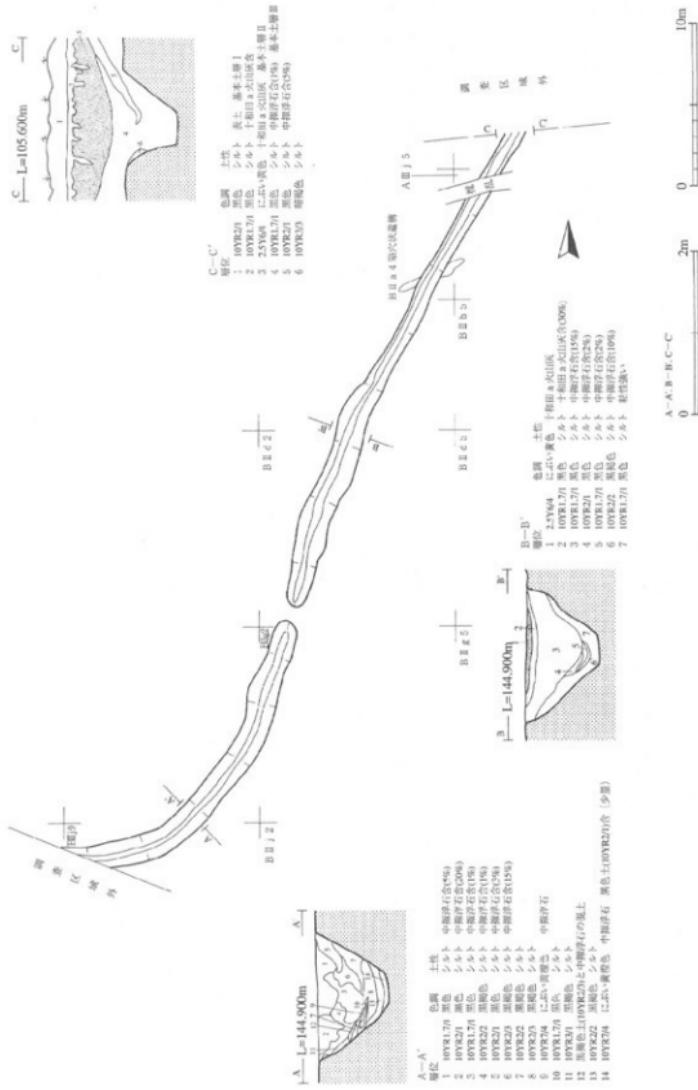
検出状況と出土遺物から、奈良時代と考えられる。



126



第64図 溝跡（南側）出土遺物



第65図 溝 跡

(7) 溝状遺構 (第66・67図、写真図版31・32)

調査区域東部から南西部にかけて位置する。IV層上面で帯状の黒色土の広がりとして15条 (1号～15号) が検出された。

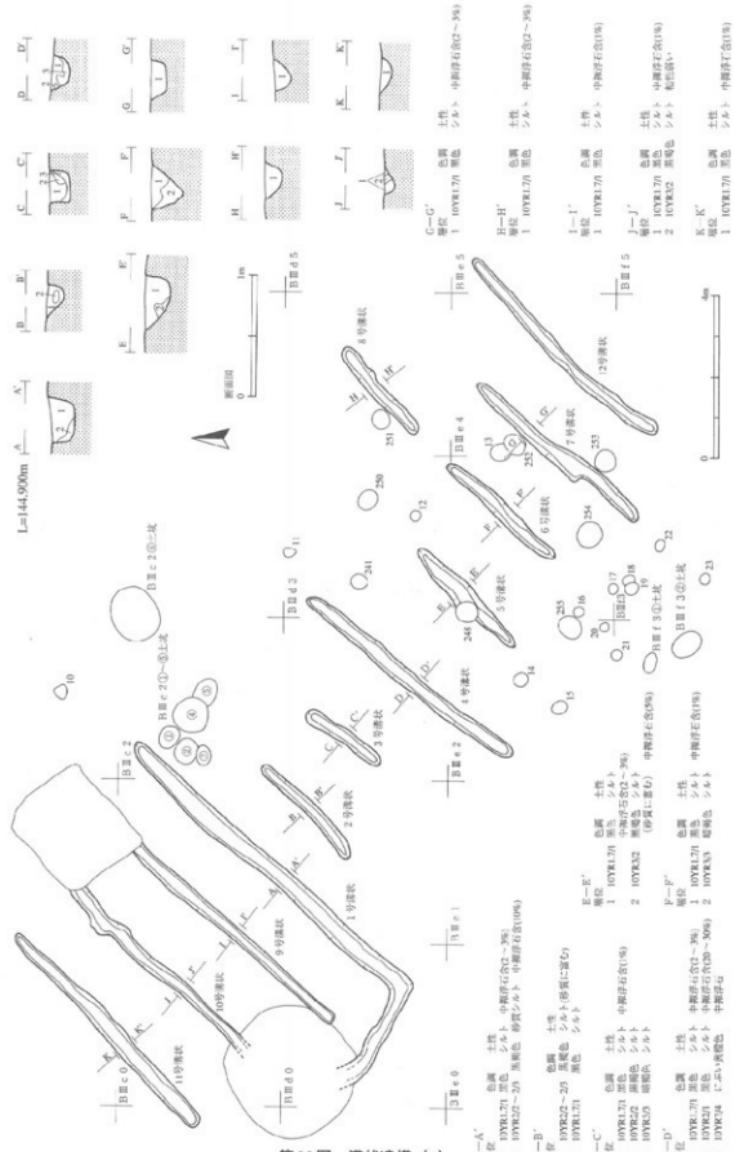
方向は北東一南西(1号～12号)、西北西一東南東(13号)、北北西一南南東(14号・15号)である。東部で検出された1号～12号は、規模は上端幅20～60cm、長さ2.12～11.7m、深さ2.6～22.8cmであり、北東一南西方向に1.5～1.8mの間隔で並んでいる。また、南西部で検出された14号・15号は、北北西一南南東方向に2.3mの間隔で並んでいる。堆土はいずれも中揮浮石を含んだ黒色土が主体でやや締まりに欠ける。底面は凹凸が多く、これは工具で振り起こした痕跡と考えられる。

出土遺物はなく時期は特定できないが、13号はB III f 3住居跡に切られていることから、それより古いと考えられる。

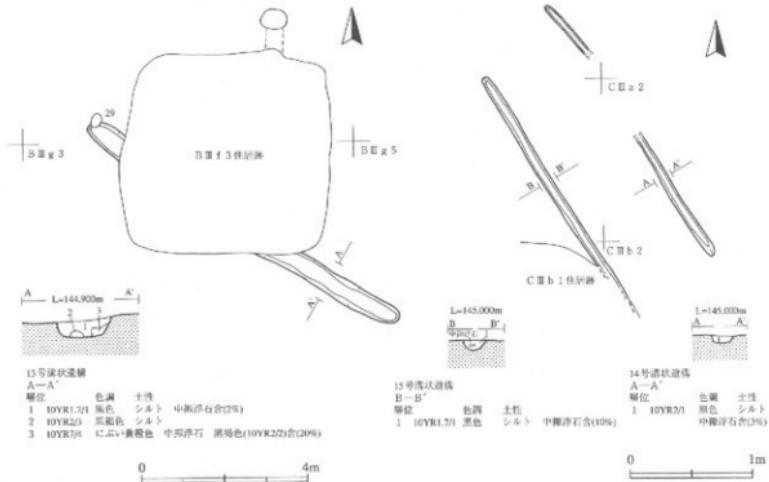
各溝状遺構の規模・形状などについては下表に示した。

溝状遺構観察表

| 遺構名 | 長さ(m) | 幅(cm) | 深さ(cm) | 堆土 | 重複関係 |
|---------|-------|-------|-----------|----------------------|-------------------------------------|
| 1号溝状遺構 | 11.7 | 42～55 | 6.8～22.8 | 黒色土主体 | B III c 0 土坑と重複 |
| 2号溝状遺構 | 3 | 25～35 | 5.8～12.3 | 黒色土主体 | |
| 3号溝状遺構 | 2.12 | 30～38 | 10.6～18.3 | 上部：黒色土 下部：黒褐色土 | |
| 4号溝状遺構 | 6.21 | 32～43 | 5.4～18.6 | 上部：黒色土 下部：にぶい黄橙色土 | |
| 5号溝状遺構 | 3.29 | 22～60 | 4.1～12.8 | 黒色土主体 | P 248に切られている |
| 6号溝状遺構 | 3.47 | 28～40 | 6.2～16.8 | 上部：黒色土 下部：暗褐色土 | |
| 7号溝状遺構 | 5.10 | 32～56 | 5～12.5 | 黒色土(中揮浮石含) | |
| 8号溝状遺構 | 2.69 | 29～46 | 5.5～14.5 | 黒色土 | |
| 9号溝状遺構 | 6.3 | 25～41 | 6.7～17.3 | 黒色土 | B III b 1 ①土坑と重複 B III c 0 土坑と重複 |
| 10号溝状遺構 | 5.3 | 20～40 | 3.7～10 | 黒色土 | B III b 1 ①土坑と重複 B III c 0 土坑と重複 |
| 11号溝状遺構 | 6.35 | 22～47 | 2.6～9.1 | 黒色土 | |
| 12号溝状遺構 | 6.11 | 26～38 | 12.4～18.4 | 黒色土 | |
| 13号溝状遺構 | 8.5 | 53～60 | 6～15 | 黒色土主体 | B III f 3 住居跡に切られている。 |
| 14号溝状遺構 | 7.4 | 17～25 | 5.8～11.7 | 黒色土 | |
| 15号溝状遺構 | 6 | 20～25 | 7～13 | 黒色土 | |



第66図 溝状遺構(1)



第67図 溝状遺構 (2)

3 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器である。少量の出土であるため細分せず、縄文時代の土器、奈良・平安時代の土器、石器の3つに大別して記載する。

(1) 縄文時代の土器（第68図、写真図版42）

127は深鉢の口縁部である。口縁部が若干外反気味に立ち上がっている。地紋はRL単節縄文継回転である。胎土には砂粒を含んでおり、内外両面には炭化物が付着している。128は深鉢の体部である。地文はLR単節縄文横回転である。いずれも縄文時代後期初頭と考えられる。

(2) 奈良・平安時代の土器（第68図、写真図版42・43）

129～131は上師器壺である。129はロクロ不使用で、外面はナデ、内面はミガキ後黒色処理されている。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は小さな丸みをもっておさまっている。130・131はロクロ使用の壺で、130は内面がミガキ後黒色処理されている。どちらも底部切り離しは回転糸切りである。

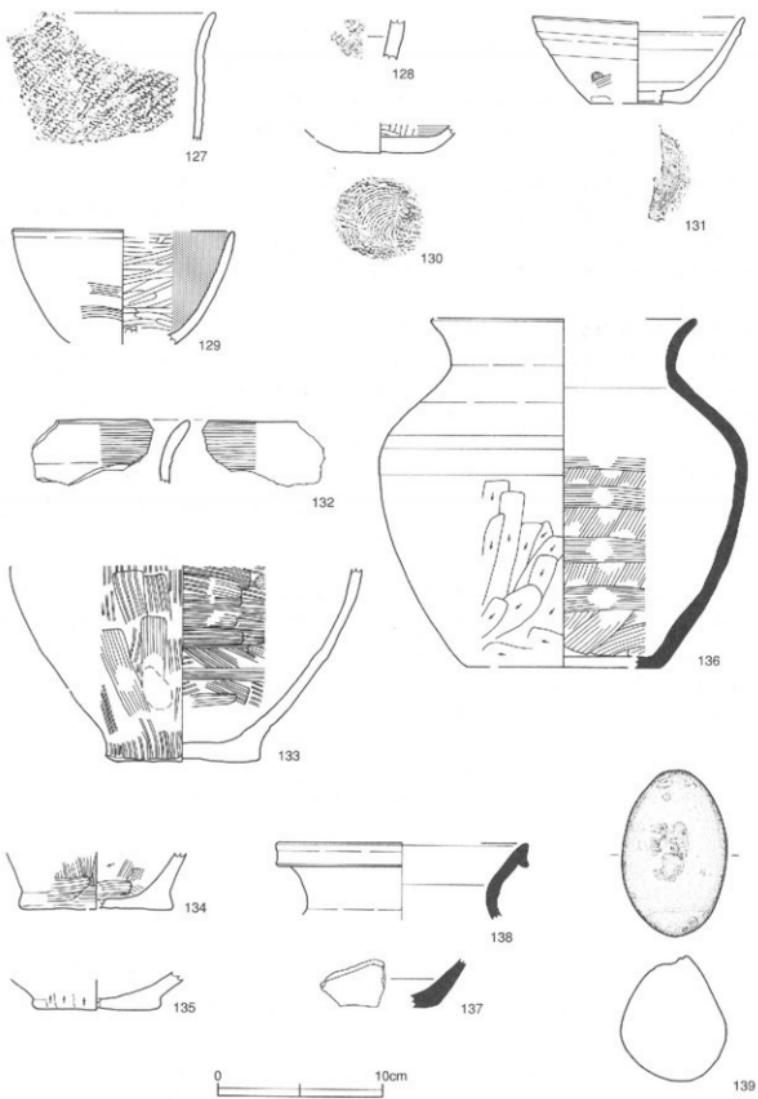
132～135は土師器壺である。132は口縁部で、やや外反気味である。133は底部から体部下半部、134・135は底部である。133は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさまっている。器面調整は外面がハケメとナデ、内面がハケメである。外面には一部指によるナデがみられる。134・135はどちらも底部の周りが少し外方へ張り出している。体部は外傾しながら立ち上がると考えられる。

136・137は須恵器壺である。136は体部から外傾して立ち上がり、体部上半部で大きく内湾しながら頸部へ続いている。口縁部は頸部から外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまっている。器面調整は外面がケズリ、内面がナデで、特に内面は丁寧に調整されている。胎土には砂粒を多量に含んでいる。137は底部で、外傾して立ち上がっていると考えられる。

138は須恵器壺の口縁部である。口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、口縁端部は肥厚し下方へ引き出されている。

(3) 石器（図版68、写真図版43）

139は磨石である。一部凹んでいることから凹石との併用が考えられる。横断面形は楕円形である。



第68図 遺構外出土遺物

第2表 地文土器観察表

| 場所番号 | 出土地点・層位 | 器種 | 文様(原体)の特徴等 | 胎 | 土 | 遺物回数 | 写真回数 |
|------|------------------|----|---|-------|----|------|------|
| 1 | BIII i 1住居跡・厚7cm | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転・底化物付着 | 砂粒を含む | 8 | 33 | |
| 2 | BIII i 1住居跡・堆土下位 | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転・底化物付着 | 砂粒を含む | 8 | 33 | |
| 5 | CIII b 1住居跡・厚7cm | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転・底部丸底盤・口径5.7cm 高さ6.2cm 周径2.4cm | 砂粒を含む | 11 | 33 | |
| 6 | CIII b 1住居跡・厚7cm | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転・底部丸底盤・底部丸底盤 | 砂粒を含む | 11 | 33 | |
| 8 | BIII f 1住居跡・厚7cm | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転・底化物付着 | 砂粒を含む | 13 | 33 | |
| 66 | DII e 8住居跡・堆土 | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転・縁帶が強め・指揮压痕が残る | 砂粒を含む | 33 | 37 | |
| 67 | BIII e 8住居跡・堆土 | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転・洗練された斜盤模様 | 砂粒を含む | 33 | 37 | |
| 115 | CII b 6住居跡・堆土 | 深鉢 | 洗練された斜盤模様 | 砂粒を含む | 46 | 41 | |
| 127 | BIII g 0-N層 | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転・底化物付着 | 砂粒を含む | 68 | 42 | |
| 128 | EIII g 8-N層 | 深鉢 | R.L.單面輪文鏡回転 | 砂粒を含む | 68 | 42 | |

| 第3表 土器・須恵器観察表 | M:ミガキ | N:ナデ | T:タケヌケ | K:ケツリ | KA:カキメ | 内:内は墨定線 | 外:外は残存輪 |
|---------------|-------------------|-------|----------|-------|--------|---------|---------|
| 引手彫 素彫 | 出土地点 | 種類・器種 | 外・内・圓・彫 | 内・圓・彫 | 底・面 | 底・形 | 底・形 |
| 9 | AIII h 1住居跡・堆土 | 土刺西杯 | L.輪部 体 罐 | M M M | H | (0.3) | 3.7 |
| 10 | AIII h 1住居跡・堆土 | 十筋22毫 | Y N K | M | H | (6.6) | — |
| 11 | AIII h 1住居跡・堆土 | 上部器蓋 | H-K | H-N | M | — | — |
| 13 | HII h 6住居跡・堆土下位 | 十筋器环 | M | M | 圓鋸形切り | [10.2] | [7.5] |
| 14 | BIII h 6住居跡・堆土下位 | 土刺器环 | M | M | 黒漆 | — | — |
| 15 | BIII h 6住居跡・堆土下位 | 土刺器环 | M | M | 口クロ | 6.4 | 21 |
| 16 | BIII h 6住居跡・カマド左 | 土刺器环 | M | M | 口クロ | — | — |
| 17 | BIII h 6住居跡・カマド上 | 十筋器环 | Y N K | M | 圓鋸形 | [3.2] | 21 |
| 18 | BIII h 6住居跡・P2層上 | 土刺器环 | Y N M | M | 圓鋸形 | [3.4] | 33 |
| 19 | BIII h 6住居跡・堆土下位 | 土刺器环 | Y N M | N | 高台 | 4.1 | — |
| 20 | BIII h 6住居跡・焼過部 | 土刺器环 | M | M | 内面墨定線 | 11.3 | 21 |
| 21 | BIII h 6住居跡・堆土下位 | 土刺器环 | M | M | 内面墨定線 | 10.2 | 33 |
| 22 | BIII h 6住居跡・カマド付近 | 土刺器环 | H-Y N | N | 圓鋸形 | 5.0 | — |
| 23 | BIII h 6住居跡・焼過部 | 土刺器环 | Y N | N | 圓鋸形 | 20.8 | 6.8 |
| 24 | BIII h 6住居跡・堆土 | 土刺器环 | H-Y N | N | 圓鋸形 | 28.4 | 33.7 |
| 25 | BIII h 6住居跡・カマド付近 | 上部器蓋 | H-Y N | N | 圓鋸形 | — | 10.4 |
| 26 | BIII h 6住居跡・カマド付近 | 上部器蓋 | H | H | 内面墨定線 | — | 22 |
| 27 | BIII h 6住居跡・堆土 | 土器器蓋 | H | H | M・K | — | 34 |
| 28 | BIII h 6住居跡・堆土 | 土器器蓋 | H-Y N | N | 輪保溝 | 7.3 | 21 |
| 29 | BIII h 6住居跡・カマド付近 | 上部器蓋 | H-Y N | N | 輪保溝 | — | 34 |

| | | | | | | | | | | | | |
|----|---------------------|------|-------|------------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|-----|----|
| 30 | B III h 6 生苔・屋上 | 上面器皿 | K | N | N | 调整板 | 口クロ | (20.3) | [8.3] | — | 23 | 35 |
| 31 | B III h 6 生苔・屋上 | 上部器皿 | N | Y N | N | — | — | [16.3] | 8.2 | — | 23 | 35 |
| 32 | B III h 6 生苔・カマド下 | 上部器皿 | M | Y N | N | — | — | [8.0] | — | — | 23 | 35 |
| 33 | B III h 6 生苔・屋上 | 上部器皿 | K | 调整板 | — | — | [6.6] | (8.5) | — | 23 | 35 | |
| 34 | B III h 6 生苔・カマド下 | 上部器皿 | N · M | K | K | 调整板 | — | [8.8] | 9.1 | — | 23 | 35 |
| 35 | B III h 6 生苔・カマド下 | 土制器皿 | N | K | K | 调整板 | — | [9.4] | 8.2 | 23 | 35 | |
| 36 | B III h 6 生苔・カマド下 | 土制器皿 | K | K | K | 一部調節板 | — | [6.7] | 5.7 | 23 | 36 | |
| 37 | B III h 6 生苔・屋上 | 聚落环 | Y N | Y N | M | 圆柱系切り | 口クロ | [14.5] | 5.9 | 6.0 | 23 | 36 |
| 44 | B III j 4 生苔・カマド下 | 土制器皿 | M | M | M | 调整板 | — | [11.3] | 3.7 | 6.0 | 26 | 36 |
| 45 | B III j 4 生苔・土制器皿 | 土制器皿 | M | M | M | — | [16] | [7.5] | — | — | 26 | 36 |
| 46 | B III j 4 生苔・鍋・カマド下 | 土制器皿 | M | M | M | — | [4.0] | [21.1] | — | — | 26 | 36 |
| 47 | B III j 4 生苔・屋上・下位 | 土制器皿 | N | K · N | Y N | 輪樋板 | — | [15.6] | [6.7] | — | 26 | 36 |
| 48 | B III j 4 生苔・屋上・中位 | 土制器皿 | Y N | K · M | Y N | — | [14.2] | [13.6] | 5.6 | 5.4 | 28 | 36 |
| 50 | B III c 5 生苔・カマド下 | 土制器皿 | M | M | M | 同軸系切り | 口クロ | [12.4] | 5.7 | 6.0 | 28 | 36 |
| 51 | B III c 5 生苔・カマド下 | 土制器皿 | M | M | M | 同軸系切り | 口クロ | [12.5] | [11.3] | — | 28 | 36 |
| 52 | B III c 5 生苔・カマド上 | 土制器皿 | M | M | M | — | [5.6] | [5.6] | — | — | 28 | 37 |
| 53 | B III c 5 生苔・カマド上 | 土制器皿 | N | N | N | 当て具箇 | — | [15.7] | — | — | 28 | 37 |
| 55 | B III h 8 生苔・屋上 | 聚落环 | T | M | M | 内面黒色處理 | — | [13.4] | 5.7 | 6.1 | 30 | 37 |
| 56 | B III h 8 生苔・屋上 | 土制器皿 | Y N | Y N | M | 同軸系切り | — | [13.4] | 5.7 | [4.9] | 30 | 37 |
| 57 | B III h 8 生苔・屋上 | 土制器皿 | N | M | M | 同軸系切り | — | [15.0] | 5.4 | 30 | 37 | |
| 58 | B III h 8 生苔・和十 | 聚落环 | N | N | M | 同軸系切り | — | [18.1] | [5.9] | 30 | 37 | |
| 59 | B III h 8 生苔・カマド左 | 上部器皿 | Y N | N · II · K | Y N | — | [24] | [15.6] | — | — | 30 | 37 |
| 60 | B III h 8 生苔・床真左 | 土制器皿 | K | K | N · II | 檜櫛板 | — | [12.4] | 8.4 | — | 30 | 37 |
| 61 | B III h 8 生苔・屋上 | 聚落环 | K | K | K | 口クロ | [12] | [6.3] | — | — | 30 | 37 |
| 62 | B III h 8 生苔・屋上 | 聚落环 | K | K | H | 口クロ | — | [15.4] | [8.4] | 30 | 37 | |
| 63 | B III e 8 生苔・和十下位 | 上部器皿 | M | M | M | 圆柱系切り | 口クロ | 内面黒色 | — | [1.2] | 5.2 | 37 |
| 64 | B III e 8 生苔・屋下位 | 聚落环 | N | N | N | 同軸系切り | 口クロ | [14.5] | 4.9 | 6.1 | 33 | 37 |
| 65 | B III e 8 生苔・屋上・下位 | 土制器皿 | K | N | N | 调整板 | — | [1.5] | 8.8 | 3.3 | 37 | 37 |
| 70 | B III f 0 生苔・煙道 | 土制器皿 | M | M | M | 同軸系切り | 口クロ | 内面黒色 | 16.2 | 6.7 | 5.5 | 36 |
| 71 | B III f 0 生苔・カマド上 | 土制器皿 | N | N | N | 同軸系切り | 口クロ | 16.4 | 5.5 | 6.0 | 36 | 38 |
| 72 | B III f 0 生苔・板山筋 | 土制器皿 | K · N | T | — | — | [6.1] | 9.5 | — | 36 | 38 | |
| 73 | B III f 0 生苔・カマド上 | 土制器皿 | T | — | — | — | [18.6] | — | — | 36 | 38 | |
| 75 | B III f 3 生苔・屋上 | 土制器皿 | Y N | Y N | H · K | 同軸系切り | 口クロ | [13.2] | 4.7 | 6.0 | 39 | 38 |
| 76 | B III f 3 生苔・屋上 | 土制器皿 | Y N | K | H | — | [15.1] | [14.9] | — | 39 | 38 | |
| 77 | B III f 3 生苔・屋上 | 土制器皿 | K | H | N | 同軸板 | [6.7] | [6.7] | — | 39 | 38 | |
| 78 | B III f 3 生苔・P口屋上 | 土制器皿 | K | H · N | H | 指壓板 | 口クロ | [7.2] | 8.2 | 39 | 38 | |
| 79 | B III f 3 生苔・カマド下 | 聚落环 | — | — | — | 同軸系切り | 口クロ | [12.8] | 2.4 | [7.8] | 39 | 38 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------------------|------|--|--|------|------|----------------|----------------|--------|--------|-------|----|----|
| 82 | C Ⅱ b 6 生居端・カマド右 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | (14.8) | [5.5] | — | 43 | 39 |
| 83 | C Ⅱ b 6 生居端・床直上 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | 13.6 | 5.9 | 4.8 | 43 | 39 |
| 84 | C Ⅱ b 6 生居端・壇上 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | (13.7) | [4.1] | — | 43 | 39 |
| 85 | C Ⅱ b 6 生居端・壇土中位 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | 13.5 | 5.1 | (6.3) | 43 | 39 |
| 86 | C Ⅱ b 6 生居端・カマド左 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | (18.0) | [6.3] | — | 43 | 39 |
| 87 | C Ⅱ b 6 生居端・壇十 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | — | [3.0] | — | 43 | 39 |
| 88 | C Ⅱ b 6 作居端・カマド左 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | (15.0) | [6.0] | — | 43 | 39 |
| 89 | C Ⅱ b 6 作居端・壇上 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | — | [2.9] | 5.8 | 43 | 39 |
| 90 | C Ⅱ b 6 作居端・壇上 | 土師器杯 | | | N | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | (15.2) | 5.4 | 6.1 | 43 | 39 |
| 91 | C Ⅱ b 6 作居端・壇・中位 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | (13.4) | 5.4 | 4.7 | 43 | 39 |
| 92 | C Ⅱ b 6 作居端・壇土 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | 13.8 | 3.4 | 5.7 | 43 | 39 |
| 93 | C Ⅱ b 6 作居端・壇・中位 | 須恵器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | 13.5 | 11.9 | 7.2 | 44 | 39 |
| 94 | C Ⅱ b 6 作居端・カマド左上 | 土師器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | (12.8) | 9.7 | 7.0 | 44 | 39 |
| 95 | C Ⅱ b 6 作居端・壇十 | 土師器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | (19.4) | [12.2] | — | 44 | 39 |
| 96 | C Ⅱ b 6 作居端・壇土 | 土師器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | — | [3.7] | 20.9 | 44 | 40 |
| 97 | C Ⅱ b 6 作居端・カマド左 | 土師器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | (14.1) | 12.2 | 8.5 | 44 | 40 |
| 98 | C Ⅱ b 6 作居端・床直上 | 土師器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | (16.4) | [9.4] | — | 44 | 40 |
| 99 | C Ⅱ b 6 作居端・壇上 | 土師器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | (16.6) | 15.7 | 9.2 | 45 | 40 |
| 100 | C Ⅱ b 6 作居端・床直上 | 土師器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | (15.4) | 18.9 | — | 45 | 40 |
| 101 | C Ⅱ b 6 作居端・壇土 | 土師器蓋 | | | K.A. | K.A. | 上げ蓋原 | 口・内面黒色 金管 | — | [6.5] | — | 45 | 40 |
| 102 | C Ⅱ b 6 作居端・壇上 | 土師器蓋 | | | N | K | 木葉瓶 | 口・内面黒色 木葉瓶 | — | [14.8] | — | 45 | 40 |
| 103 | C Ⅱ b 6 作居端・壇土 | 土師器蓋 | | | N | K | 木葉瓶 | 口・内面黒色 木葉瓶 | — | [7.3] | — | 45 | 40 |
| 104 | C Ⅱ b 6 作居端・壇十 | 土師器蓋 | | | T | T | 當て具板 | 口・内面黒色 當て具板 | — | [4.5] | — | 45 | 41 |
| 105 | C Ⅱ b 6 作居端・壇上 | 土師器蓋 | | | T | T | 當て具板 | 口・内面黒色 當て具板 | — | [1.6] | 7.5 | 45 | 41 |
| 106 | C Ⅱ b 6 作居端・床直上 | 土師器蓋 | | | T | T | 當て具板 | 口・内面黒色 當て具板 | — | [4.7] | 6.0 | 45 | 41 |
| 107 | C Ⅱ b 6 作居端・床直上 | 須恵器蓋 | | | N | K | 口・内面黒色 須恵器蓋 | 口・内面黒色 須恵器蓋 | — | [4.9] | 6.0 | 45 | 41 |
| 108 | C Ⅱ b 6 作居端・壇土 | 須恵器蓋 | | | N | K | 口・内面黒色 須恵器蓋 | 口・内面黒色 須恵器蓋 | — | [2.6] | [6.8] | 45 | 41 |
| 109 | C Ⅱ b 6 作居端・壇土 | 須恵器蓋 | | | T | T | 口・内面黒色 須恵器蓋 | 口・内面黒色 須恵器蓋 | — | [4.0] | — | 45 | 41 |
| 110 | C Ⅱ b 6 作居端・壇上 | 須恵器蓋 | | | T | T | 口・内面黒色 須恵器蓋 | 口・内面黒色 須恵器蓋 | — | [5.0] | — | 45 | 41 |
| 111 | C Ⅱ b 6 作居端・壇上 | 須恵器蓋 | | | T | T | 口・内面黒色 須恵器蓋 | 口・内面黒色 須恵器蓋 | — | [3.5] | 5.2 | 48 | 41 |
| 112 | C Ⅱ c 8 作居端・カマド左 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | (13.5) | 5.0 | 5.9 | 48 | 41 |
| 113 | C Ⅱ c 8 作居端・カマド左 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | 13.3 | 5.5 | 5.1 | 48 | 41 |
| 114 | C Ⅱ c 8 作居端・カマド左 | 土師器杯 | | | M | M | 回転糸切り | 口・内面黒色 金管 | — | [4.9] | 5.2 | 48 | 42 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----------------------|------|-----|---|-------|-------|-------|------|------|--------|-------|--------|----|
| 121 | C II c 8住居跡・廻土巾 | 土師器窯 | Y N | M | M | M | 回転糸切り | クロロ | — | [6.1] | 6.7 | 48 | 42 |
| 124 | B II e 4住居跡・廻土巾 | 土師器窯 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 125 | B III f 2①住居跡・廻土・堆土上位 | 土師器窯 | — | — | K · N | M | 回転糸切り | クロロ | 12.8 | 5.5 | 6.4 | 51 | 42 |
| 126 | 溝跡(南側)・堆土・廻土 | 土師器窯 | — | — | N | M | 木炭灰 | 輪積み窯 | — | [3.4] | 6.1 | 57 | 42 |
| 129 | B II h 7・II層 | 土師器窯 | — | — | N | M | 木炭灰 | 輪積み窯 | — | [12.4] | (8.2) | 64 | 42 |
| 130 | B II 区・II ~ Ⅲ層 | 土師器窯 | — | — | N | M | 木炭灰 | 輪積み窯 | — | [7.0] | — | — | — |
| 131 | B II f 6・IV層 | 土師器窯 | — | — | N | M | 木炭灰 | 輪積み窯 | — | [1.3] | 5.4 | 68 | 42 |
| 132 | B II h 8・IV層 | 土師器窯 | Y N | — | N | M | 木炭灰 | 輪積み窯 | — | [3.0] | 5.3 | (6.2) | 68 |
| 133 | B III 区・III層 | 土師器窯 | — | — | H · N | N · H | 黒煙灰 | 輪積み窯 | — | [3.9] | — | — | 68 |
| 134 | B III 区・Ⅲ層 | 土師器窯 | — | — | N | N | 黒煙灰 | 輪積み窯 | — | [11.9] | 9.4 | 68 | 42 |
| 135 | B III f 4・IV層 | 土師器窯 | — | — | N | N | 黒煙灰 | 輪積み窯 | — | [3.5] | (9.3) | 68 | 42 |
| 136 | B III f 6・IV層 | 土師器窯 | — | — | K | N | — | — | — | [1.8] | (7.8) | 68 | 42 |
| 137 | C III c 7・II層 | 須恵器窯 | — | — | N | N | — | — | — | [6.0] | 21.3 | (11.8) | 68 |
| 138 | 不明 | 須恵器窯 | — | — | N | N | — | — | — | [2.8] | — | — | 68 |
| | | — | — | — | — | — | — | — | — | [15.2] | [4.4] | — | 68 |

第4表 土器品種整理表

| 編號 番号 | 出 土 地 点 | 器 種 | 法 | | | 量 (cm) 厚さ | 重 さ (g) | 特 微 · 錫 考 | （ ）内は既存値 |
|----------|-----------------|---------|-------|-------|-------|--------------|-------------|-----------|----------|
| | | | 長さ | 幅 | 高さ | | | | |
| 39 | B II h 6住居跡・廻土 | 勾手 | 4.2 | 2.7 | 1.5 | 13. | — | — | — |
| 40 | B II h 6住居跡・廻土 | 船形車 | 4.5 | 4.5 | 2.8 | 49.88 | 表面にテグス | — | 24 |
| 41 | B II h 6住居跡・体の上 | 船形車 | 5.5 | 5.4 | 2.7 | 84.95 | 表面にテグス 内面ナメ | — | 24 |
| 42 | B II h 6住居跡・廻土 | 船形器形十製皿 | [6.2] | [5.0] | 0.7 | — | — | — | 36 |
| 49 | B III f 4住居跡・廻土 | 船形車 | 3.6 | 3.4 | 2.1 | 28.32 | — | — | 24 |
| 74 | B II f 6住居跡・廻土 | 輪の羽口 | [8.5] | [4.0] | [2.8] | 50.13 | — | — | 36 |
| 81 | B II f 3住居跡・Ⅱ層 | 輪の羽口 | [3.0] | [4.0] | [1.3] | 15.66 | — | — | 39 |
| 112 | C II b 6住居跡・廻土 | 船形車 | [3.4] | 6.0 | 2.7 | 46.14 | 表面にテグス | — | 41 |
| 113 | C II f 6住居跡・廻土 | 船形車 | [2.7] | 5.0 | 2.0 | 26.52 | 表面にテグス | — | 46 |

第5表 飲食品種整理表

| 編號 番号 | 出 土 地 点 | 器 種 | 計測値 (cm) | | | （ ）内は既存値 |
|----------|------------------|--------|----------|-----|------|----------|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | |
| 68 | B II e 8住居跡・床直上 | 刀子(骨器) | [11.9] | 1.3 | 0.3 | — |
| 69 | B II e 8住居跡・廻土下位 | 刀子(骨器) | [13.8] | 1.3 | 0.25 | — |
| 114 | C II b 6住居跡・廻土 | 刀子(骨器) | [9.6] | 1.8 | 1.6 | — |
| 122 | C II c 8住居跡・床直上 | 刀子(骨器) | [10.7] | 0.9 | 0.2 | — |
| 123 | C II c 8住居跡・廻土 | 刀子(骨器) | [9.2] | 1.1 | 0.3 | — |

第6表 石器測量表

| 器種 番号 | 出土地點 | 器種 | 計測値(cm) | | | 測定者 | 特徵・備考 | 石材 | 山地 | 生物 園地 | 測定 員名 |
|----------|-------------------|------|---------|-------|-----|--------|--------|-----|------|----------|----------|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | | | |
| 3 | B III i 住居跡・埋土 | 透鑿刃斧 | 11.7 | [5.2] | 2.3 | 208.21 | 刃部一部欠失 | 頁岩 | 北上山地 | 8 | 33 |
| 4 | B III i 住居跡・埋土 | 透鑿石斧 | 10.9 | 6.0 | 2.8 | 202.68 | | 頁岩 | 北上山地 | 8 | 33 |
| 7 | C III b 1 住居跡・埋土 | 磨石 | 10.6 | 6.5 | 6.5 | 603.36 | | 安山岩 | 奥羽山脈 | 11 | 33 |
| 12 | A III a 1 住居跡 | 石鏃 | 2.9 | 1.1 | 0.2 | 0.9 | | 頁岩 | 北上山地 | 17 | 33 |
| 38 | B III h 6 住居跡・カマド | 磨石 | 8.5 | 6.9 | 5.9 | 482.94 | | 頁岩 | 北上山地 | 23 | 35 |
| 80 | B III f 3 住居跡・埋土 | 砾石 | 10.2 | 4.7 | 3.5 | 211.8 | | 燧狀岩 | 奥羽山脈 | 39 | 38 |
| 116 | C III b 6 住居跡・埋土 | 鏃・箭器 | 3.8 | 3.7 | 1.0 | 175.3 | 上半部欠失 | 頁岩 | 北上山地 | 46 | 41 |
| 139 | C III c 8 K - IV号 | 磨石 | 10.1 | 6.4 | 7.6 | 621.16 | 四石併用 | 安山岩 | 奥羽山脈 | 68 | 43 |

第7表 その他

| 器種 番号 | 出土地點 | 器種 | 計測値(cm) | | | 測定者 | 特徵・備考 | 石材 | 山地 | 生物 園地 | 測定 員名 |
|----------|---------------------|----|---------|------|-----|-----|-------|----|----|----------|----------|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | | | |
| 43 | B II h 6 住居跡・P 2 底部 | 板村 | 13.2 | 12.4 | 3.6 | 鑿板 | | | | 24 | 36 |

V まとめ

1 遺構

(1) 繩文時代の遺構

① 繩文時代の豎穴住居跡

縄文時代の豎穴住居跡（以下住居跡と略記する）は3棟検出された。各住居跡の平面形や規模等について第8表にまとめてある。

第8表 繩文時代の住居跡一覧表

| 番号 | 遺構名 | 平面形 | 規模(m) | 壁高(cm) | 備考 | ()は推定値 |
|----|---------------|-----|-------------|---------|-----|---------|
| ① | B III i 0 住居跡 | 円形 | 5.5 × 5.9 | 45 ~ 60 | | |
| ② | C III a 3 住居跡 | 不明 | | | 石圓炉 | |
| ③ | C III b 1 住居跡 | 円形 | (5.0) × 5.9 | 55 ~ 60 | | |

＜占地＞ いずれも調査区域南西部からの検出である。B III i 0 住居跡と C III b 1 住居跡は 8m、C III b 1 住居跡と C III a 3 住居跡は 4m 離れている。

＜平面形＞ 2棟（B III i 0 住居跡、C III b 1 住居跡）は直径 5.5 ~ 5.8m の円形である。残り 1 棟（C III a 3 住居跡）は床面だけの検出であることから平面形は不明であるが、柱穴配置から円形と推定される。

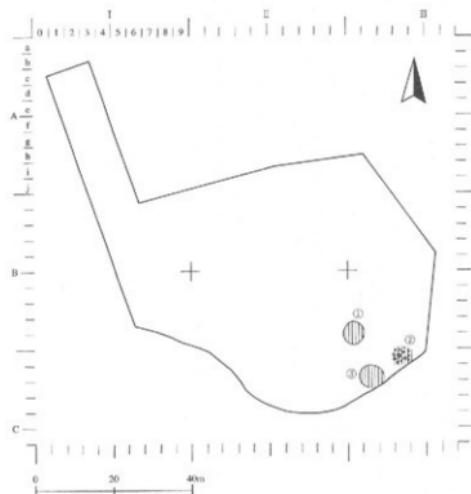
＜炉＞ C III a 3 住居跡が石圓炉をもっている。炉石は一部残存しないが、円形状に石を配していたと考えられる。他の 2 棟からは、炉は検出されなかった。

＜壁・床面＞ B III i 0 ・ C III b 1

両住居跡は、壁が外傾又は垂直直角に立ち上がっている。床面は南部浮石を含む黒色土で、基本上層の VI 層に相当する。かたく締まり、多少の凹凸があるがほぼ平坦である。C III a 3 住居跡の床面は中擗浮石を含む黒褐色土で、締まりに欠ける。

＜重複関係＞ 3 棟の住居跡は距離をもって存在しており、重複はない。

＜時期＞ B III i 0 ・ C III b 1 両住居跡は、出土した遺物が十腰内 I 式に相当することから、後期初頭と考えられる。C III a 3 住居跡は、出土遺物がなく時期は不明である。



第69図 繩文時代の住居跡

② 陥し穴状遺構

全部で6基検出された。いずれも溝状の陥し穴状遺構で、調査区域内に散在している。B II a 4陥し穴状遺構は奈良時代と考えられる溝跡に切られている。規模等については第9表にまとめてある。

埋土は、中振浮石を含んだ黒色土や黒褐色土が主体であり、下部ほど中振浮石を含む割合が高くなっている。

遺物はB III f 1陥し穴状遺構から出土した繩文時代の深鉢破片1点だけである。

時期は形態から繩文時代と考えられる。

第9表 陥し穴状遺構一覧表

| 遺構名 | 開口部径(cm) | 底部径(cm) | 深さ(cm) | ()は推定値 | | |
|-----------|----------|---------|---------|---------|-------|-------|
| | | | | 短軸断面形 | 長軸断面形 | 長軸方向 |
| A III j 0 | 80×320 | 25×285 | 56~60 | 漏斗形 | 逆台形 | 北東~南西 |
| B I e 5 | 93×(330) | 17×300 | (10)~65 | U字形 | 逆台形 | 北~南 |
| B II a 4 | (28)×350 | 22×335 | 35~45 | 逆台形 | 長方形 | 北東~南西 |
| B II g 7 | 75×365 | 20×300 | 82~95 | 細長いU字形 | 逆台形 | 北東~南西 |
| B III f 1 | 117×585 | 34×495 | 86~92 | 漏斗形 | 逆台形 | 北東~南西 |
| C II a 5 | 98×430 | 24×342 | 89~110 | 漏斗形 | 逆台形 | 北東~南西 |

(2) 古代以降の遺構

① 奈良時代の豎穴住居跡

3棟の検出である。各住居跡の平面形や規模等については第10表にまとめてある。

〈占地〉 調査区域北東部、中央部、南東部で検出され、二等辺三角形状に位置している。B II h 6住居跡とB III j 4住居跡は22m、B II h 6住居跡とA III h 1住居跡は40m、B II h 6住居跡とB III j 4住居跡は44m離れている。

〈平面形・規模〉 3棟のうち1棟は大形住居跡である。平面形は隅丸方形で、規模は7.8×7.9mである。残り2棟は東側又は北東側が削平されて残存しないが、平面形は1辺が4~6mの隅丸方形と推定される。

〈埋土〉 十和田a降下火山灰や黒色土、黒褐色土が主体で、全体によく絡まっている。このうち十和田a降下火山灰は、3棟のうち2棟の埴土上部から中部にかけてレンズ状に堆積している。

〈壁・床面〉 壁は垂直気味か僅かに外傾しながら立ち上がっており、壁高は36~60cmの範囲にある。床面は南部浮石を含む黒色土でよく絡まり、多少の凸凹はあるがほぼ平坦である。

〈柱穴・柱穴配置〉 3棟とも柱穴が検出されている。柱穴配置を確認できたのは1棟で、4本柱である。他の2棟のうち1棟も、検出された柱穴の配置から4本柱と推定される。

〈カマド〉 3棟のうち2棟は北壁中央部に設置されており、残り1棟は残存せず不明である。カマド本体部が原形を保っているものはない。袖部は芯材に凝灰岩を使用し、粘土質シルトで被覆して構築されている。煙道部は割り貫き式1棟、掘り込み式1棟である。大形住居跡の煙道部は掘り込み式で、側壁と天井に礫を使用している。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代後半から末期と考えられる。

第10表 奈良時代の住居跡一覧表

()は推定値

| 番号 | 遺構名 | 平面形 | 規模(m) | 壁高(cm) | カマド位置 | 煙道部 | 備考 |
|----|---------------|-------|------------|--------|----------|-------|--------|
| ① | A III h 1 住居跡 | 隅丸方形? | (2.4×5.9) | 50~60 | (北西壁中央?) | 不明 | |
| ② | B II h 6 住居跡 | 隅丸方形 | 7.8×7.9 | 36~55 | 北西壁中央 | 掘り込み式 | 墨書き器出土 |
| ③ | B III j 4 住居跡 | 隅丸方形? | (3.3)×4.15 | 49~60 | 北壁中央 | 削り抜き式 | |

この時代は、一般に大形住居を中心とし、その周囲に中・小形住居が数棟集まって集落を形成する傾向がある。本遺跡では、1辺約8mの大形住居跡1棟と、その近くに中形住居跡2棟が検出されていることから、その傾向がうかがわれる。

② 平安時代の堅穴住居跡

7棟の検出である。各住居跡の平面形や規模等については、第11表にまとめてある。

<占地> 調査区域南側に位置している。いずれも距離をもって存在しており、重複はない。

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形である。規模別の棟数は、一边が4~6mのもの5棟、8~10mのもの2棟である。

<埋土> 7棟のうち5棟は、十和田a降下火山灰や黒色土、黒褐色土が主体で、全体によく締まっている。残り2棟は、黒色土、黒褐色土が主体で、同様によく締まっている。十和田a降下火山灰は、埋土上部から中部にかけてレンズ状に堆積している。

<壁・床面> 壁は垂直気味又は外傾して立ち上がっており、壁高は4~65cmの範囲にある。床面は南部浮石を含んだ黒色土でよく締まり、多少の凹凸があるがほぼ平坦である。

<柱穴・柱穴配置> 7棟とも柱穴が検出されている。柱穴配置を確認できたのは4棟で、4本柱のもの2棟、6本柱のもの2棟（うち1棟は拡張前4本柱）である。

<カマド> 各住居跡とも設置場所に特に定まった方角はないが、中央部より左右いずれかに寄って設置されているものがほとんどである。特に、造り替えの時はその傾向がみられる。カマド本体部が原型を保っているものはない。袖部は心材として凝灰岩や角礫を使用し、粘土質シルトで被覆して構築されている。煙道部は、掘り込み式のものと削り抜き式のものがある。掘り込み式では個壁に加工された凝灰岩を配しているものが3棟ある。

<時期> 出土した土器と住居跡の埋土に十和田a降下火山灰が含まれていることから、平安時代前半と考えられる。

第11表 平安時代の住居跡一覧表

()は推定値

| 番号 | 遺構名 | 平面形 | 規模(m) | 壁高(cm) | カマド位置 | 煙道部 | 備考 |
|----|---------------|------|-----------|--------|----------------|------------------|-------------------------|
| ① | B I c 5 住居跡 | 隅丸方形 | 4.6×4.95 | 20~35 | 南壁中央 南壁東寄り | 掘り込み式? 掘り込み式? | カマド作り替え |
| ② | B I h 8 住居跡 | 隅丸方形 | 4.1×4.2 | 20~30 | 東壁左寄り | 掘り込み式? | カマド作り替え |
| ③ | B II e 8 住居跡 | 隅丸方形 | 5.6×5.65 | 33~58 | 東壁南寄り 西壁南寄り | 削り抜き式 掘り込み式 | カマド作り替え、刀子出土 |
| ④ | B II f 0 住居跡 | 隅丸方形 | (5.4)×8.3 | 0~4 | 東壁南寄り | 掘り込み式 | |
| ⑤ | B III f 3 住居跡 | 隅丸方形 | 4.9×5.1 | 52~68 | 北壁東寄り | 削り抜き式 | |
| ⑥ | C II b 6 住居跡 | 隅丸方形 | 8×8.2 | 40~65 | 北壁中央 北壁東寄り | 掘り込み式? 掘り込み式 | カマド作り替え、墨書き器・刀子出土、拡張住居跡 |
| ⑦ | C II c 8 住居跡 | 隅丸方形 | 4.5×4.8 | 43~53 | 東壁南寄り | 掘り込み式? | 墨書き器出土、刀子出土 |

③ 住居状遺構

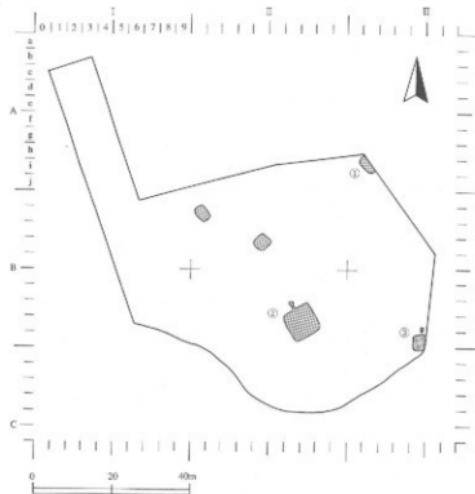
調査区域中央部から2棟検出された。2棟は溝跡を挟み13m離れて存在しており、他の遺構との重複はない。

平面形は隅丸方形と隅丸長方形である。埋土上部には十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積している。

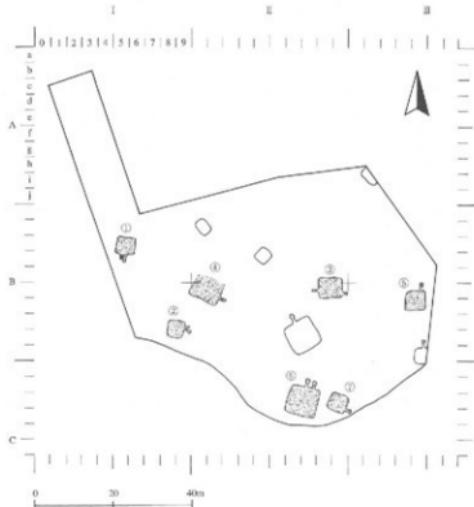
時期は出土遺物や十和田a降下火山灰の堆積状況から、奈良時代後半から末期と考えられる。

右は、奈良時代と平安時代の堅穴住居跡及び住居状遺構の分布を示したものである。

本報告書では、これらの遺構を奈良時代と平安時代とに区別しているが、奈良時代の堅穴住居跡から奈良時代後半から末期にかけての土器が出土していること、面積に比して住居跡の数の割合が多いのに重複がないこと、十和田a降下火山灰の堆積状況が似ていることから、これらの遺構はあまり時間差がなく存在していた可能性も考えられる。



第70図 奈良時代の住居跡



第71図 平安時代の住居跡

④ 据立柱建物跡

調査区域東部、南西部、北西部から1棟ずつ検出された。規模は東部の1号据立柱建物跡（以下建物跡と略記する）が桁行2間×梁行2間、南西部の2号建物跡が桁行2間×梁行1間、北西部の3号建物跡が桁行(4)間×梁行3間である。1号建物跡は5号溝状遺構を切っていることから、溝状遺構より新しいと考えられる。北西部の3号建物跡は柱穴配置から寄棟造りと考えられる。3棟の建物跡の時期や性格については不明である。

⑤ 土坑

24基検出された。調査区域東部及び南西部での検出が多い。平面形は円形8基、楕円形7基、隅丸長方形6基、隅丸方形2基、不整形1基で、円形が多い。他の遺構と重複しているものも数基ある。遺物が出土しているのは1基だけであり、それぞれの時期や性格については不明である。

各土坑の平面形や規模については第12表にまとめてある。

第12表 土坑一覧表

| 番号 | 遺構名 | 平面形 | 開口部径(cm) | 底部径(cm) | 深さ(cm) | 備考 |
|----|---------------|-------|-----------|----------|--------|-------------------|
| 1 | A I c 2 土坑 | 円形 | 145×145 | 130×130 | 30 | |
| 2 | B I h 6 ①土坑 | 円形 | (100)×180 | (82)×115 | 54.3 | |
| 3 | B I h 6 ②土坑 | 円形 | (100)×195 | (82)×180 | 66 | |
| 4 | B I i 9 土坑 | 隅丸長方形 | 138×158 | 117×138 | 18.5 | |
| 5 | B II h 0 土坑 | 隅丸方形 | 176×224 | 154×207 | 14 | |
| 6 | B III b 1 ①土坑 | 隅丸長方形 | 225×258 | 210×247 | 12.6 | 10・11号溝状遺構を切っている。 |
| 7 | B III b 1 ②土坑 | 楕円形 | 55×84 | 41×61 | 14 | |
| 8 | B III b 2 土坑 | 楕円形 | 87×100 | 65×80 | 11.8 | |
| 9 | B III c 0 土坑 | 円形 | 300×330 | 215×232 | 97.1 | 1・10・11号溝状遺構と重複 |
| 10 | B III c 2 ①土坑 | 円形 | 52×57 | 30×36 | 13 | |
| 11 | B III c 2 ②土坑 | 円形 | 54×63 | 44×45 | 14 | B III c 2 ③土坑と重複 |
| 12 | B III c 2 ③土坑 | 楕円形 | 33×51 | 20×34 | 13 | |
| 13 | B III c 2 ④土坑 | 円形 | 90×91 | 63×68 | 21.6 | B III c 2 ⑤土坑と重複 |
| 14 | B III c 2 ⑤土坑 | 楕円形 | 52×(75) | 32×(65) | 16.3 | |
| 15 | B III c 2 ⑥土坑 | 楕円形 | 113×134 | 98×120 | 12 | |
| 16 | B III f 2 ①土坑 | 楕円形 | 32×50 | 20×35 | 12 | |
| 17 | B III f 2 ②土坑 | 楕円形 | 57×76 | 38×70 | 16 | |
| 18 | B III f 2 ③土坑 | 円形 | 76×85 | 60×72 | 21 | |
| 19 | B III i 2 ①土坑 | 隅丸方形 | 100×124 | 78×100 | 22 | |
| 20 | B III i 2 ②土坑 | 隅丸長方形 | 120×268 | 107×243 | 24.1 | 遺物出土 |
| 21 | C II a 3 土坑 | 不整形 | 104×151 | 64×87 | 31.7 | |
| 22 | C II a 8 土坑 | 隅丸長方形 | 124×173 | 103×112 | 13 | |
| 23 | C III a 1 土坑 | 隅丸長方形 | 81×100 | 57×78 | 22.3 | |
| 24 | C III a 2 土坑 | 隅丸長方形 | 135×170 | 112×155 | 34 | |

⑥ 柱穴状小土坑

270個検出された。この中には据立柱建物跡の柱穴を含んでいるが、それを除くと柱穴配置に規則性はない。また出土遺物もなく性格や時期については不明である。尚、各柱穴の規模についてはP 85・P 86の柱穴計測表に示すとおりである。

⑦ 溝跡

1条検出された。途中に土橋が設けられていることや規模が比較的大きいこと、更に溝の北西側を意識しているかのように南西端が西方向に曲がって延びていることから、環濠とも考えられる。時期は検出状況や出土遺物から奈良時代と考えられる。

北東端がどのように延びているか、また北西側でどのような遺構が検出されるか、今後の調査によって明らかになることを期待したい。

⑧ 溝状遺構

15条検出された。規模等についてはP 94の表に示すとおりである。これらの溝状遺構は、長軸方向の向きによって、北東ー南西（1～12号）、西北西ー東南東（13号）、北北西ー南南東（14・15号）の3つに分けられることから、3時期にわたって掘られたと推定される。

1～12号溝状遺構は、切り合い関係からBⅢ c 0土坑より新しく、BⅢ b 1土坑、1号掘立柱建物跡より古いと考えられる。十和田a降下火山灰層（基本土層II）の下での検出であることから、平安時代前半又はそれ以前の可能性がある。

13号溝状遺構はBⅢ f 3住居跡（平安時代前半）に切られていること、また、14・15号溝状遺構は形状、掘り方、埋土の堆積状況が似ていることから、1～12号溝状遺構同様、平安時代前半又はそれ以前の可能性がある。

本遺跡で検出されたような溝状遺構は、馬淵川流域では米沢遺跡、大向上平遺跡、大向II遺跡（以上二戸市）、コアスカ館（浄法寺町）で検出されている。大向上平遺跡、大向II遺跡、コアスカ館では、歓間の埋土に十和田a降下火山灰を含んでおり、歓間状遺構としている。また、岩手県で最初に歓間状遺構が検出された亘角子久保遺跡（蟹米町）でも歓間の埋土に十和田a降下火山灰を含んでいる。

本遺跡の溝状遺構は埋土に火山灰を含まないこと、遺構と遺構の間隔が他の遺跡の検出例と比べて少し大きいことから溝状遺構としているが、歓間状遺構の可能性も考えられる。

2 遺物

（1）縄文時代の遺物

土器は遺構内から後期初頭（十腰内1式に相当）の深鉢の体部片が出土している。また、遺構外からは深鉢の体部片が出土している。石器は石鏃、磨製石斧、磨石などである。いずれも、特に出土地点にまとまりはない。

（2）古代以降の遺物

遺構内を中心に土師器、須恵器、土製品、鉄製品が出土した。土師器の種類は壺、甕が主体である。

壺はロクロ使用と不使用とが半分くらいの割合である。ロクロ不使用の壺は底部が平らに調整されているものがほとんどで、外面は体部に段をもつものや沈線が巡るものが多く、中にはミガキが施されているもの

もある。内面は全てミガキ後黒色処理されている。

ロクロ使用の壺は、底部の切り離しが回転糸切りで、周囲を調整しているものがいくつかみられるものの、ほとんどが無調整である。また、住居跡からは墨書き土器が計11点出土している。これについては別項で触れることにする。

壺はロクロ使用とロクロ不使用のものがあり、不使用のものが多い。不使用のものの中には、口縁部外面がハケメ後ヨコナデされているものや底部が半らに調整されているものがいくつかある。

ロクロ使用のものでは、体部下半部を敲き口調整し、底部を丸底風に仕上げる北陸型の特徴を持つ長胴壺が出土している。これについても別項で触れることとする。

須恵器は壺と壺と蓋があり、器種的には壺が多い。土師器に比べ出土量の割合は低い。

土製品は勾正、紡錘車、轆の羽口などである。紡錘車は3棟の住居跡から計5点が出土しており、家内生産で機織りが行われていたことが推測される。又、轆の羽口が2棟の住居跡からそれぞれ1点ずつ出土したことから、本遺跡の近くに製鉄関連遺跡が存在する可能性もある。

鉄製品は刀子が3棟の住居跡から計5点の出土である。特にB II e 8住居跡とC II c 8住居跡は壁際の床直上からの出土している。

① 墨書き土器について

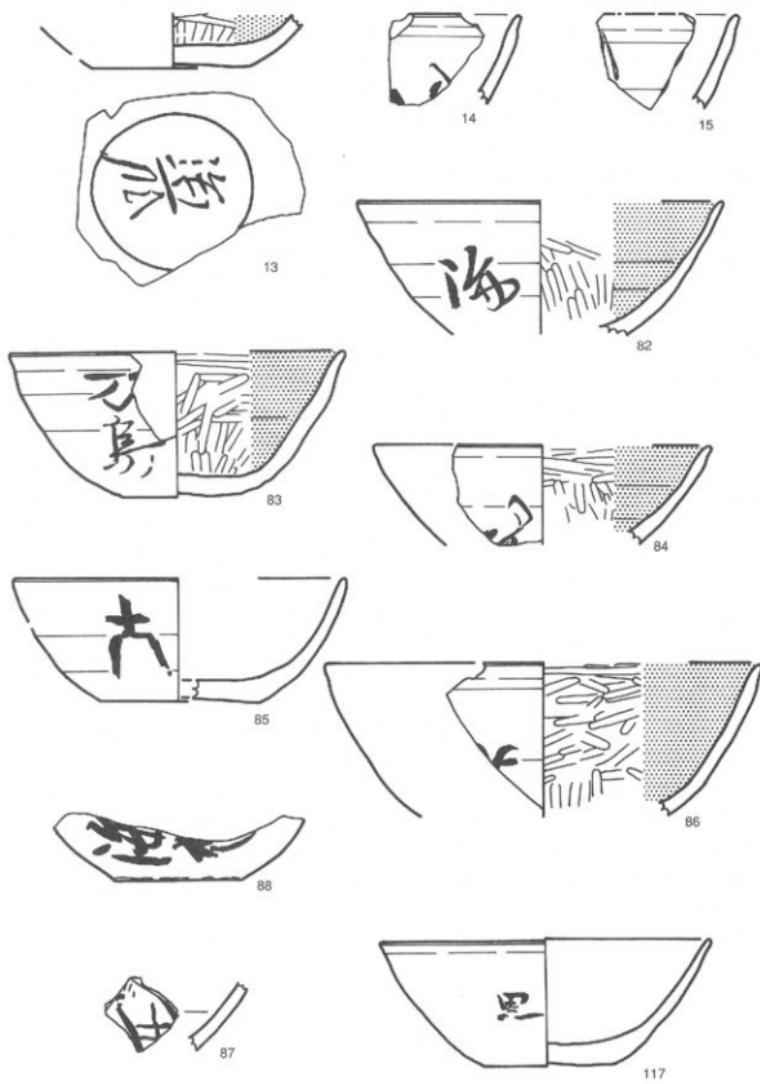
本遺跡からは墨書き土器が計11点出土している。全て住居跡の床直上及び埋土中からの出土である。特にC II b 6住居跡からは7点出土している。

墨書き土器の器種は全てロクロ使用の上師器壺で、11点中8点は内面がミガキ後黒色処理されている。また、底部が残存しているものが5点あるが、いずれも底部切り離しは回転糸切りである。墨書きされている部位は、底部1点、体部10点である。体部に墨書きされているもののうち1点は横位に、4点は正位に墨書きされており、他は細片であり不明である。

墨書き土器には地名、人名、所属、吉祥句等が記されるといわれる。本遺跡で出土した墨書き土器のうち3点(遺物番号13・82・88)には、「海」と考えられる文字が認められる。もし地名であるならば、本遺跡の周辺には「海」のつく地名は北約3kmの「上海上」、東北約6kmの「下海上」があるが、書体からそれに該当するとは考えられず、他地域の地名の可能性がある。また、「海」が共通していることから人名又は所属の可能性も考えられる。いずれにしろ詳細は不明である。なお出土した墨書き土器については図72にまとめてある。

二戸市を含む馬淵川流域では、これまでに中曾根II遺跡(1点)、火行塚遺跡(1点)、大向上平遺跡(1点)(以上二戸市)、田中3遺跡(1点)、田中4遺跡(2点)、上野遺跡(3点)(以上一戸町)、海上I遺跡(1点)、五庵I遺跡(2点)、飛鳥台地遺跡(14点)(以上淨法寺町)、肩塙I遺跡(1点)(安代町)などから、合計33点の墨書き土器が出土している。本遺跡では今回11点の墨書き土器が出土しており、これは馬淵川流域でこれまでに出土した点数の三分の一に相当する。

このようにたくさんの墨書き土器が出土したことから、當時この遺跡内に識字層が居住していたことが推測される。



第72図 門松遺跡出土墨書き器

②「北陸型土器」について

本遺跡からは北陸型の土師器長胴甕が出土している。B II f 0 住居跡（遺物番号73）とC II b 6 住居跡（遺物番号103・104・105）からの出土である。いずれも外面には平行敲き目痕が、内面には平行當て具痕が残り、104・105には一部指頭圧痕が残っている。104は底部が丸底風におさまっているが、底部と体部に敲き目の連続性がみられず、そのためか全体的に叩き出しが少ない。105は104と同様の方法で成形した後、底部を平らに調整したと考えられる。また、接合しないが73・103・104は同一個体の可能性がある。

北陸型の土師器長胴甕は、外面は底部から体部上半部までがタタキ、それより上部がカキメ、タタキとカキメの間にタタキ痕を消すかのようにケズリがあり、内面は底部から体部上半部までが當て具痕が残り、それより上部にはカキメ痕が残るのが一般的で、時代が新しくなるとケズリが減少又は施されなくなる。本遺跡出土の長胴甕は、カキメやケズリは見られないが、外面にタタキが施され、底部が若干叩き出されて丸底風に調整されている点が北陸型の土器の特徴をもつものといえる¹。また、底部はタタキ出しが強い跑弾型のものと弱い平底型のものがあるが、本遺跡出土の104は叩き出しが弱いことから平底型に相当すると考えられる²。

北陸型の土器は、これまで岩手県内では、江刺市松川遺跡、盛岡市志波城、細野遺跡など盛岡市以南で出土していたが、盛岡市より北での出土は本遺跡が初めてである。

ここで、隣の青森県と秋田県での出土例をみてみたい。

青森県では、内陸部の弘前市境関館遺跡や日本海側の浪岡町山元(3)遺跡、太平洋側の下田町中野平遺跡、八戸市黒坂遺跡などで出土している。本遺跡のある馬渕川下流域に位置する中野平遺跡と黒坂遺跡から出土した土器は、外面に敲き目痕、内面に當て具痕が残るが、特に中野平遺跡のものは當て具痕が全て格子目状である。黒坂遺跡の土器は平安時代、中野平遺跡の土器は9世紀中葉から後半と位置付けられている。

秋田県ではほぼ全域から出土しており、特に沿岸部からの出土が多い。主な遺跡は秋田城、下田遺跡、片野遺跡、千川原遺跡などで、計39遺跡から出土している。外面は平行敲き目痕、内面の當て具痕は同心円状のもの、弧状の曲線状のもの、平行線のものがあるが、ほとんどが平行線のものである。また、内面には指頭圧痕が見られる。時期は當て具痕が同心円状のものと弧状の曲線状のものを8世紀後半から9世紀前半、平行線のものを9世紀代としている。

両県の長胴甕と本遺跡の出土の長胴甕とを比較すると、外面の平行敲き目痕は青森・秋田両県どちらも同じであるが、内面に指頭圧痕が残るという点では、秋田県出土のものと共通性がある。

本遺跡で出土した北陸型土器が他から搬入されたものか、それとも製作技法に習熟した工人が本遺跡の周辺で製作したものかについては胎土分析を行っていないので特定できないが、本遺跡からの出土数が少ないと、周辺の遺跡から同様の土器が出土していないことから、他から搬入された可能性が高いといえる。どこから、どのような経路で本遺跡に土器が搬入されたのか、今後の調査により類例の出土が増えることで明らかになることを期待したい。

註

1 石川県埋蔵文化財センター・柿田祐司氏のご教示による。

2 富山県埋蔵文化財センター・池野正男氏のご教示による。

引用・参考文献

青森県教育委員会（1991）：「中野平遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第134集

青森県教育委員会（2001）：「黒坂遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第306集

岩手県立博物館（1982）：「岩手の上器」

利部 修（1997）：「山羽国の人庇長胴瓢をめぐって」 秋田県埋蔵文化財センター『研究紀要』第12号

本村 順次郎（1998）：「青森県内で発出された「高跡」について」 青森県埋蔵文化財センター『研究紀要』第3号

富山県埋蔵文化財センター（1991）：「富山県富山市南中田Ⅱ遺跡発掘調査報告書」

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1986）：「紀要Ⅷ」

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1987）：「飛鳥台地遺跡発掘調査報告書」岩埋文第120集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1987）：「岩舟久保遺跡発掘調査報告書」岩埋文第129集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1992）：「八ツ長遺跡発掘調査報告書」岩州文第168集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2000）：「人向上平遺跡発掘調査報告書」岩埋文第335集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：「大向Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩埋文第387集

門松遺跡のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

二戸市に所在する門松遺跡は、北上山地北部を流れる馬淵川の支流である十文字川左岸の段丘上に位置する。標高は約150mであり、十文字川との比高は5~6mである。発掘調査では、多数の堅穴住居跡や陥穴、溝、土坑などが検出されている。これらのうち、堅穴住居跡は、伴出する遺物から、縄文時代後期初頭、奈良時代、平安時代の3つの時期が確認されている。また、陥穴は縄文時代、溝は平安時代と考えられており、土坑については時期・性格とともに不明とされている。

本報告では、調査区北部の基本土層中および奈良時代と平安時代の住居跡の覆土中に認められた火山灰(テフラ)層について、その特徴を把握し、既存の資料との比較から給源火山と噴出年代を特定する。これは、検出された遺構の年代に関わる重要な資料となるものである。

1. 試料

試料は、調査区北部で作成された土層断面②における2層より採取された堆積物1点である。発掘調査所見によれば、土層断面②では、上位より1層から7層まで分層され、1層は耕作土である黒色シルト層、2層は十和田a火山灰層、3層は黒色シルト層、4層は中揮火山灰を多く含む黒褐色土層、5層は中揮火山灰層、6層は南部浮石粒を含む黒色シルト層、7層は南部浄石層と記載されている。すなわち、試料が採取された2層は、十和田a火山灰であることが予想されている。また、2層と同様の火山灰層は、奈良時代の住居跡の覆土層中にも、その中部に比較的明瞭な層位として確認されている。

採取された試料は、暗灰黄色を呈する細繙混じりの砂である。

2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3. 結果

砂分中には、多量の軽石と火山ガラスおよび少量のスコリアが確認された。軽石の最大径は約4.0mm、粒径の淘汰度はやや良好である。軽石は、灰白色でスポンジ状の発泡をしているものの、同色で発泡が伸びて纖維束状のもの、さらに灰褐色を呈し、発泡が伸びて纖維束状のものとが混在する。火山ガラスは、細

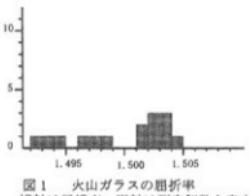


図1 火山ガラスの屈折率
横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す。

砂～極細砂径、無色透明で塊状および纖維束状の軽石型が多く、少量の無色透明のバブル型と微量の褐色の軽石型およびバブル型が含まれる。火山ガラスの屈折率は1.493～1.504（モードは1.502～1.503）である（図1）。スコリアは、最大径約2.0mm、黒色で発泡やや不良のものと黒褐色で発泡やや不良のものが混在する。

4. 考察

分析結果で述べた軽石および火山ガラスの特徴と屈折率およびスコリアを含むこと、そして門松遺跡の地理的位置と基本土層における層位および奈良時代の住居跡覆土における層状を考慮し、これまでに研究された東北地方におけるテフラの層状（例えば、町田ほか（1981；1984）、Arai et al. (1986)、町田・新井（1992）など）との比較から、基本土層の2層は十和田aテフラ（To-a）の降下堆積層であると考えられる。To-aの噴出年代については、A.D.915年（町田・新井, 1992；早川・小山, 1998）とされているから、奈良～平安時代とされる堅穴住居跡の覆土層において、To-a層の堆積の有無は、その時期を特定するよい指標となる。すなわち、To-a噴出のA.D.915年当時、奈良時代末と考えられている住居B II h 6住はすでに廃絶し、埋積が3層まで進んでいたと考えられる。

引用文献

- Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyauchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K. (1986) Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II —Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido—. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, P. 223-250.
- 古澤 明 (1995) 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, P. 123-133.
- 早川由紀夫・小山真一 (1998) 日本海をはさんで10世紀に相次いで起った二つの大噴火の年月日--十和田湖と白頭山--. 火山, 43, P. 403-407.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 276p., 東京大学出版会.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, P. 562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 (1984) テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－. 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, P. 865-928.

図版1 軽石・火山ガラス



1. T o - a の軽石 (土層断面② 2層)



2. T o - a の火山ガラス (土層断面② 2層)

4mm
(1) 0.5mm
(2)

写 真 図 版

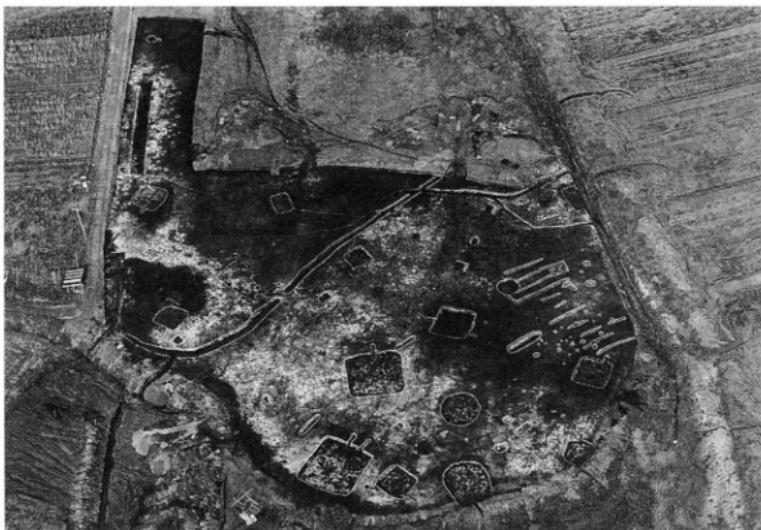


遺跡遠景(西から)



調査区近景(北西から)

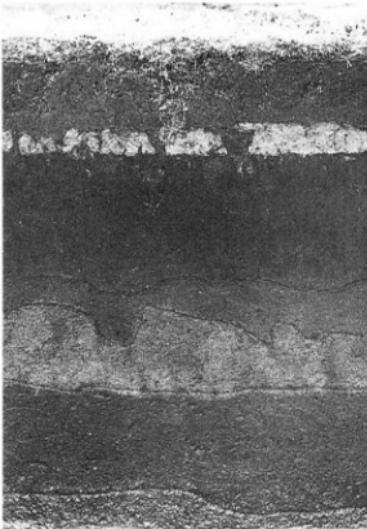
写真図版1 遺跡遠景、調査区近景



遺跡全景（南から）



基本土層Ⅰ（東から）

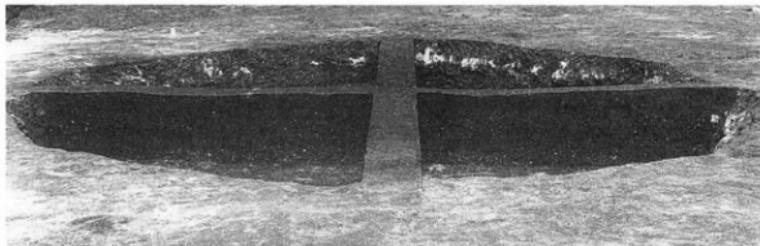


基本土層Ⅱ（東から）

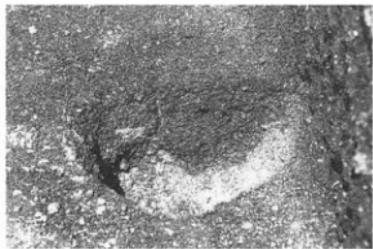
写真図版2 遺跡全景、基本土層Ⅰ・Ⅱ



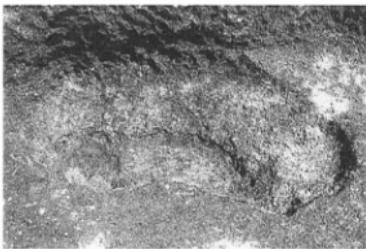
B III i 0 住居跡完掘（南から）



B III i 0 住居跡断面（南から）

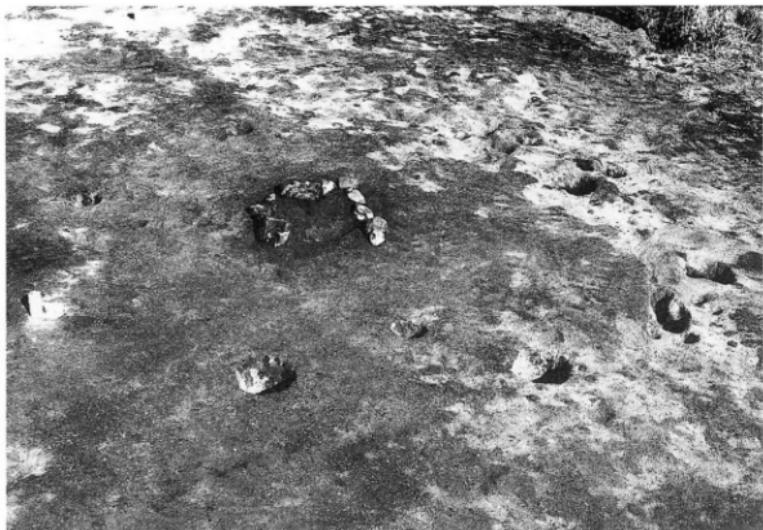


P 3 断面（南から）



P 25 完掘（南西から）

写真図版 3 B III i 0 住居跡



C III a 3 住居跡完掘全景（西から）



炉跡平面（西から）



炉跡断面（西から）



作業風景（北から）

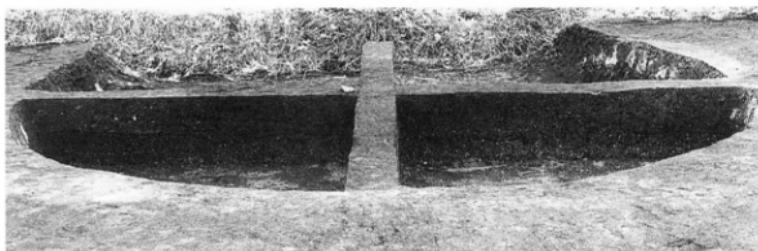


住居跡検出状況（南東から）

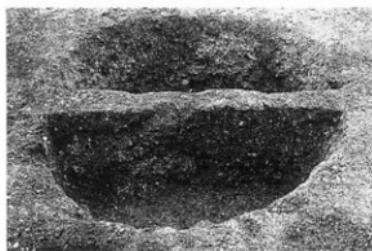
写真図版4 C III a 3 住居跡、作業風景、住居跡検出状況



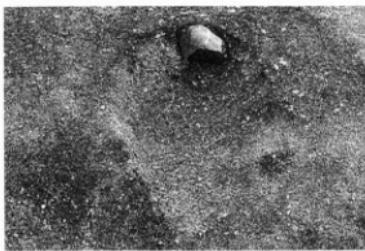
C II b 1 住居跡完掘全景（南西から）



C II b 1 住居跡断面（北西から）

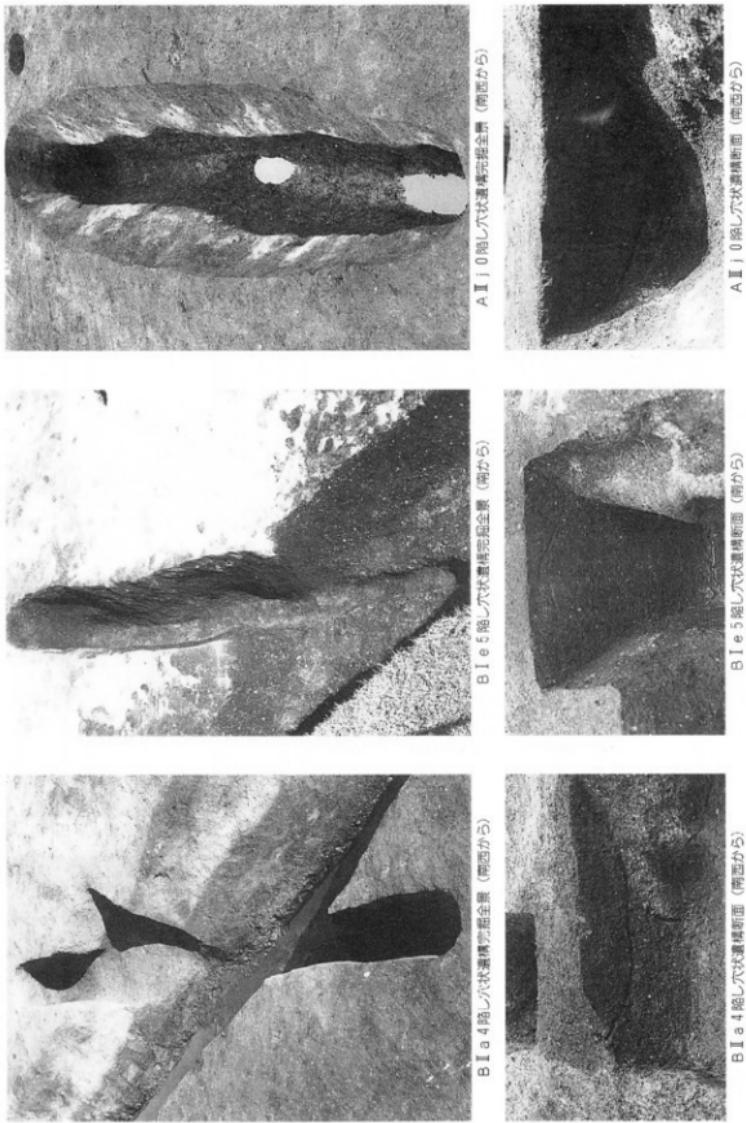


P 30 断面（西から）

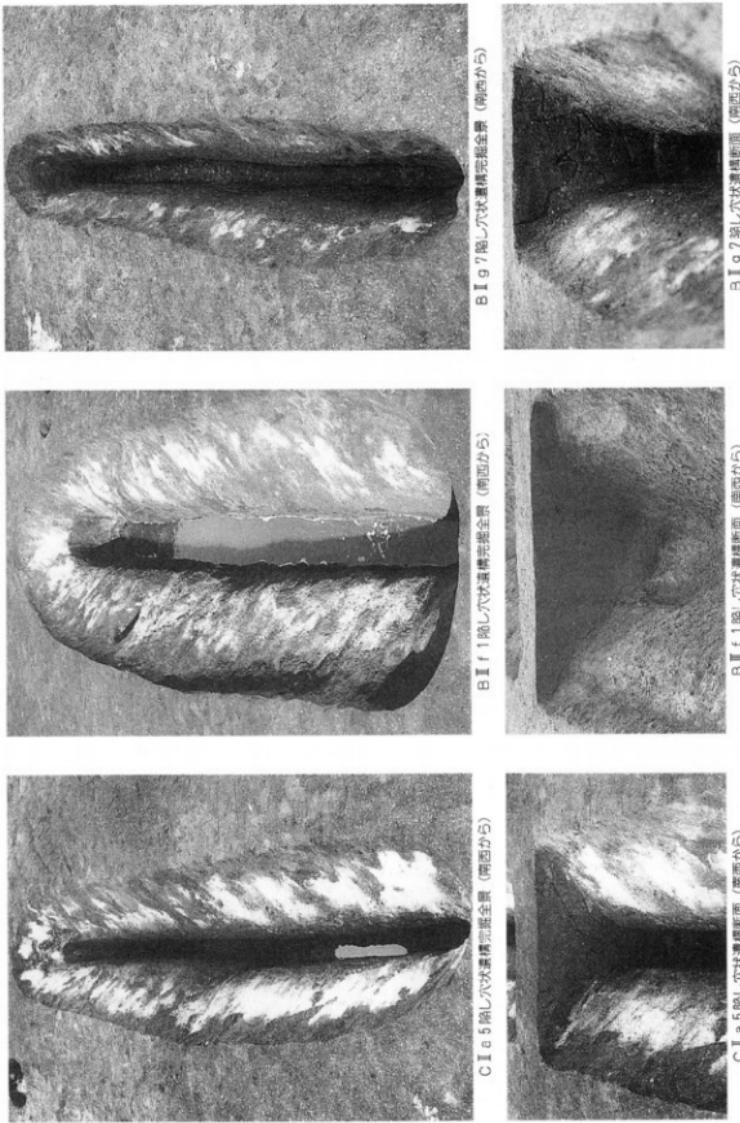


P 32 完掘（北西から）

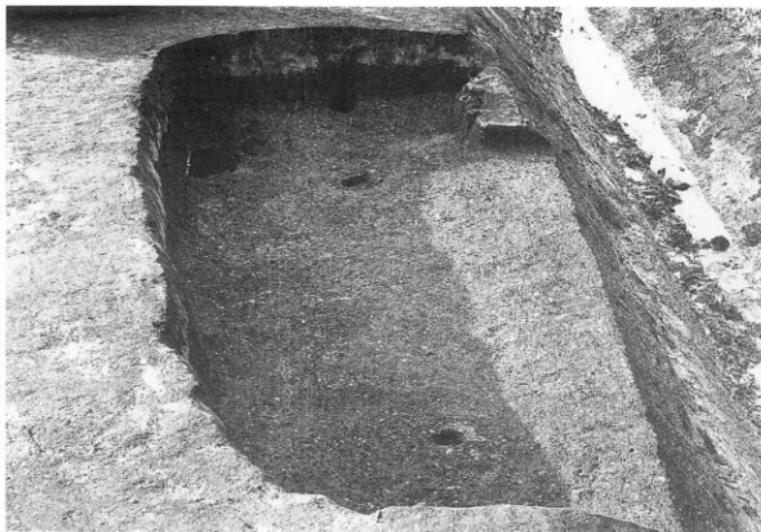
写真図版5 C II b 1 住居跡



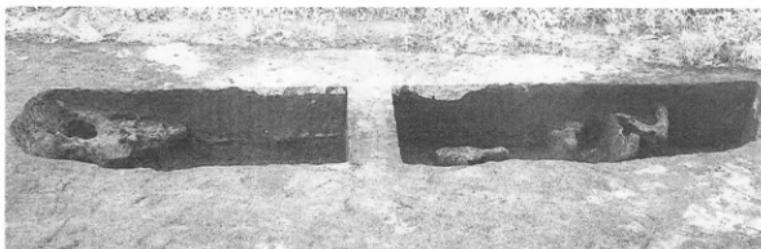
写真図版 6 A III j 0 · B I e 5 · B II a 4 陷し穴状遺構



写真図版7 B II g 7・B III f 1・C II a 5 陥し穴状遺構



A III h 1 住居跡完掘全景（南から）



A III h 1 住居跡断面（南西から）

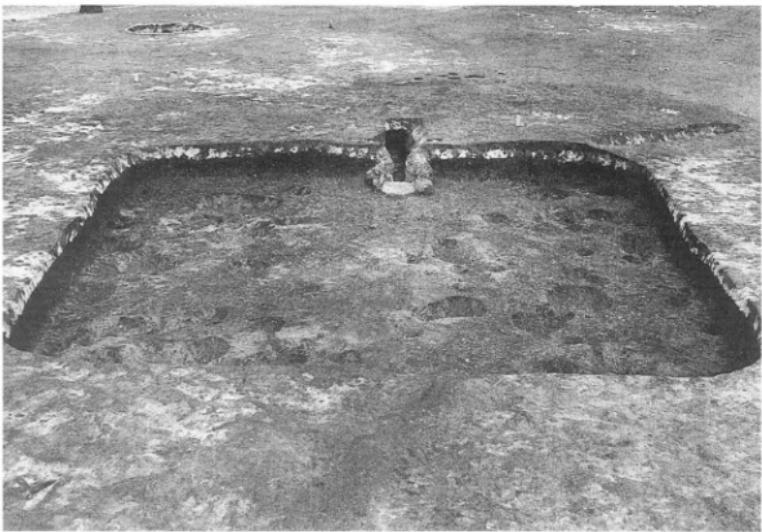


焼土断面（南から）

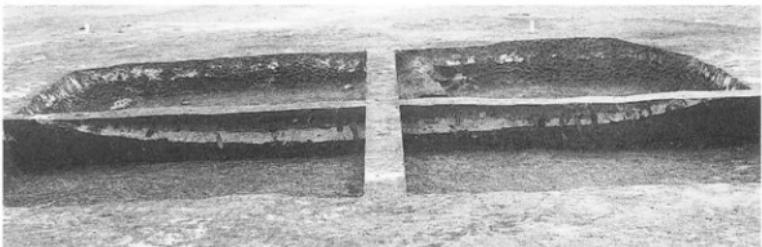


P 1 断面（南西から）

写真図版 8 A III h 1 住居跡



B II h 6 住居跡完掘全景（南東から）

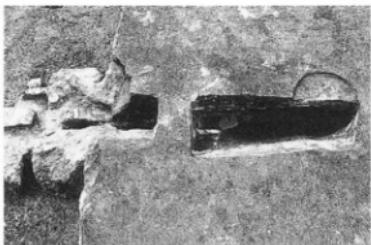


B II h 6 住居跡断面（南東から）



B II h 6 住居跡断面（南西から）

写真図版9 B II h 6 住居跡（1）



カマド縁部断面（北東から）



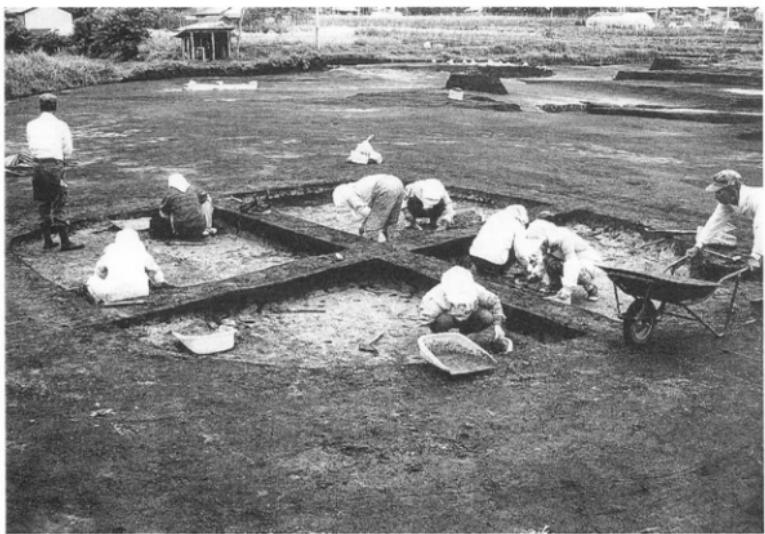
カマド袖部断面（南東から）



勾玉（左）、环（右）出土状況（南東から）



P2 碓板出土状況（西から）

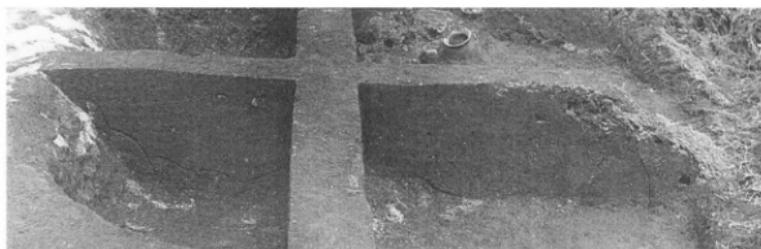


作業風景（南東から）

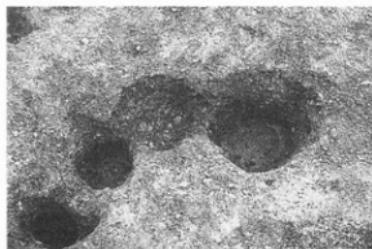
写真図版10 B II h 6 住居跡（2）、作業風景



B III j 4 住居跡完掘全景（南から）



B III j 4 住居跡断面（南から）

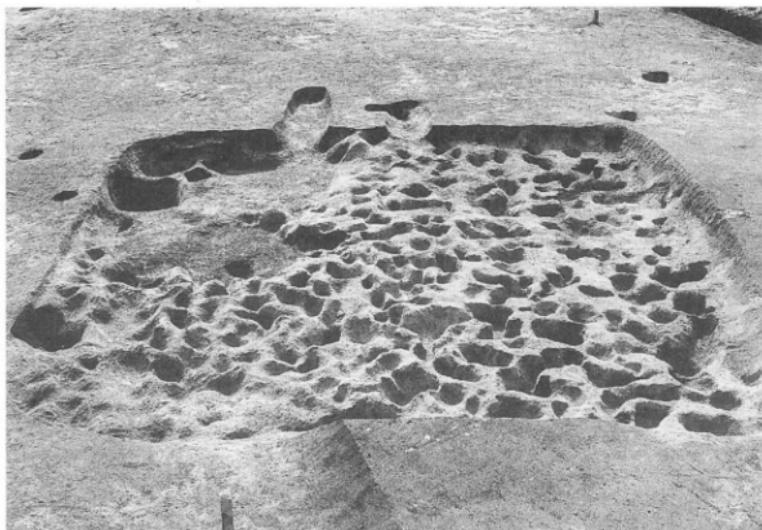


P 9～12 完掘（南東から）

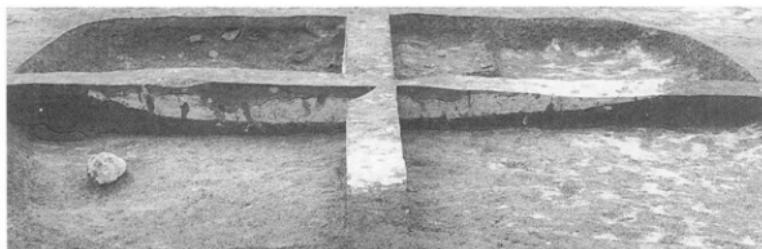


遺物出土状況（南から）

写真図版11 B III j 4 住居跡



B I c 5 住居跡完掘全景（北から）



B I c 5 住居跡断面（北から）



カマド焼道断面（西から）

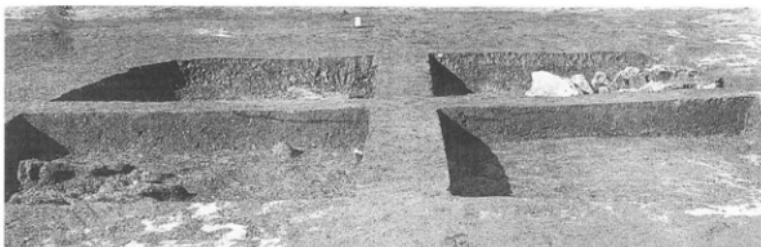


P 1 断面（北から）

写真図版12 B I c 5 住居跡



B I h 8 住居跡完掘全景（西から）



B I h 8 住居跡断面（南から）

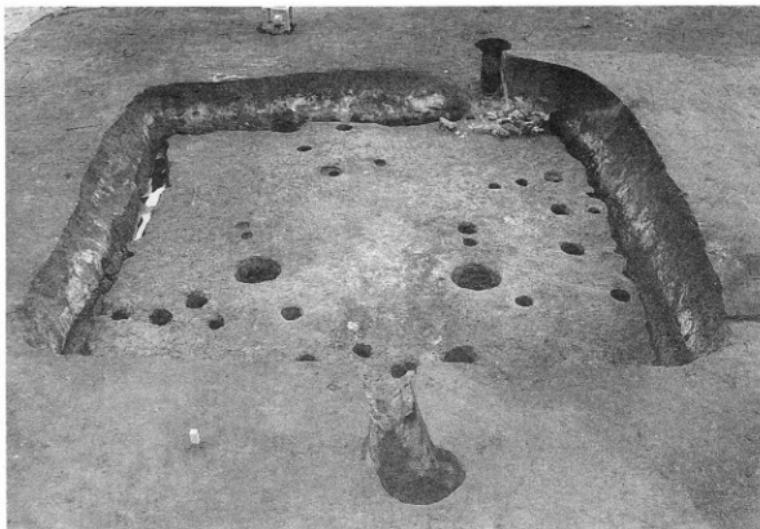


カマド燃焼部焼土断面（西から）

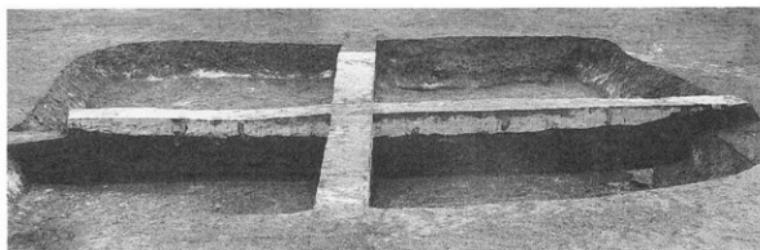


遺物出土状況（南から）

写真図版13 B I h 8 住居跡



B II e 8 住居跡完掘全景（西から）



B II e 8 住居跡断面（南から）



1号カマド完掘（東から）

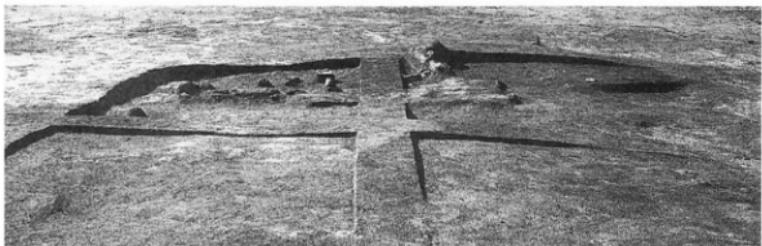


2号カマド煙道部横断面（西から）

写真図版14 B II e 8 住居跡



B II f 0 住居跡完全景（西から）



B II f 0 住居跡断面（東から）

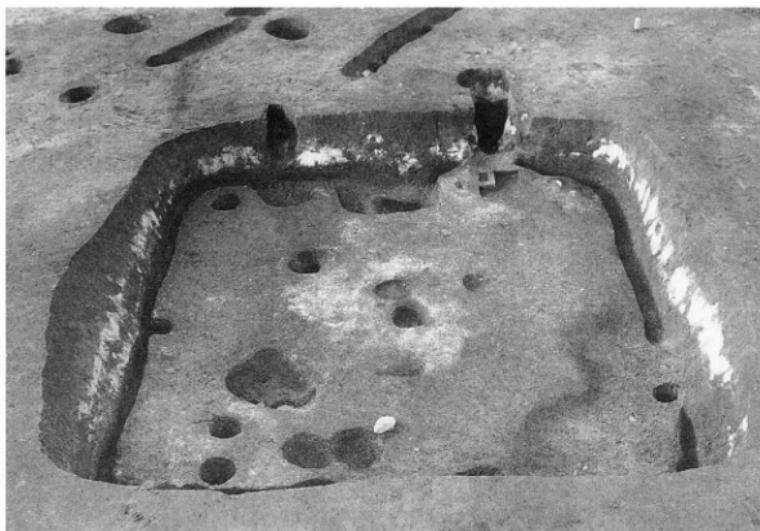


カマド完窯（西から）

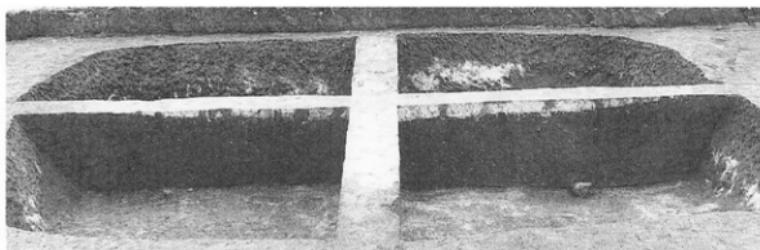


カマド燃焼堆積土断面（西から）

写真図版15 B II f 0 住居跡



B III f 3住居跡完掘全景（南から）



B III f 3住居跡断面（西から）

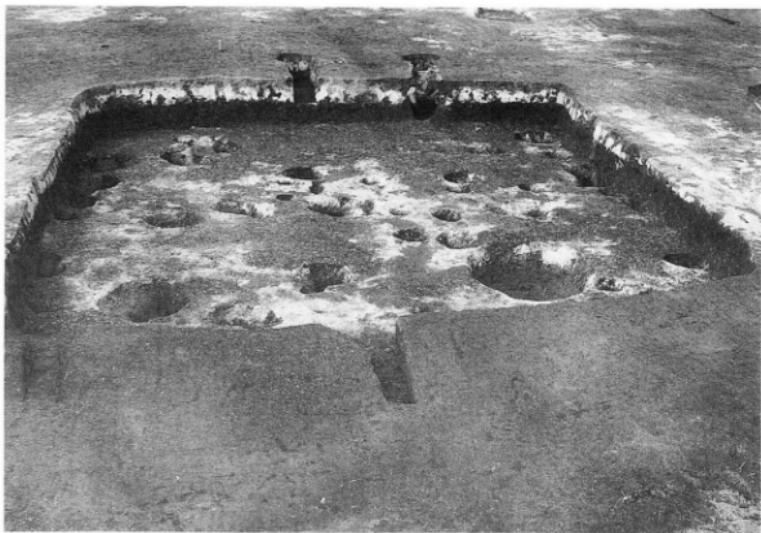


カマド煙道部横断面（東から）

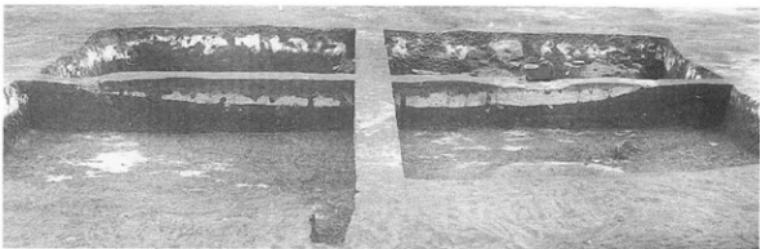


P 12断面（西から）

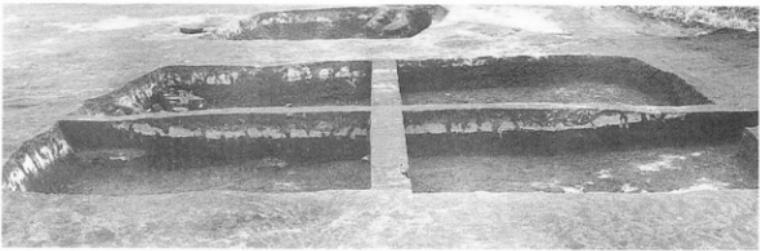
写真図版16 B III f 3住居跡



C II b 6 住居跡完掘全貌（南から）



C II b 6 住居跡断面（南から）



C II b 6 住居跡断面（西から）

写真図版17 C II b 6 住居跡（1）



1号カマド完掘（南から）



2号カマド完掘（南から）



P21完掘（南から）



遺物出土状況（南から）

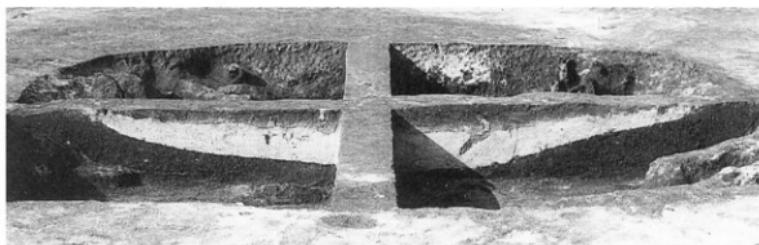


C II c 8住居跡炭化材出土状況（北西から）

写真図版18 C II b 6住居跡（2）、C II c 8住居跡（1）



C II c 8 住居跡完掘全景（北西から）



C II c 8 住居跡断面（南西から）



カマド煙道部縦断面（南西から）



遺物出土状況（北西から）

写真図版19 C II c 8 住居跡（2）



B II b 0 住居状遺構完掘全景（南東から）

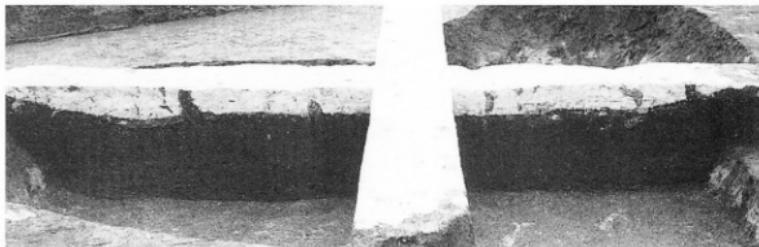


B II c 4 住居状遺構完掘全景（南西から）

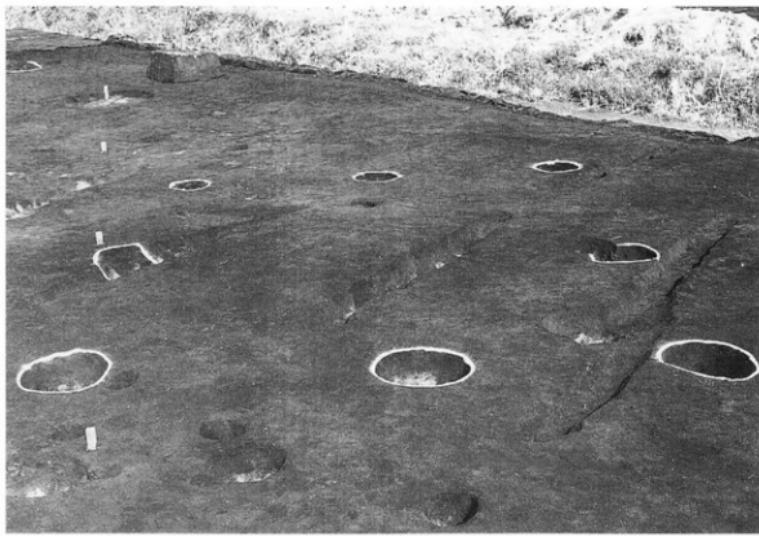
写真図版20 B II b 0・B II c 4 住居状遺構 (1)



B II b 0 住居状遺構断面（北西から）

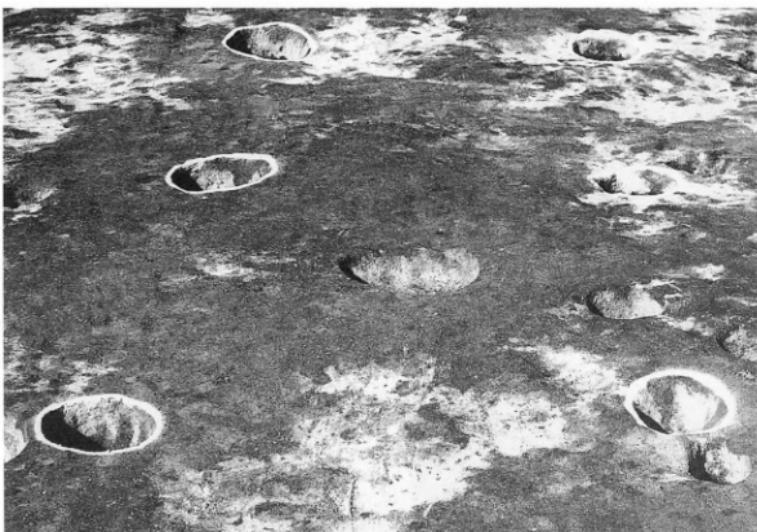


B II c 4 住居状遺構断面（南東から）

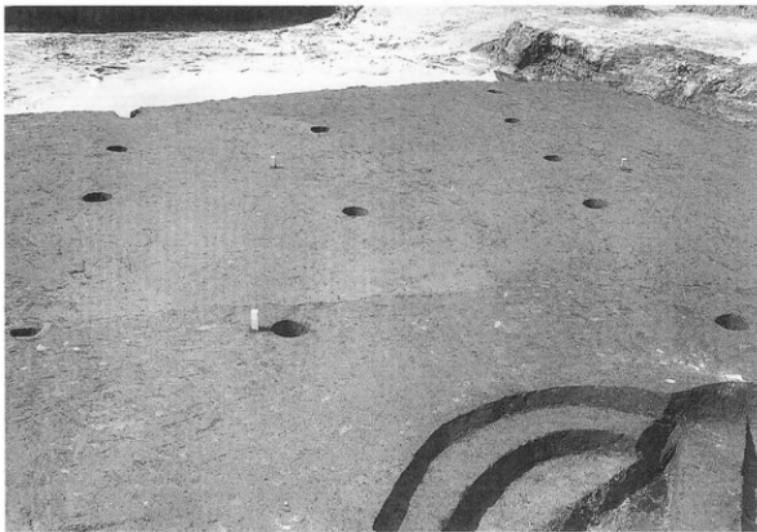


1号掘立柱建物跡完掘全景（南から）

写真図版21 B II b 0・B II c 4 住居状遺構（2）、1号掘立柱建物跡



2号煙立柱建物跡完廻全景（南東から）

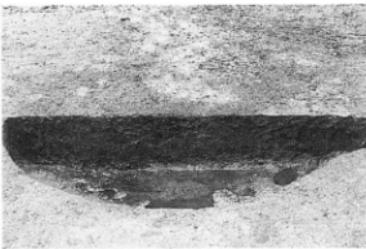


3号煙立柱建物跡完廻全景（東から）

写真図版22 2号・3号煙立柱建物跡



A I c 2 土坑完掘全景（南から）



A I c 2 土坑断面（南から）



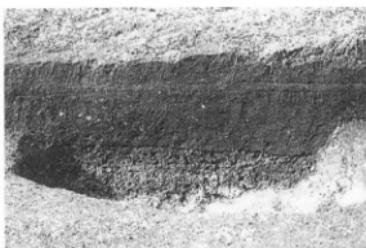
B I h 6 ① 土坑完掘全景（南西から）



B I h 6 ① 土坑断面（北東から）



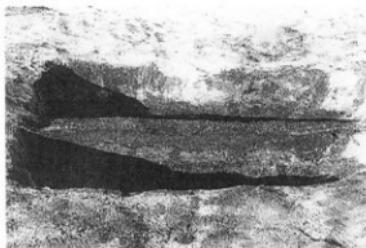
B I h 6 ② 土坑完掘全景（南西から）



B I h 6 ② 土坑断面（北東から）



B I i 9 土坑完掘全景（南西から）



B I i 9 土坑断面（南西から）

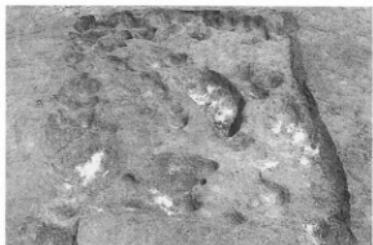
写真図版23 A I c 2・B I h 6①・②・B I i 9 土坑



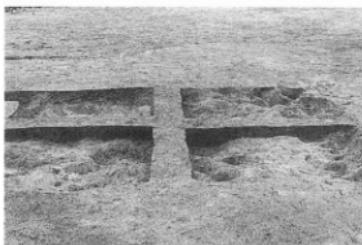
B II h 0 土坑完掘全景（西から）



B II h 0 土坑断面（西から）



B II b 1① 土坑完掘全景（南西から）



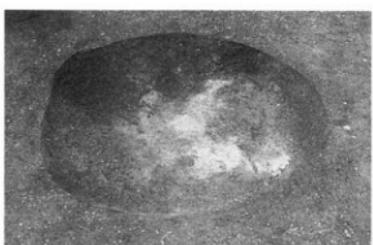
B II b 1① 土坑断面（南東から）



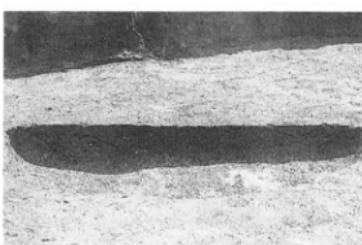
B II b 1② 土坑完掘全景（東から）



B II b 1② 土坑断面（東から）

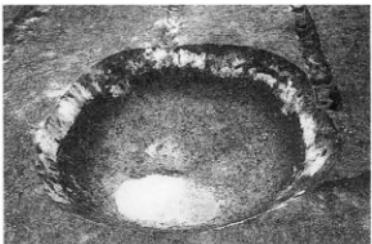


B II b 2 土坑完掘全景（西から）



B II b 2 土坑断面（西から）

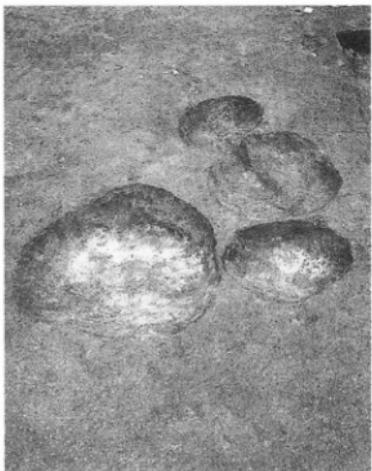
写真図版24 B II h 0 • B III b 1①・② • B III b 2 土坑



B III c 0 土坑完掘全景（南西から）



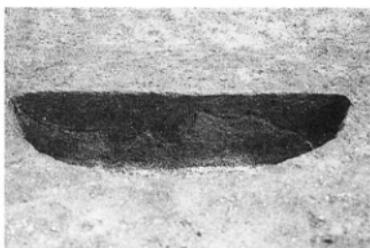
B III c 2①土坑断面（南西から）



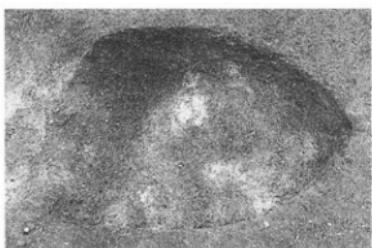
B III c 2①・②・③・④土坑完掘全景（北東から）



B III c 2②(右)・③(左) 土坑断面（東から）



B III c 2④土坑断面（南西から）

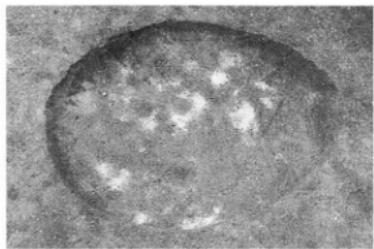


B III c 2⑤土坑完掘全景（南から）

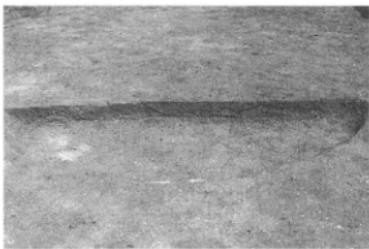


B III c 2⑥土坑断面（南から）

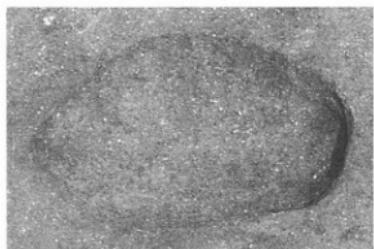
写真図版25 B III c 0・B III c 2①・②・③・④・⑤土坑



B III c 2⑥土坑完掘全景（南東から）



B III c 2⑥土坑断面（南東から）



B III f 2①土坑完掘全景（南から）



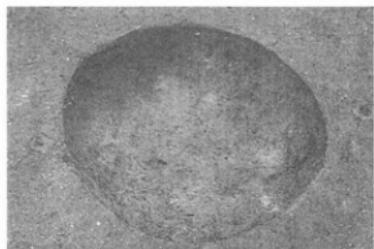
B III f 2①土坑断面（南から）



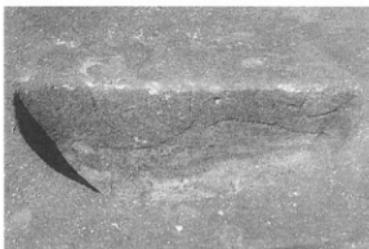
B III f 2②土坑完掘全景（南東から）



B III f 2②土坑断面（南東から）

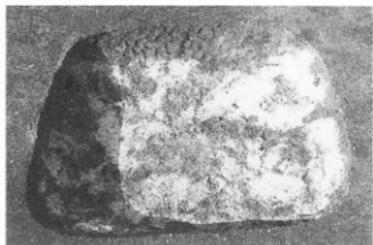


B III f 2③土坑完掘全景（南西から）

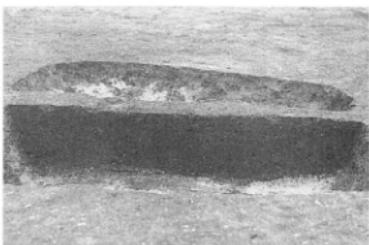


B III f 2③土坑断面（南西から）

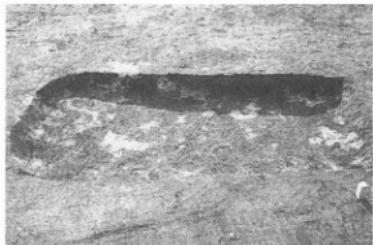
写真図版26 B III c 2⑥・B III f 2①・②・③土坑



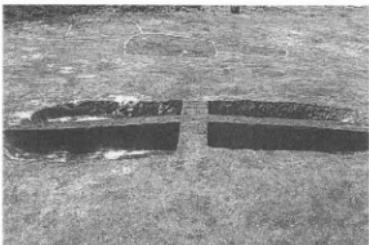
B II i 2 ① 土坑完掘全景（南東から）



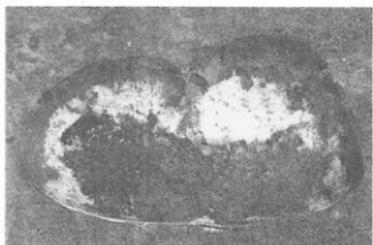
B II i 2 ② 土坑断面（南東から）



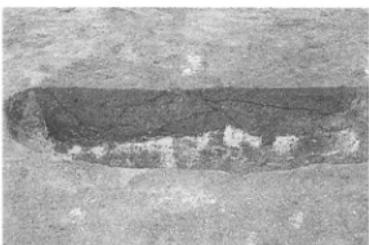
B II i 2 ③ 土坑完掘全景（南東から）



B II i 2 ④ 土坑断面（南東から）



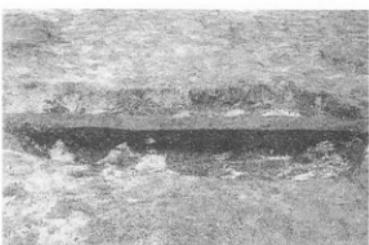
C II a 3 ① 土坑完掘全景（西南から）



C II a 3 ② 土坑断面（西南から）



C II a 8 ① 土坑完掘全景（西から）

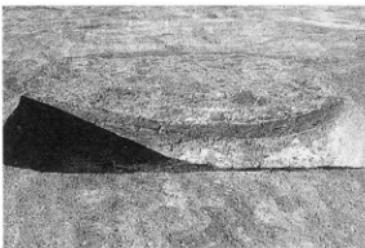


C II a 8 ② 土坑断面（西から）

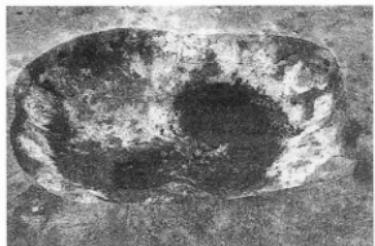
写真図版27 B II i 2 ①・②・C II a 3・C II a 8 土坑



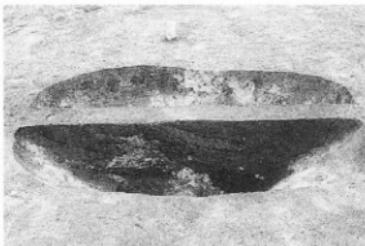
C III a 1 土坑完掘全景（南から）



C III a 1 土坑断面（南から）



C III a 2 土坑完掘全景（南東から）



C III a 2 土坑断面（南東から）

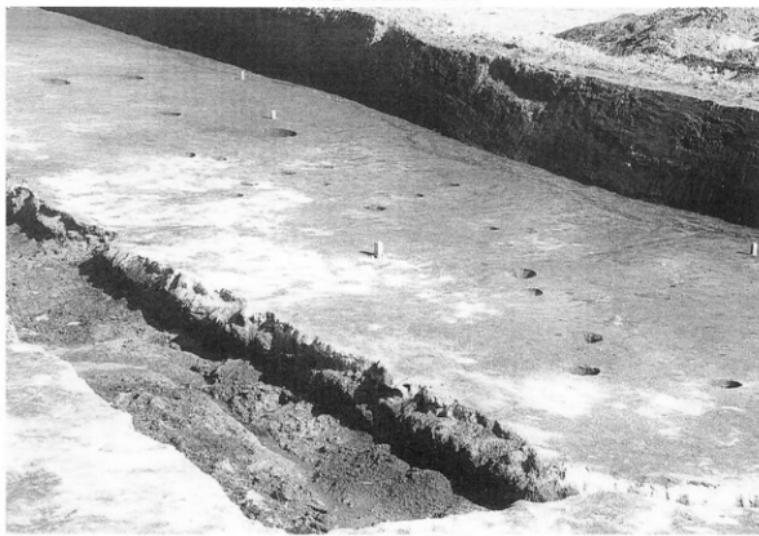


東部柱穴状小土坑群（南西から）

写真図版28 C III a 1・C III a 2 土坑、東部柱穴状小土坑群



中央部柱穴状小土坑群（南から）



西部柱穴状小土坑群（南から）

写真図版29 中央部・西部柱穴状小土坑群



溝跡完掘全景（北から）



溝跡断面A-A'（北東から）



溝跡断面B-B'（北から）



溝跡断面C-C'（南から）



作業風景（北から）

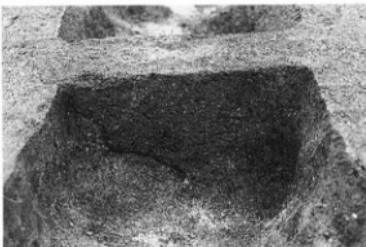
写真図版30 溝跡、作業風景



1～12号溝状遺構完掘全景（北西から）



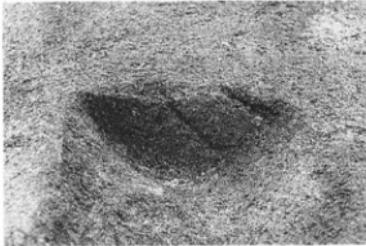
1・2・9・10・11号溝状遺構（南西から）



1号溝状遺構断面（南西から）



6号溝状遺構断面（南西から）



10号溝状遺構断面（南西から）

写真図版31 溝状遺構（1）



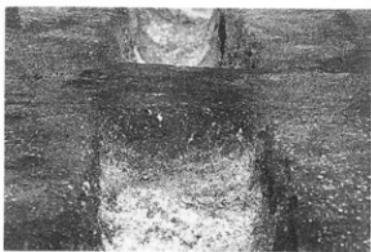
13号溝状遺構完掘全景（北西から）



13号溝状遺構断面（北西から）

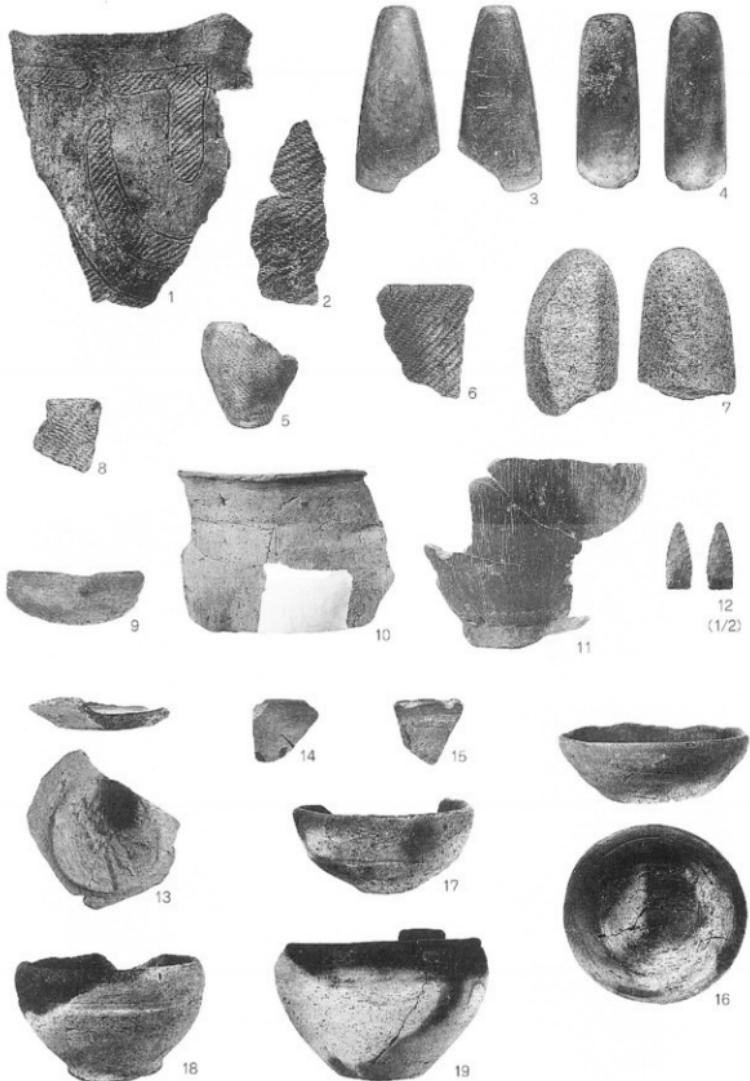


15号溝状遺構断面（南東から）



14号溝状遺構断面（南東から）

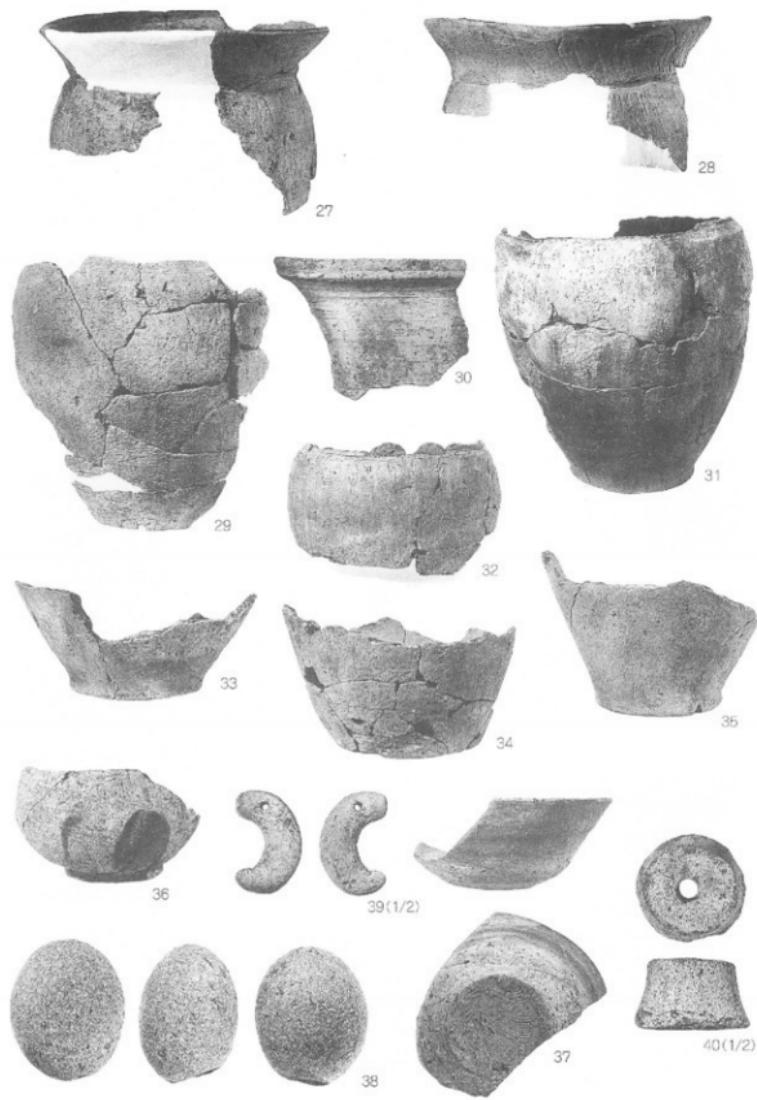
写真図版 32 溝状遺構（2）



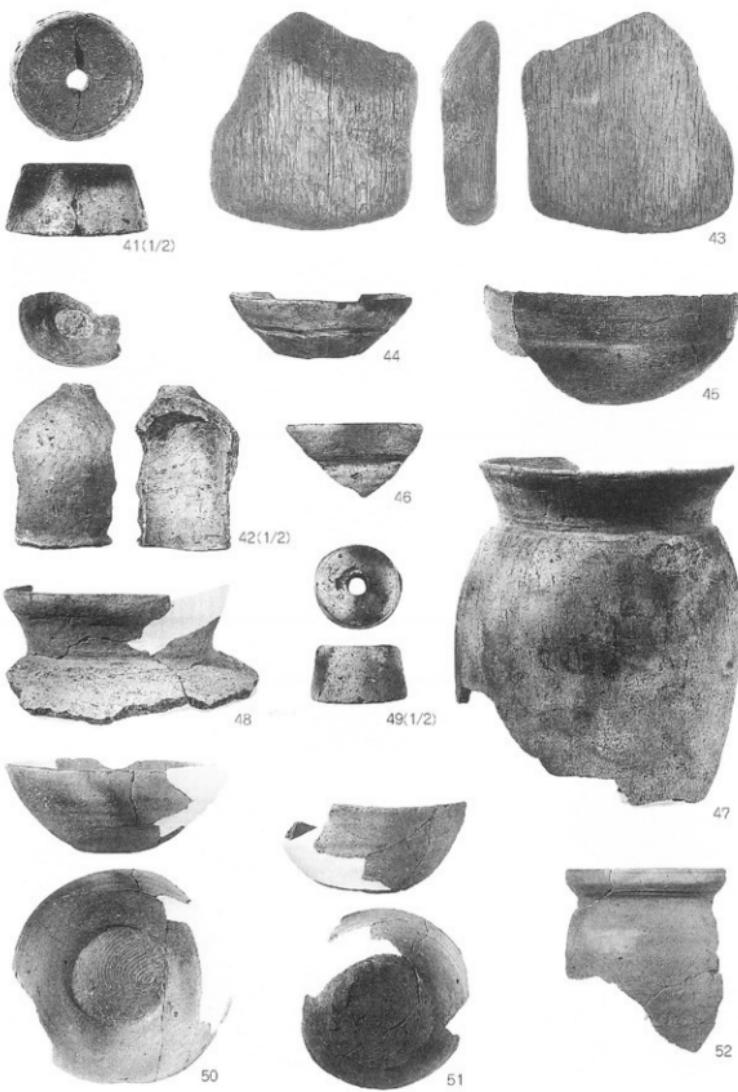
写真図版33 遺構内出土遺物（1）



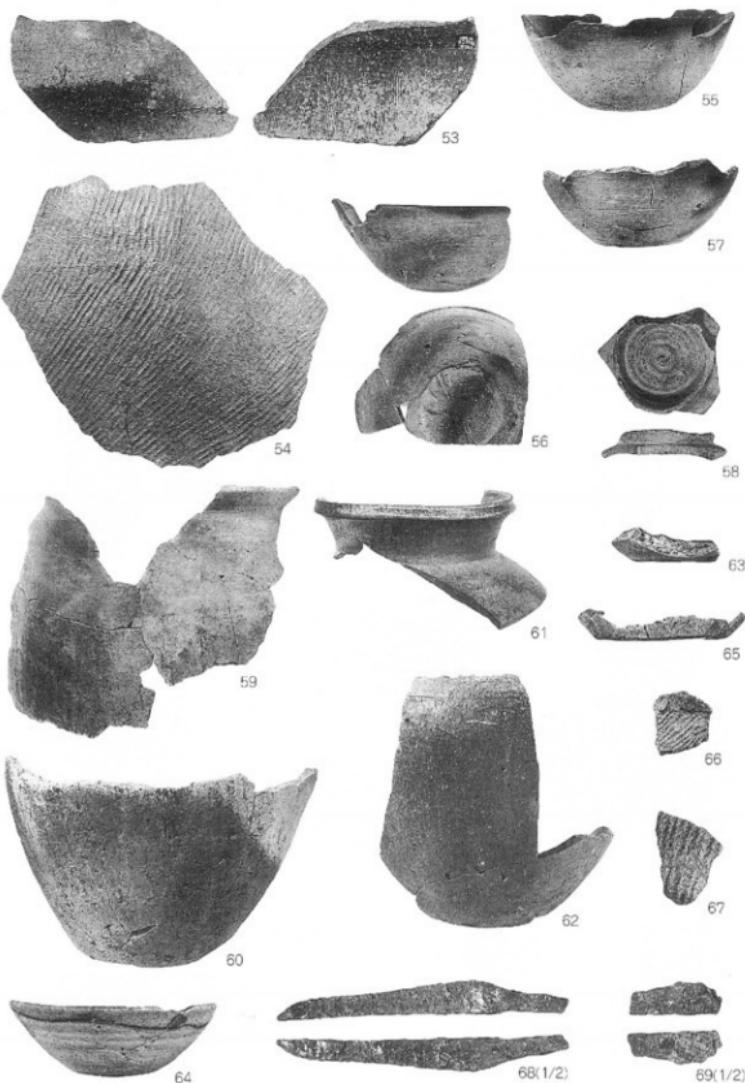
写真図版34 造構内出土遺物（2）



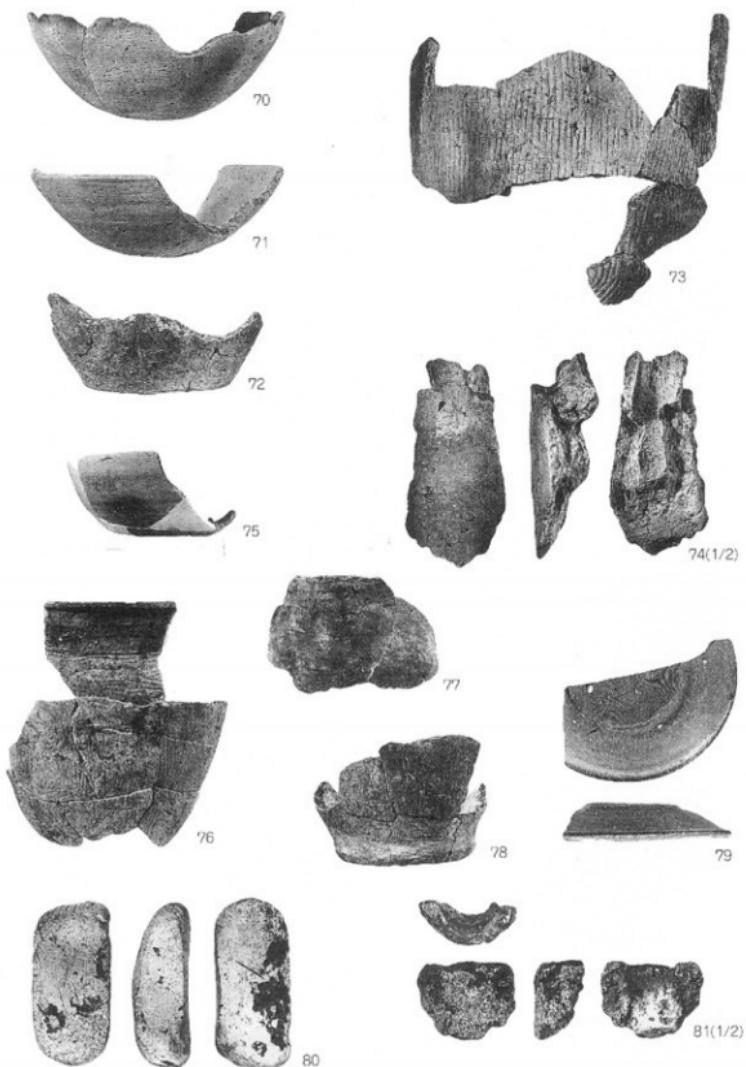
写真図版35 遺構内出土遺物 (3)



写真図版36 遺構内出土遺物 (4)



写真図版37 遺構内出土遺物（5）



写真図版38 造構内出土遺物 (6)



写真図版39 造構内出土遺物（7）



102



98



99



97(1/4)



101



100

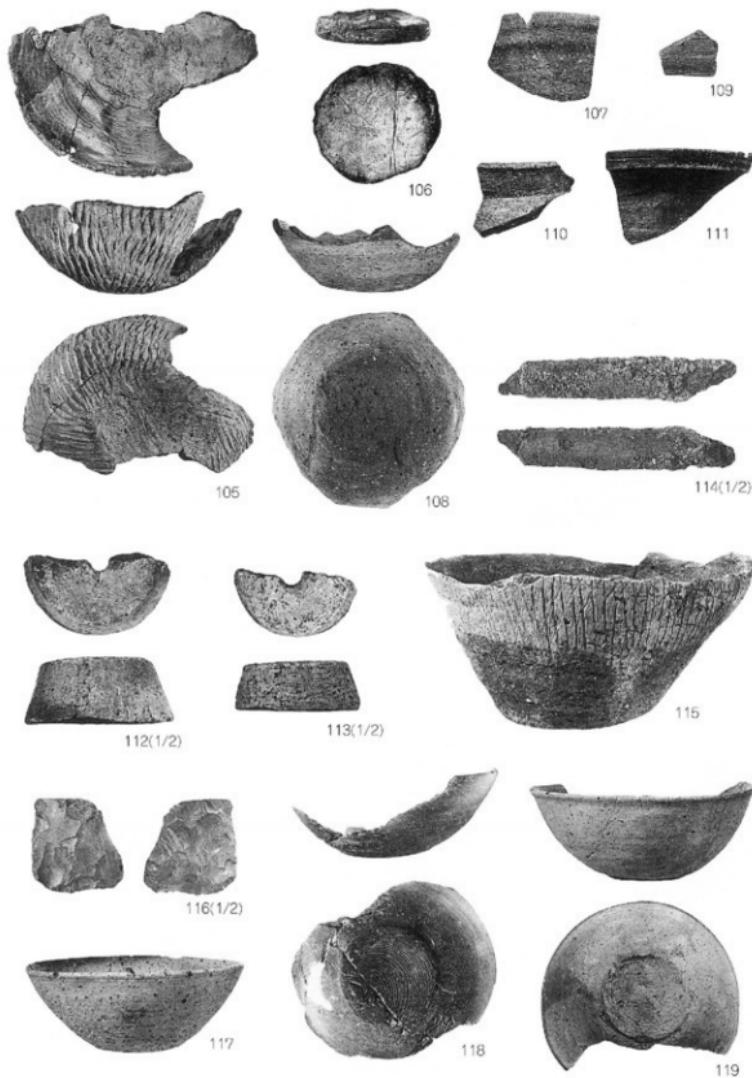


103



104

写真図版40 遺構内出土遺物 (8)



写真図版41 遺構内出土遺物 (9)



写真図版42 遺構内出土遺物 (10)、遺構外出土遺物 (1)



136



137



138



139

写真図版43 遺構外出土遺物（2）

報告書抄録

| | | | | | | | |
|--------------|---|------------|--|--|--------------------------------------|-------------------|-----------------------------|
| ふりがな | かどまついせきはっくつちょうさほうこくしょ | | | | | | |
| 書名 | 門松遺跡発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | 中山間地域総合整備事業・斗米地区第5号埋蔵文化財発掘調査 | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第413集 | | | | | | |
| 編著者名 | 佐々木信一・木村ひかり | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | | | | | | |
| 所在地 | 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001・9002 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2002年12月26日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 門松遺跡 | 岩手県二戸市下斗米字門松55ほか | 03213 | I E 98-1271 | 40度16分51秒 | 141度14分11秒 | 20010716~20011031 | 中山間地域総合整備事業（斗米地区）に関する緊急発掘調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 門松遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 | 竪穴住居跡 3棟 (後期初頭) 陥し穴状遺構 6基 | 縄文土器（後期初頭） 土師器・須恵器 土製品 鉄製品（刀子） 石器 その他（板材） | 平安時代の竪穴住居跡 から墨書き土器11点と北陸型長胴甕4点が出土 | | |
| | | 奈良時代 | 竪穴住居跡 3棟 住居状遺構 2棟 溝跡 1条 | | | | |
| | | 平安時代 | 竪穴住居跡 7棟 | | | | |
| | | 不明 | 掘立柱建物跡 3棟 土坑 24基 柱穴状小土坑 270基 溝状遺構 15条 | | | | |

平成14年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長 木村 界 副所長 高橋 正儀

[管理課]

| | | |
|------|-----------|---------------------------------------|
| 課長補佐 | 長 正善直賢 | 哲光美 |
| 課長補佐 | 佐佐木 | 勝文介透光郎 |
| 主査 | 岸内田 | 一淳也進盛彦明則人晃稔文郎拓郎和晴敬和昭枝寛治黙征美造剛一美卓り轉晋彦敦志 |

[調査第一課]

| | | |
|--------|-------------|---|
| 課長補佐 | 佐佐木 | 勝文介透光郎一淳也進盛彦明則人晃稔文郎拓郎和晴敬和昭枝寛治黙征美造剛一美卓り轉晋彦敦志 |
| 課長補佐 | 木坂松野中子部 | 清義 |
| 文化財専門員 | 木橋内田 | 大信則 |
| 文化財調査員 | 佐佐木 | 眞昭孝勝直 |
| | 佐佐木 | 克幸昭太郎 |
| | 高小山吉 | 謹紀正 |
| | 吉龜佐早 | 正忠勝浩 |
| | 小金野金阿 | 弘絵恵 |
| | 阿羽高 | 健真弘 |
| | 長尾杉村本音西村福北八 | 由か大 |
| | 丸北島中坂雲玉吉 | 一公 |
| | 太江立 | 公 |

期限付調査員

| | | |
|----|-------|-------|
| 嘱託 | 橋藤沢藤 | 雄子子子 |
| 嘱託 | 高加湯伊藤 | 照美代邦滋 |
| 嘱託 | 橋藤沢藤 | 雅子子子 |

[調査第二課]

| | | |
|--------|-------------------------|---------------------------|
| 課長補佐 | 高橋 | 右衛門紀知登澄重明彦宏夫之一彦香郎美子和賀裕寛子臣 |
| 課長補佐 | 中金赤阿飯鈴久濱安星佐半皆瀧丸齋吉菊立駒原石崎 | 貴一裕泰由雅淳武英浩直麻里智美高 |
| 文化財専門員 | 木板松野中子部 | 川子石部坂木慈田藤藤澤川山藤田池花野崎 |
| 文化財調査員 | 佐佐木 | 山藤田池花野崎 |
| 期限付調査員 | 佐佐木 | 山藤田池花野崎 |

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第413集

門松遺跡発掘調査報告書

中山間地域総合整備事業・斗米地区第5号埋蔵文化財発掘調査

印刷 平成14年12月19日

発行 平成14年12月26日

発行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001・9002

FAX・(019) 638-8563

印刷 (有) 橋本印刷

〒020-0015 岩手県盛岡市本町通1丁目15-29

電話 (019) 652-1354

